
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

紀要

2019



2021年3月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



(表 紙) 草花双鳥鏡
：鹿田遺跡第24次調査

(裏表紙) 縄文時代後期中葉の炭化ダイズ
：津島岡大遺跡第5次調査



鹿田遺跡第24次調査出土銅鏡

(詳細は30ページ)

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要

2019

2021年3月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

本年度は、しばらくぶりの発掘調査を本学鹿田地区と津島地区で実施し、加えて、鹿田遺跡第17次調査の発掘調査報告書を刊行することができた。

本学では、1983年度から、埋蔵文化財調査室・埋蔵文化財調査研究センターを通じて、構内遺跡の調査・研究に取り組んできた。その長年の成果は、両地区に広がる鹿田遺跡・津島岡大遺跡の実態を描き出し、特に古代・中世の鹿田遺跡、縄文時代の津島岡大遺跡として注目される遺跡となっている。

そうした中で、本年度の鹿田遺跡の調査・報告では、集落を区切る境界の位置およびその実態を把握するという点で、非常に重要な知見を加えることとなった。面積的には大集落とは言えないが、だからこそ、一つの集落の内容が、その資料的豊かさと合わせて具体的に解明される遺跡はさほど多くはない。長年にわたって敷地内を丹念に調査し分析することがもたらした成果であろう。津島キャンパスでは、小規模な調査を除くと、約10年ぶりの発掘調査となった。同地点は縄文時代～中世の調査であったが、既往調査地点と隣接することから、従来の知見を検証する良い機会となった。残された課題の検証を積極的に行い、その評価を絶えず塗り替えていくことも大切である。また、学外の研究者との研究連携も効果を高めている。今後、構内遺跡出土の遺物についても、新たな研究手法での見直しが期待される。

発掘調査は、長年にわたって保存されてきた遺跡の破壊をもたらす。遺跡の保護という重要な観点からすると問題であるが、一方で、発掘調査によって得られる資料は歴史研究にとって非常に重要であることも事実である。本センターが取り組む発掘は建物建設に伴う調査である。だからこそ、遺跡破壊への責任をしっかりと受け止め、ただ単なる処理ではなく、可能な限りデータに目をこらし、その成果を十分に研究レベルに引き上げて発信することを、これまで以上に目指していきたい。

本年度の後半は、新型コロナウイルス感染症の拡大が大きな問題となった。本センターでも展示会や講演会の延期を余儀なくされ、その対策に追われることとなった。この状況は現在も進行中であるが、これまでの活動を見直す機会でもあろう。将来を見据えて、本センターの礎を改めて構築していければと願っている。

本年度も、本センターの運営には学内外の多くの方々から、多大なご支援をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長 渡 邊 和 良

副センター長 山 本 悦 世

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2019

目 次

第 I 部 2019年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの諸活動・業務報告

第 1 章 構内遺跡の調査研究

第 1 節 発掘調査の概要

1. 鹿田遺跡第28次調査……………(南健太郎) 1
2. 津島岡大遺跡第37次調査……………(山口雄治) 8

第 2 節 立会調査の概要

1. 調査の実施状況……………(野崎貴博) 14
2. 野球場バックネット設置工事……………(山口) 14

第 3 節 構内遺跡に関する研究

1. 津島岡大遺跡第37次調査におけるプラント・オパール分析結果……………(宇田津徹朗・田崎博之) 20
2. 津島岡大遺跡第38次調査におけるプラント・オパール分析結果……………(宇田津) 25
3. 鹿田遺跡第24次調査出土の草花双鳥鏡……………(南) 30
4. 鹿田遺跡第24次調査出土銅鏡の成分分析調査……………((株)吉田生物研究所) 37

第 2 章 調査資料の整理および公開・活用

第 1 節 調査資料の整理・保存処理

1. 調査資料の整理……………(南) 39
2. 調査資料の保存処理……………(南) 39

第 2 節 調査成果の公開・活用

1. 公開・展示
 - a. 第20回キャンパス発掘成果展「岡山大学への道－近世・近代の津島－」……………(山口) 39
 - b. 第10・11回公開講座……………(南) 40
2. 資料・施設等の利活用……………(南・岩崎志保) 40

第 3 節 調査研究員の個別研究活動

1. 外部資金獲得状況……………(南) 43
2. 論文・資料報告ほか…………… 43
3. 研究発表・講演ほか…………… 44

第 3 章 2019年度における調査・研究のまとめ ……(南) 47

資 料

1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程・組織等…………… 48
2. 2018年度以前の調査・研究一覧…………… 53

第Ⅱ部 津島岡大遺跡第38次発掘調査報告

第1節 調査の経緯と経過

1. 調査の経緯……………(岩崎) 73
2. 調査体制…………… 73
3. 調査の経過…………… 73

第2節 調査の記録

1. 遺跡の位置と周辺の調査状況…………… 74
2. 層序と地形…………… 75
3. 遺構…………… 77
4. まとめ…………… 78

挿 図 目 次

第Ⅰ部

第1章

- 図1 調査地点の位置…………… 1
- 図2 土層断面…………… 3
- 図3 遺構配置…………… 6
- 図4 中世の井戸群…………… 7
- 図5 方形立板組井戸枠…………… 7
- 図6 区画溝の屈曲部…………… 7
- 図7 入れ子で据えられた曲物…………… 7
- 図8 近世の大溝…………… 7
- 図9 調査地点の位置…………… 8
- 図10 土層柱状図…………… 10
- 図11 弥生時代早期～弥生時代前期の遺構全体図…………… 12
- 図12 弥生時代後期～古墳時代後期の遺構全体図…………… 12
- 図13 古代～近世の遺構全体図…………… 13
- 図14 調査地点の位置…………… 14
- 図15 土層柱状図…………… 14
- 図16 2019年度の調査地点【1】
-津島地区-…………… 17～18
- 図17 2019年度の調査地点【2】
-鹿田地区-…………… 19
- 図18 西壁の試料採取状況…………… 20
- 図19 東壁の試料採取状況…………… 21
- 図20 西壁の採取試料のプラント・オパール
定量分析結果…………… 22
- 図21 東壁の採取試料のプラント・オパール
定量分析結果…………… 23

- 図22 検出されたプラント・オパール
(第37次発掘調査区)…………… 24
- 図23 試料採取状況…………… 25
- 図24 土粒子におけるプラント・オパールの
大きさと比重の分布…………… 26
- 図25 土壌からのプラント・オパールの
抽出工程…………… 26
- 図26 津島岡大38次定量分析結果グラフ(1)…………… 27
- 図27 津島岡大38次定量分析結果グラフ(2)…………… 27
- 図28 検出されたプラント・オパール
(第38次発掘調査区)…………… 28
- 図29 黒色土から抽出されたプラント・オパール…………… 29
- 図30 黒色土から抽出したプラント・オパール
(北地点11b層)…………… 29
- 図31 黒色土から抽出したプラント・オパール
(北地点11c層)…………… 29
- 図32 黒色土から抽出したプラント・オパール
(南地点11a層)…………… 29
- 図33 銅鏡・土師皿・白磁碗の出土位置…………… 30
- 図34 銅鏡実測図…………… 31
- 図35 草花文の配置…………… 31
- 図36 銅鏡の写真…………… 32
- 図37 多度式鏡の諸例…………… 34
- 図38 銅鏡と同一地点で出土した土師皿・白磁碗…………… 34
- 図39 分析資料…………… 37
- 図40 分析結果…………… 38

第2章

図41 公開講座の様子……………	40	図42 クラウドファンディング……………	41
------------------	----	----------------------	----

第II部

図43 津島岡大遺跡構内座標と各調査地点……………	74	図46 土層柱状図……………	76
図44 調査地点の位置……………	74	図47 南地点・旧陸軍水路実測図……………	77
図45 土層断面……………	75		

目 次

第I部

第1章

表1 2019年度調査一覧（津島地区）……………	15
表2 2019年度調査一覧（鹿田地区）……………	15
表3 西壁の採取試料のプラント・オパール 定量分析結果……………	22
表4 東壁の採取試料のプラント・オパール 定量分析結果……………	23

表5 北地点東壁の採取試料のプラント・オパール 定量分析結果……………	27
表6 南地点東壁の採取試料のプラント・オパール 定量分析結果……………	27

第2章

表7 2019年度分析一覧……………	39
表8 2019年度非常勤講師の委嘱依頼……………	42

付 図 ・ 付 表

付図1 岡山大学の位置と周辺の遺跡分布……………	68
付図2 津島地区全体図……………	68
付図3 2018年度以前の調査地点【1】 －津島地区－……………	69～70
付図4 2018年度以前の調査地点【2】 －鹿田地区－……………	71
付図5 2018年度以前の調査地点【3】 －三朝地区－……………	72
付図6 2018年度以前の調査地点【4】 －東山地区－……………	72
付図7 2018年度以前の調査地点【5】 －倉敷地区－……………	72

付表1 1982年度以前の構内主要調査 （1980～1982年度）……………	53
付表2 2017年度以前の構内主要調査 （1983～2017年度）……………	53
付表3 埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物 概要（2019年3月現在）……………	63
付表4 埋蔵文化財調査室刊行物……………	65
付表5 埋蔵文化財調査研究センター刊行物 （2019年3月まで）……………	65

例 言

本書は二部構成とし、第I部には岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの2019年度における諸活動記録をまとめた「2019年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの諸活動・業務報告」、第II部には2020年度に実施した「津島岡大遺跡第38次調査報告」を掲載した。

第 I 部

2019年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの 諸活動・業務報告

例 言

1. 第 I 部は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、岡山大学構内において2019年4月1日から2020年3月31日までに実施した埋蔵文化財の調査研究成果およびセンターの活動についてまとめたものである。
2. 第 I 部において報告している津島岡大遺跡は岡山市北区津島中一丁目～三丁目1-1、鹿田遺跡は岡山市北区鹿田町二丁目5-1に所在する。
3. 執筆者は、目次に記載すると共に、原則として、本センター教員の場合は文末に、本センター以外の場合は文頭に記した。
4. 編集は山本悦世副センター長・清家章調査室長の指導のもと、南健太郎が担当した。

凡 例

1. 岡山大学構内の埋蔵文化財の調査にあたっては、2002（平成14）年4月1日から施行された「測量法及び水路業務法の一部を改正する法律」に基づき、世界測地系を採用したが、それ以前の日本測地系による構内座標の相対的位置関係を保持したまま座標値のみ世界測地系に変換している。各地区の座標原点と区割りは次のように定めている。
 - 1) 津島地区では、国土座標第Ⅴ座標系（日本測地系）の座標北を基軸とし、 $(X, Y) = (-144,156.4617\text{m}, -37,246.7496\text{m})$ （世界測地系）を起点とする構内座標系を設定している。構内座標の内部は一辺50mの方格で分割した区画を用いている。
 - 2) 鹿田地区では、国土座標第Ⅴ座標系（日本測地系）の座標北より東に15°振り出した座標軸を基軸とし、 $(X, Y) = (-149,456.3718\text{m}, -37,646.7700\text{m})$ （世界測地系）を起点とする構内座標を設定している。構内座標の内部は一辺5mの方格による地区割りをを用いている。
 - 3) 挿図中で用いる方位は、津島地区・鹿田地区は国土座標（日本測地系）の座標北を、その他は磁北を用いている。
2. 岡山大学敷地内で調査地点を示す場合、周知の遺跡にあたる場合はその遺跡名を、それ以外の場合は、地区名を付して示す。
3. 調査名称は、「発掘調査」に分類したものは、遺跡ごとに調査順に従って次数番号で呼称し、「試掘・確認調査」、「立会調査」に分類したものは、原則、原因となった工事名を使用している。発掘調査のうち、小規模で確認調査から連続して調査したものは、「試掘・確認調査」に分類する。
4. 付表に記載した既往の調査一覧は、掘削深度が中世層以下に達するか、あるいは遺構などが確認された調査のみを掲載している。未掲載分も含め、すべてのデータは、当センターにおいて保管している。
5. 本文などで使用している調査番号のうち、2019年度のは表1・2、2018年度以前のは付表2と一致する。
6. 本紀要に掲載の地形図（付図1）は、岡山市域図を複写したものである。
7. 土層註記において、特徴的な包含物・事項については括弧内に記載した。

第1章 構内遺跡の調査研究

第1節 発掘調査の概要

1. 鹿田遺跡第28次調査 (アメニティモール新営、鹿田地区調査番号1、鹿田AG~AS・31~41区)

調査期間 2018年11月19日~2019年9月18日

1工区：2018年11月19日~12月11日（造成土除去）、12月12日~2019年3月27日（発掘調査）

2工区：2019年4月1日~5月27日（造成土除去）、5月29日~9月18日（発掘調査）

調査面積 2,940m²（1工区1,035m²、2工区1,905m²）

調査担当 南健太郎（助教、主任）、野崎貴博（助教）、岩崎志保（助教）

遺構・遺物

【遺構】 弥生時代：土坑3・溝2・ピット6・河道1、古代：土坑1・ピット6・河道1

中世：井戸10・土坑6・溝5・ピット9・集石1・河道1

近世以降：土坑35・溝3・畦畔1・畝状遺構

【遺物】 総数122箱（27リットル容量の箱を換算して）

〈内訳〉土器・石器類85箱（弥生~近世・近代）、木器37箱

a. 調査地点の位置と経緯・経過

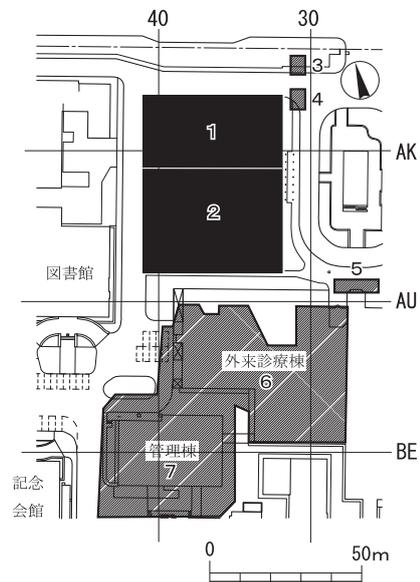
(1) 調査地点の位置

鹿田遺跡は岡山県中央部を南北に流れる旭川の下流西岸に位置する。岡山市街地南部に所在する岡山大学鹿田キャンパスのほぼ全域と、その周辺に広がりをもつ縄文時代~近世の複合遺跡である。本調査地点は鹿田キャンパスの中央部北端に位置する（図1）。本調査地点の南側では第1・5次調査、南東および北東では第21次調査が実施されている。

(2) 調査に至る経緯と経過

①経緯

2017年度、岡山大学鹿田キャンパスでは、外来診療棟の北側にアメニティモールを建設する計画がたてられた。建設予定地は立体駐車場として利用されていたが、簡易な基礎構造であったため、建設に伴う発掘調査は実施せず遺跡の保存を図っていた。これに対し、アメニティモールは4階建てで、工事掘削が包含層以下まで及ぶことから、発掘調査を実施することとなった。建設予定地周辺では、第1次調査（外来診療棟）¹⁾ および第5次調査（管理棟）²⁾ で弥生時代中期後半以降の集落跡が確認されており、鹿田遺跡で最も高い遺構密度を示している。また建設予定地の北東角のすぐ東側で実施された第21次調査B地点（外来棟周辺他



- 1 本調査地点（1工区）
- 2 "（2工区）
- 3 第21次調査A地点（外来棟周辺環境整備）
- 4 第21次調査B地点（外来棟周辺環境整備）
- 5 第21次調査D地点（外来棟周辺環境整備）
- 6 第1次調査地点（外来診療棟）
- 7 第5次調査地点（管理棟）

図1 調査地点の位置（縮尺1/2,500）

環境整備)³⁾では平安時代の河道が確認され、鹿田遺跡の北限である可能性が指摘されている。このように建設予定地内は集落の北端付近にあたっていることが予想され、鹿田遺跡における各時代の集落範囲や周辺環境、土地利用の実態を考えるうえで重要な地点であると考えられた。

なお発掘調査にあたっては排土の搬出や既存建物の基礎撤去の都合上、調査区を北側の1工区、南側の2工区に分け、前者から調査を進めることになった。

②経過

〈1工区〉造成土除去を2018年11月19日から開始し、12月11日に終了した。調査区中央および東には包含層よりも深くまで達している支障物があった。これらの撤去により調査区南半には包含層の下に粗砂層が広がっていることが確かめられた。これら以外の部分では近代層以下までおよぶ支障物は少なく、造成土除去の段階で近代の畦畔や畝状遺構、近世の溝が確認された。

発掘調査は2018年12月12日から開始し、近代・近世の調査から着手した。近世の溝は、幅が広く、深さも包含層より下の粗砂層まで達しており、有機質の遺物（漆碗や木製品）も出土した。中世では調査区中央で土坑が2基確認され、両者とも底に曲物が据えられていた。ただし残存状態は非常に悪く、1基は曲物の痕跡が残存するのみであった。かろうじて曲物の全体を残していたもう1基も、形を保った状態での取り上げはできなかった。古代では調査区北半で北に向けて標高が低くなる河道が確認され、この時期の鹿田遺跡の北限を示すデータが得られた。調査区北半は河道の遺物包含層、それ以外では基盤となる粗砂層上面まで掘削し、2019年3月27日に終了した。

〈2工区〉造成土除去を2019年4月1日から開始した。調査区南半には旧外来診療棟の建物基礎が残存していたため、4月8日から5月8日にかけてこれらを圧砕により撤去した。その後、調査区全体の造成土除去をすすめ、5月27日に終了した。

発掘調査は5月29日から開始した。2工区は、遺物包含層のベースとなる土が南北で異なっており、調査区の南側約1/4が粘質土、それよりも北側は粗砂であった。この粗砂は古墳時代までに埋没したと考えられる河道の埋土である。造成土除去時に1工区から続く近世の溝が確認されていたため、溝の掘削から開始した。近世の遺構としてはこの他に土坑が35基確認された。中世では鹿田キャンパス全体に展開する屋敷地の北端を示す河道が確認された。河道は調査区北半を南東から北西に向けて走っており、1工区南端の西半へと続く。河道以南では調査区中央西端で井戸がまとまって確認されたことが注目される。底面に曲物を設置した井戸が多く、8点の曲物が出土した。また方形立板組の井戸枠を有するものもあり、豊富な木製品が得られた。古代や弥生時代の遺構も確認されたが、遺構数は少なかった。調査区南端の微高地では弥生時代の包含層まで、北側ではベースの粗砂層上面まで掘削し、9月18日に調査を終了した。なお8月31日には現地説明会を開催し、160名の参加者を得た。

b. 調査の概要

(1) 層序と地形 (図2)

【層序】

〈1層〉(大正期以降の造成土)

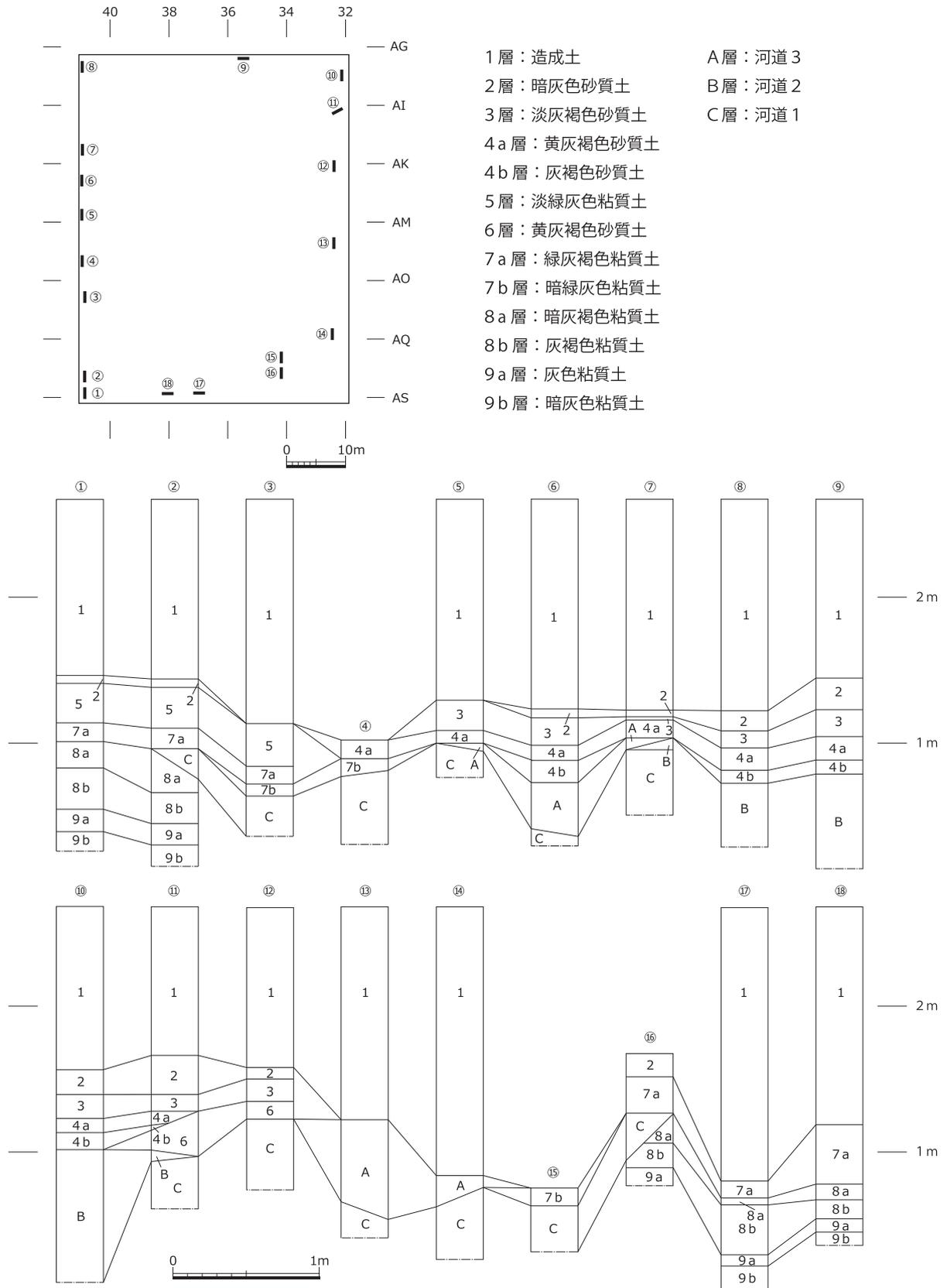
主に1921～22年(大正10～11年)の岡山医科大学建設時以降の造成土である。上面の標高は約2.68mである。

〈2層〉(近代)

暗灰色砂質土で、明治～大正期の耕作土と考えられる。調査区全体で確認された。

〈3層〉(近世)

淡灰褐色砂質土で、下半は鉄分の沈着によって黄色化する。調査区北半では厚く堆積しているが、南半は旧地形が高いことからほとんどみられなかった。



〈4層〉(中世)

粗砂を含む砂質の強い層である。4a層は黄灰褐色砂質土で鉄分を多く含み、マンガンも多い。4b層は灰褐色砂質土で、鉄分・マンガンともに含むが、4a層よりも少ない。旧地形の高い調査区南端では確認されない。

〈5層〉(中世)

淡緑灰色粘質土で、径5mm前後の黄灰色粘質土および暗褐色粘質土ブロックを含む。調査区南西部を中心に確認されるAR34・35区付近では微高地がカットされて5層が堆積しているところがあることから、中世段階の地形改変に関連する層であると考えられる。

〈6層〉(古代～中世)

黄灰褐色砂質土で、粗砂を多く含む。調査区北半の東側で主に確認される。AKライン付近に河道に挟まれた粗砂の高まり(河道1埋土)があり、その直上から北側に堆積が広がる。この上部に3・4層が堆積する。

〈7層〉(古代)

7a層は緑灰褐色粘質土、7b層は暗緑灰色粘質土である。7b層は下部に存在する河道の影響を受けており、灰白色細砂を多く含み、7a層よりも粘性がある。

〈8層〉(弥生中期後半～古墳時代)

8a層は暗灰褐色粘質土、8b層は灰褐色粘質土である。調査区南端付近の微高地を構成する土層である。両者ともマンガンを多く含む。

〈9層〉(弥生時代中期以前)

9a層は灰色粘質土、9b層は暗灰色粘質土である。調査区南端付近の微高地の基盤層である。9b層は粘性が強く、植物の樹痕が確認される。

〈A層〉(中世前半に埋没した河道：河道3)

調査区中央よりも南で確認された南東から北西方向に軸をもつ河道の堆積層である。直上には4層が堆積する。

〈B層〉(古代に埋没した河道：河道2)

調査区北半で確認された北東から南西方向に軸をもつ河道の堆積層である。調査区内では南側の立ち上がりが検出された。直上には4・6層が堆積する。

〈C層〉(弥生時代以前の河道：河道1)

調査区南端の微高地よりも北側で確認された、東西方向に軸をもつ河道の堆積層である。調査区内では南側の立ち上がりが検出された。直上には、河道1と河道2に挟まれた部分では6層が(断面⑫)、低位部では7層が(断面③)堆積している。北半では本河道を埋める粗砂層から弥生時代後期の土器が出土しており、南側の立ち上がり付近では古墳時代後期～末の須恵器などが出土していることから、複数回の土砂の供給によって埋没したと考えられる。

【地形】

①弥生～古墳時代

調査区南端から北に約5mの範囲は弥生時代中期後半から古墳時代にかけての微高地であり、それよりも北側は河道1にあたっている。調査区南端中央付近(断面⑰)は微高地の基盤である〈9層〉が低くなっていることから、微高地は東西に分けられていたと考えられる。〈8層〉の標高は東側のほうが高く、より生活に適した環境であったと考えられる。河道1は古墳時代後期～末ごろに埋没する。

②古代

弥生・古墳時代の微高地には〈7層〉が堆積し、微高地はAOライン付近まで広がったと考えられる。またAIラインからAKラインにかけて河道2の南側の立ち上がりが確認された。微高地と河道2の間は上面が一定で

はなかつた様子がうかがえ（断面⑤～⑦）、アップダウンのある地形であったと考えられる。地形は調査区の南から北に向かって、微高地→河道1埋土上部の不安定な地形→河道2、という状況であったと考えられる。河道2は本調査区の北東側で実施された第21次調査B地点の河道（境界域での祭祀具である陽物形木製品が出土）と一連のものであり、ここが古代における鹿田庄の北限であったと考えられる。

③中世

大きく地形が改変される段階である。河道3が埋没し、調査区全体で顕著な低位部はみられなくなる。一方、〈5層〉は地形改変に関連した土層と考えられ、河道3よりも南側に堆積する点に特徴がある。調査区南東部での微高地掘削後の埋め戻し部分、南西部での地形の高まり（断面①～③）において確認される。これに対し、河道3以北には粗砂を含む砂質の強い〈4層〉が堆積している。下部が河道であった点からも、居住などに適した環境とは言い難い。後述するこの時期の特殊な井戸群が〈5層〉堆積の端部、すなわち河道3の南にあたるAOライン付近に集中する点や、河道3の上部に本遺跡最北の屋敷地を区画する溝が掘削されていることから、河道3が屋敷地としての土地利用の境界として機能していたと考えられる。

④近世～近代

中世段階に標高が低かったところには3層が堆積し、調査区全体がほぼ平坦な地形となっている。ただし土坑群の展開が中世の土地利用の境界であった河道3の南側で東西方向にみられ、これよりも北側に南北方向に軸をもつ大溝が掘削されていることは注目される。また近代においては大溝の上部に畦畔が作られ、その東側のみで畝状遺構が確認された。中世の土地利用方法が近世、近代へと継承されていたことを示している。

(2) 遺構・遺物 (図3)

①弥生～古墳時代

土坑3基、溝2条、ピット6基、河道1条が確認された。土坑、溝、ピットはすべてARライン以南の微高地で検出されており、河道1の南側を中心に展開している。特に土坑は東端の34ライン付近に集中している。本調査区南側の第1次調査地点で確認された集落の北端であると考えられる。河道1は東西方向に軸をもち、調査区内では南側の立ち上がり確認された。本調査区の西側で実施された第23次調査でも弥生時代の微高地から北側に落ちる河道が検出されており⁴⁾、河道1と一連のものであると考えられる。

遺物の出土はわずかであるが、AIライン付近の河道1埋土（河道2よりも下部の粗砂層）から弥生時代後期の土器が出土しており、埋没時期の一端を示している。

②古代

土坑1基、ピット6基、河道1条が確認された。土坑はARラインのやや北側に位置しており、このことは前時代よりも微高地が北側に広がっていたことを示している。河道2は南岸の立ち上がり東端でAIライン付近、西端でAKライン付近において確認されており、北東から南西に軸をもつ。第21次調査B地点の河道と一連のものであり、北岸は本調査区の北側にあると考えられる。

遺物は土坑、河道の両者から出土した。土坑からは、完形の土師器や須恵器をはじめとした、9世紀前後の土器が多数出土した。河道からもほぼ同時期の土器が出土したが、その範囲は36ライン付近以東に集中している。この範囲は第1次調査地点で確認された古代の遺構群の北側にあたっており、集落との位置関係が注目される。

③中世

井戸10基、土坑6基、溝5条、ピット9基、集石遺構1基、河道1条が確認された。河道3は調査区中央で検出されており、南西から北東方向を軸とする。東端で幅約17m、西端で幅約10mを測る。井戸、土坑の多くは調査区西端のAOライン付近からAQライン間に集中している（図3上段A：図4）。この範囲では井戸が隣接して掘削されており、その密度は非常に高い。井戸には平面が円形もしくは多角形状ですり鉢状に掘り込むものと、平面が円形で筒状に掘り込むものの2者が確認された。前者の形態は本遺跡では初めて確認されたものであり注

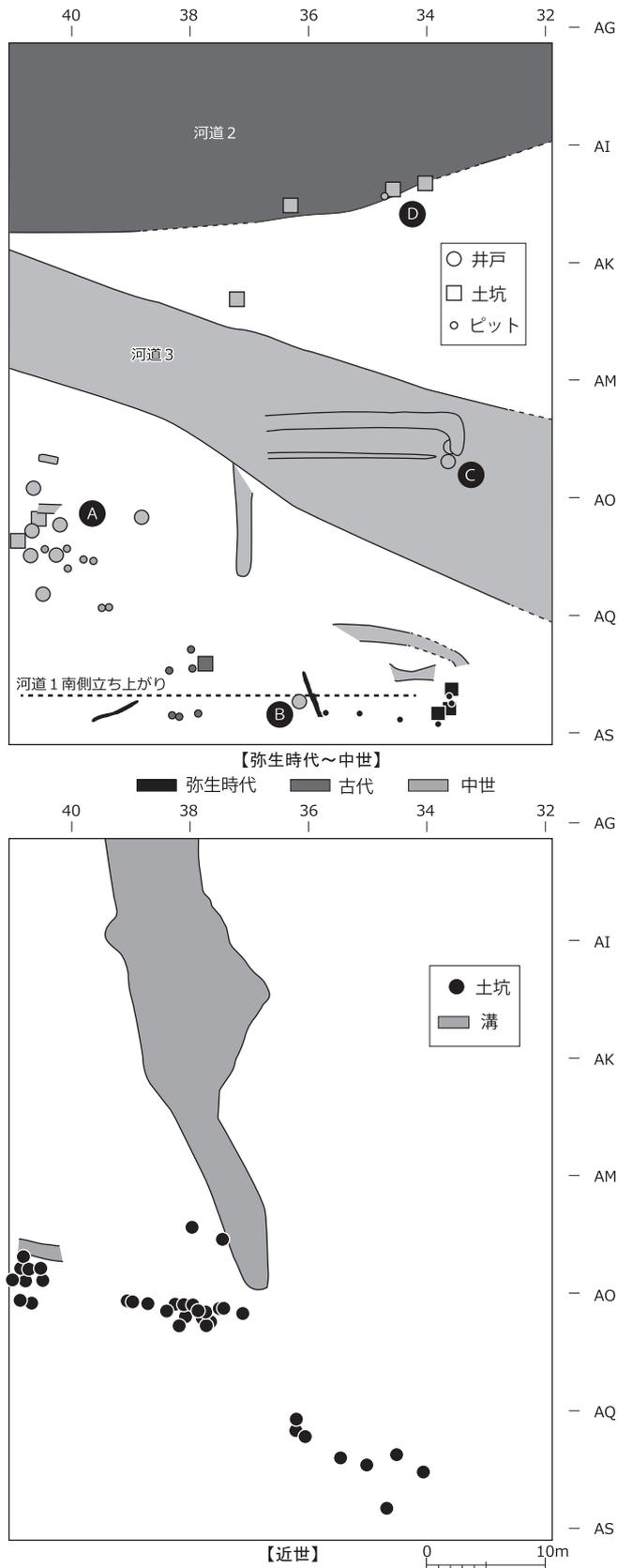


図3 遺構配置 (縮尺1/600)

目される。後者は方形立板組井戸枠を伴っていた(図5)。またこれらの遺構群とは別に調査区南端36ライン付近で井戸1基(図3上段B)、AN33・34区付近に井戸が2基(同C)、AJ34~35区付近に土坑2基(同D)が確認されている。BはAの井戸・土坑群よりも古い時期の土器が出土しており、平面円形、素掘りの井戸である。第1次調査区の屋敷地にもなう遺構群の北端にあたる可能性がある。Cは河道3が埋没した後に掘削されており、上部を屋敷の区画溝で破壊されている。屋敷地としての土地利用の北端を示す井戸群であると思われる。Dは河道2の南岸にあたる位置に掘削されている。これらは深度が他の井戸よりも浅いことから土坑と考えているが、底面は河道1の埋土である粗砂層まで達しており、底には曲物が据えられていた。掘削時は湧水していたことも考えられ、本来は井戸であった可能性がある。

溝はAM33区~AP37区付近で鹿田座標に軸をあわせた東西溝が2条(1条は南へ屈曲:図6)、南北溝が1条確認された。屈曲部を持つ溝と南北溝は屋敷地を区画する溝であったと考えられる。またこれらとは離れたAQ33~35区でも溝2条が確認された。本溝群の南側では中世における微高地の掘削と埋め戻し行為がおこなわれており、河道3の南側立ち上がりにも近い。このことから土地改変に関連したものであった可能性がある。

遺物で注目されるのは井戸や土坑の底に据えられた曲物である。本調査区では高い比率で井戸、土坑から曲げ物出土しており、計10点の曲物が確認された。曲物の据え方にはヴァリエーションがあり、複数の曲物を据える井戸では大小の曲物を入れ子状態で据えるもの(図7)、同じサイズの曲物を2段に重ねて据えたものなどがみられた。また屋敷地を区画する東西方向から南へと屈曲する溝では、屈曲部で破碎された鍋が破片を重ね合わせた状態で出土した。

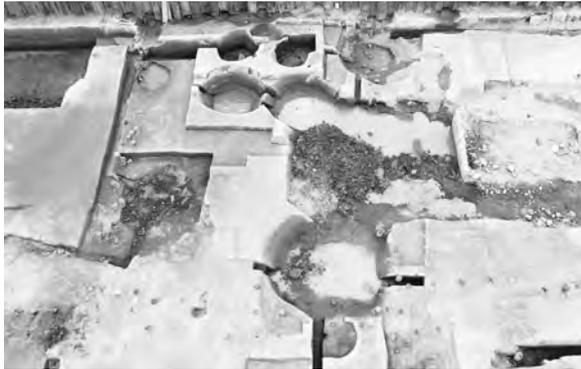


図4 中世の井戸群 (A群：東から)



図5 方形立板組井戸枠 (南西から)



図6 区画溝の屈曲部 (北東から)



図7 入れ子で据えられた曲物

④近世以降

近世では土坑35基、溝2条、近代では溝1条、畦畔1条、畝状遺構が確認された。

近世の土坑はAO37区からAN40区とAQ34～36区の2群がみられる。前者は後世の攪乱によって失われている部分があるが、本来はこの部分にも土坑が存在したものと思われる。35ラインから40ラインでみつかった大溝(図8)は、ALライン以南と以北で様相が大きく異なる。ALライン以南は幅約3.6mで軸が鹿田座標から西にふれている。これがALライン以北では幅を大きく広げ、軸もやや鹿田座標の南北軸に近くなる。特に東側はAJライン付近が最大幅となる大きな張り出しを形成している。張り出し部では杭群が確認されており、排水を目的とした溝とは異なる機能が想定される。

近代の畦畔は、近世の大溝上部に構築されており、さらに畦畔上部には溝が掘削されている。畦畔・溝の東側では鹿田座標の東西方向に軸を持つ畝状遺構群が確認されたが、西側では確認されなかった。

c. まとめ

本調査地点における調査の最大の成果は、鹿田遺跡における各時代の北限と境界域の土地利用状況を明らかにすることができた点にある。特に弥生時代の微高地端部、古代の集落と河道の位置関係、中世鹿田庄の



図8 近世の大溝 (南から)

北限といった、集落景観や遺跡の性格に関わる重要なデータを得ることができたことは重要である。中世の井戸とそれに伴う曲物には本遺跡で初めて確認された形態・利用方法があり、本遺跡のあらたな側面を見出すことも期待される。

本調査では、集落域と周辺の自然・地形環境を含んだ範囲を調査することができ、遺跡北限の状況を立体的に把握することができた。今後は周辺遺跡の立地環境も含め、当地域の微地形復元や遺跡形成過程を検討することで、人々の土地利用や環境適応についても考えていきたい。

以上の内容は暫定的なものであり、詳細な分析・検討を経て後日正式報告を行う。

註

- 1) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編1988『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊
- 2) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編1993『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
- 3) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編2012「鹿田遺跡第21次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』
- 4) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編2016『鹿田遺跡9』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第31冊 (南健太郎)

2. 津島岡大遺跡第37次調査 (異分野研究所新営、津島地区調査番号1、AZ~BA08~09)

調査期間 2019 (令和1) 年8月28日~2020 (令和2) 年3月19日

表土掘削: 2019 (令和1) 年8月28日~同年9月23日

発掘調査: 2019 (令和1) 年9月24日~2020 (令和2) 年3月19日

調査面積 1,410.9m²

調査担当 山口雄治 (助教、調査主任)、岩崎志保 (助教)、南健太郎 (助教)

遺構・遺物

【遺構】 弥生時代早期~前期: 土坑9・溝8・河道1、弥生時代後期~古墳時代後期: 土坑6・溝40・ピット、
古代: 溝14、中世: 土坑6・溝9・ピット、近世: 土坑5・溝2

【遺物】 総数38箱 (27リットル容量の箱に換算して)

〈内訳〉 土器・石器類37箱、木器1箱

a. 調査地点の位置と経緯・経過

(1) 調査の経緯と調査地点の位置

岡山大学津島キャンパスでは、2020年度においてコラボレーションセンターの東側に異分野研究所の建設が行われることとなった。同キャンパスは、津島岡大遺跡の範囲内であるため、発掘調査を行った。

発掘調査地点は、津島キャンパスの中央部に位置する。本調査地点のすぐ西側では、第19次調査¹⁾によって、縄文時代後期の炉や土坑、弥生時代前期の貯蔵穴や畦畔、河道が、弥生時代中期以降には溝等が確認されている。また、北東側では第5

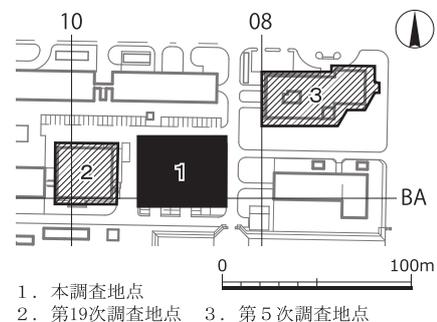


図9 調査地点の位置 (縮尺1/4,000)

次調査²⁾によって縄文時代後期中葉の貯蔵穴や河道等が確認されている。こうしたことから、本調査地点においても縄文時代～近世に至る遺構が広がっていることが予想された。

調査面積は1,410.9m²で調査員3名が担当した。

(2) 調査の経過

表土掘削は、調査員1名で2019年8月28日～9月23日まで行った。調査地点の一部が汚染土の指定を受けたため、通常よりも多くの時間を要した。全体として近世層が確認でき、一部にケーブル埋設に伴う攪乱が深く及んでいた。

発掘調査は、9月24日から開始し、調査員2名が担当した。一部に残る近代層（2層）を下げ3層上面を精査すると、近世の土坑や溝が検出された。その後、調査員を3名にし、層位ごとに調査をすすめた。中世（4層）、古代（5層）では土坑や溝を検出した。12月19日までに古代層までの調査を終了させた。弥生時代後期～古墳時代後期（6層）では、激しく重複する溝群が検出された。これらの溝によって、弥生時代前期（7層）の「黒色土」は大きく削平を受けたこともあり、水田畦畔は検出できなかった。しかし、隣接する第19次調査では畦畔が確認されていることから、最も残りのよい調査区西部の9層について、プラント・オパール分析を行うこととした。愛媛大学の田崎博之氏の助言も得て、2020年2月20日に宮崎大学の宇田津徹朗氏がサンプリングを行った。また7層では第19次調査地点へと続く河道を検出した。7層を掘り下げると、縄文時代後期の土器片が混じる8層が調査区中央部にのみ確認されたが、遺構は検出されなかった。その後、縄文時代後期の基盤層（9層）まで掘り下げを行い、土坑と溝を検出した。2020年3月19日までにすべての作業を完了した。

調査後、調査区の北側に設置する基礎の一部が調査区内に収まりきらないことが判明したため、2021年4月23・28・30日に立会調査を行い、土坑や溝を検出した。

現地説明会は2020年2月15日に開催し、65名の参加者を得た。

b. 調査の概要

(1) 層序と地形

【層序】

本調査で確認された土層は10層に大別される。以下、各層の概要を記載する。

1層（近代）：本地区が1907～1908（明治40～41）年に陸軍駐屯用地として造成された際の土である。標高は4.52～4.62mである

2層（近代）：灰色粘質土で明治期の耕作土にあたる。下層ほど砂質を帯び、鉄分が多いことから2a層と2b層に分けられる。駐屯地建設時に削平を受けており、調査地点西部や東部の一部にのみ検出された。上面の標高は、3.67m前後を測る。

3層（近世）：灰色～灰褐色を呈する砂質土で近世の耕作土である。鉄分の沈着面が観察され、鉄分やマンガンの包含状況から3層に分けられる。調査地点の西部や東部では検出できたが、南部では削平を受けていた。上面の標高は、3.55m前後を測る。

4層（中世）：鉄分をよく含む橙灰色の砂質土である。中世と考えられる。上面の標高は、3.35～3.42mを測る。南壁では削平を受けて確認できず、調査地点の東部が若干高い。

5層（古代）：灰色を呈する粘質土でマンガンや砂をよく含む。調査地点西半では鉄分が多く淡褐色や淡褐灰色を呈する。古代と考えられる。上面の標高は、3.27～3.4mを測る。調査地点東部が高い。

6層（弥生時代後期～古墳時代後期）：色調や包含物によって3層に分かれ、調査地点東半でのみ確認される。6a層は淡橙灰色を呈する砂質土で、上面の標高は、3.33mを測る。6b層は淡褐色を呈する砂質土で、上面の標高は、3.28mを測る。6c層は褐色を呈する砂質土でマンガンをよく含む。上面の標高は、3.22mである。

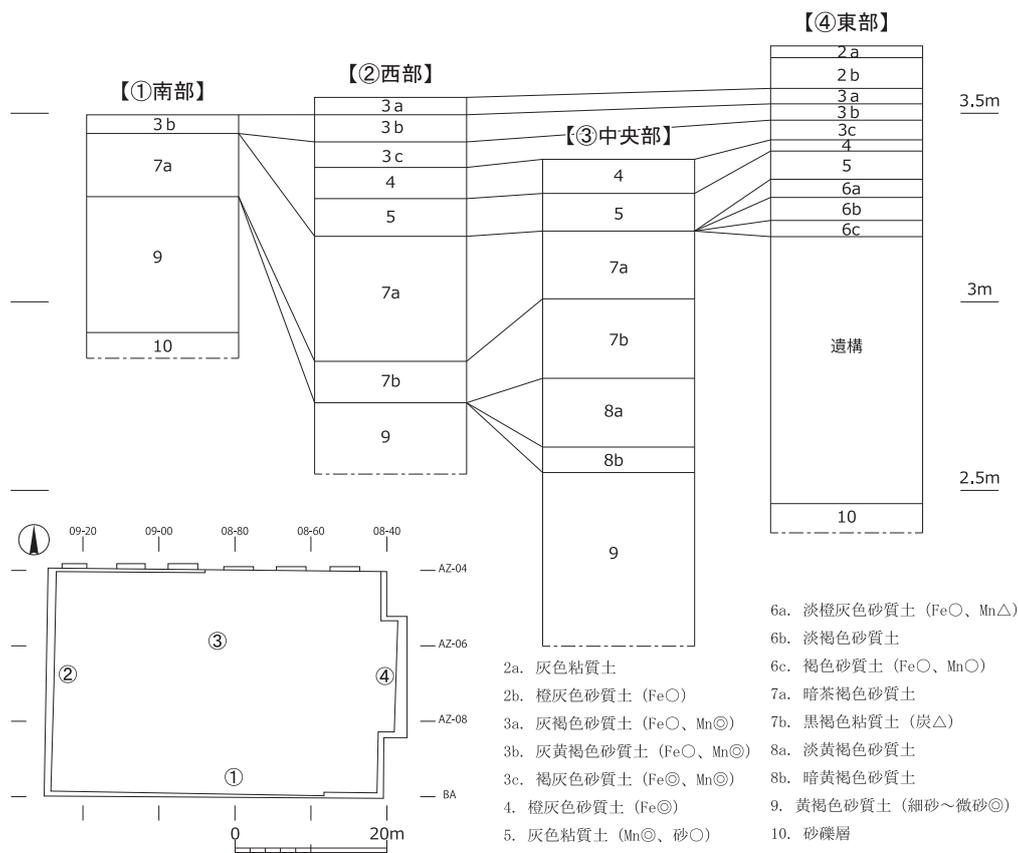


図10 土層柱状図 (縮尺1/20, 1/1,000)

7層 (弥生時代前期)：植物の影響による腐植土層であると考えられる。土質によって2層に分けられる。7a層は、暗茶褐色を呈する砂質土で、7b層は黒褐色を粘質土である。上面の標高は、南部側で3.45m、西部と中央部で約3.18mを測る。調査地点の南部が高く、北へ行くに従い低い地形を呈する。本層は、津島地区において「黒色土」と呼ばれる弥生時代前期の鍵層と考えられる。なお、調査区南部において、風倒木の痕跡と考えられる10層の砂礫層との層位逆転地点がいくつかみられた。

8層 (縄文時代後期)：淡黄褐色を呈する砂質土であるが、下層は暗黄褐色を呈することから8a層と8b層に分けられる。後述する9層の低位部に堆積しており、調査地点中央部でのみ確認される。出土遺物から縄文時代後期の堆積土と考えられる。上面の標高は、2.8mを測る。

9層 (縄文時代後期以前)：黄褐色を呈する砂質土である。細砂~微砂をよく含み、下層ほど微砂となる。縄文時代後期以前の堆積土と考えられる。上面の標高は、調査地点南部で3.28m、西部で2.73m、中央部で2.54mを測り、中央部が最も低い。約0.7mもの比高をもつ凹凸のある地形が復元される。なお、本層においても7層と同様に風倒木痕と考えられる10層の砂礫層との層位逆転地点がみられた。

10層 (縄文時代後期以前)：砂礫層である。上面の標高は、調査地点南部で2.92m、東部で2.48mを測る。現状で比高は約0.4mを測るが、西部、中央部にも同様の層が11層下部に堆積しているものと考えられることから、比高は0.9m以上と見積もれる。

【地形】

縄文時代後期以前の堆積層である10層は0.9m以上、同9層も0.7mの高低差をもつ凹凸のある地形が復元され

る。調査区南側が高く微高地になっており、北側に谷状の下がりのあることが確認される。この谷状地形に弥生時代前期の河道の流路が形成されたものと考えられる。縄文時代後期の堆積層である8層は、9層の低位部である調査区中央部にのみ確認され、この段階に多少地形が緩やかになったことを示している。黒色土である7層においても、全体的な地形の傾斜に変化はない。弥生時代後期～古墳時代後期の堆積層である6層は調査区東側でのみ確認されていないことから、地形を復元することは難しい。ただし、後述する溝の配置からは、南側が高かったことがうかがわれる。古代（5層）になると、調査区の南側と東側が若干高くなるものの、北側は平坦になされたようである。中世（4層）では、前代の地形が継続するが、溝の位置が変わることや古代の溝の埋土から古墳時代の遺物が出土していることから、造成が行われたものと考えられる。近世（3層）になると、調査区全面でほぼ平坦になり、近代へと継続する。

(2) 遺構・遺物

【弥生時代早期～前期】（図11）

土坑9基、溝8条、河道1条が検出した。調査区内を幅約11mの河道が流れる。調査区南東部から北上し、北東部で西へ折れる。流路の右岸には微高地が形成されており、そこに土坑が3～4基のまとまりをもって分布する。左岸の微高地は傾斜が緩やかであり、等高線に沿って溝が配されている。これらは、植物遺存体は出土していないが、その形態・規模から貯蔵穴の可能性がある。溝は、調査区東側において南北方向に8条検出された。出土遺物がないため詳細な時期の特定は困難であるが、河道が埋没した後の窪地に配されたものと考えられるため、弥生時代前期ないしは中期と考えられる。

なお、縄文時代後期の堆積層である10層は、この左岸の傾斜面低位部に堆積している。縄文時代後期の土器片が出土したが、遺構は確認できなかった。

【弥生時代後期～古墳時代後期】（図12）

土坑6基、溝34条を検出した。土坑はいずれも調査区南側にある。3基は溝を切るが、残りの3基は溝に切られて底部の一部が残るのみであった。溝は調査区の東部では南北方向に走る。南西部では北西－南東方向の溝がゆるやかな弧を描くように何条も並行かつ重複して掘削される。これらは弥生時代後期と考えられる。古墳時代後期になると調査区北側の北東－南西方向の溝となり、その位置、方向に変化が現れる。

【古代】（図13）

調査区中央～南側において溝14条が検出された。ほとんどが北西－南東方向の溝であり、切り合っている。溝の中には耳環や埴輪片といった古墳時代の遺物が入っており、この時期に古墳の削平を伴う大規模な造成が行われたことが示される。

【中世】（図13）

土坑6基と溝9条を検出した。溝は調査区北側で切り合いを持ちながら東西方向に走る。そのうちの2条はほぼ等間隔で並行して走っていることから、道が通っていた可能性もある。古代と比べると溝の方向が大きく変わっていることからこの時期の土地改変がうかがわれる。

【近世】（図13）

土坑5基と溝2条を検出した。溝は調査区北側に南北方向に走る。中世の溝とほぼ同じ方向、位置にあることから、中世の溝が近世へ踏襲されているものと考えられる。

c. まとめ

本調査地点では、弥生時代早期～前期では、河道とその周辺に広がる貯蔵穴の可能性のある土坑群を検出した。第5次調査区の南側では縄文時代後期および弥生時代早期の貯蔵穴が確認されていることから、本調査地点も同様に貯蔵空間の一部であったことがうかがえる。また、第19次調査では畦畔が確認されているが、本調査地

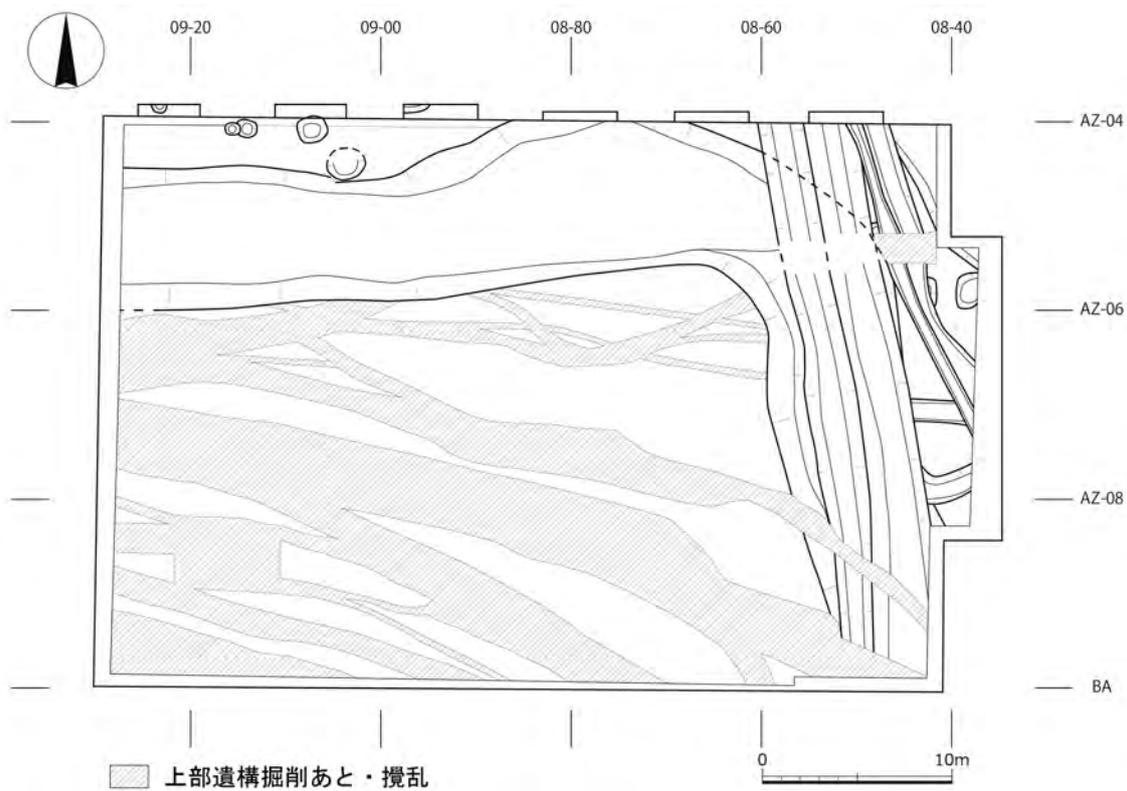


図11 弥生時代早期～弥生時代前期の遺構全体図 (縮尺1/400)

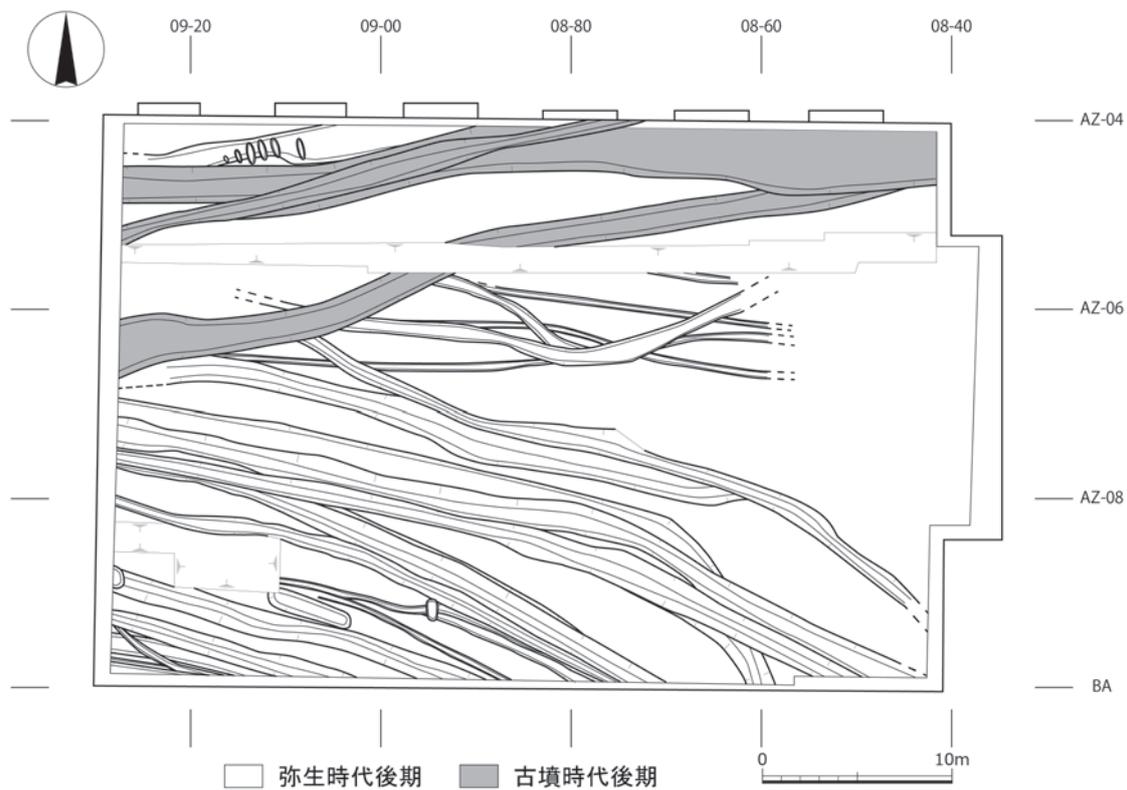


図12 弥生時代後期～古墳時代後期の遺構全体図 (縮尺1/400)

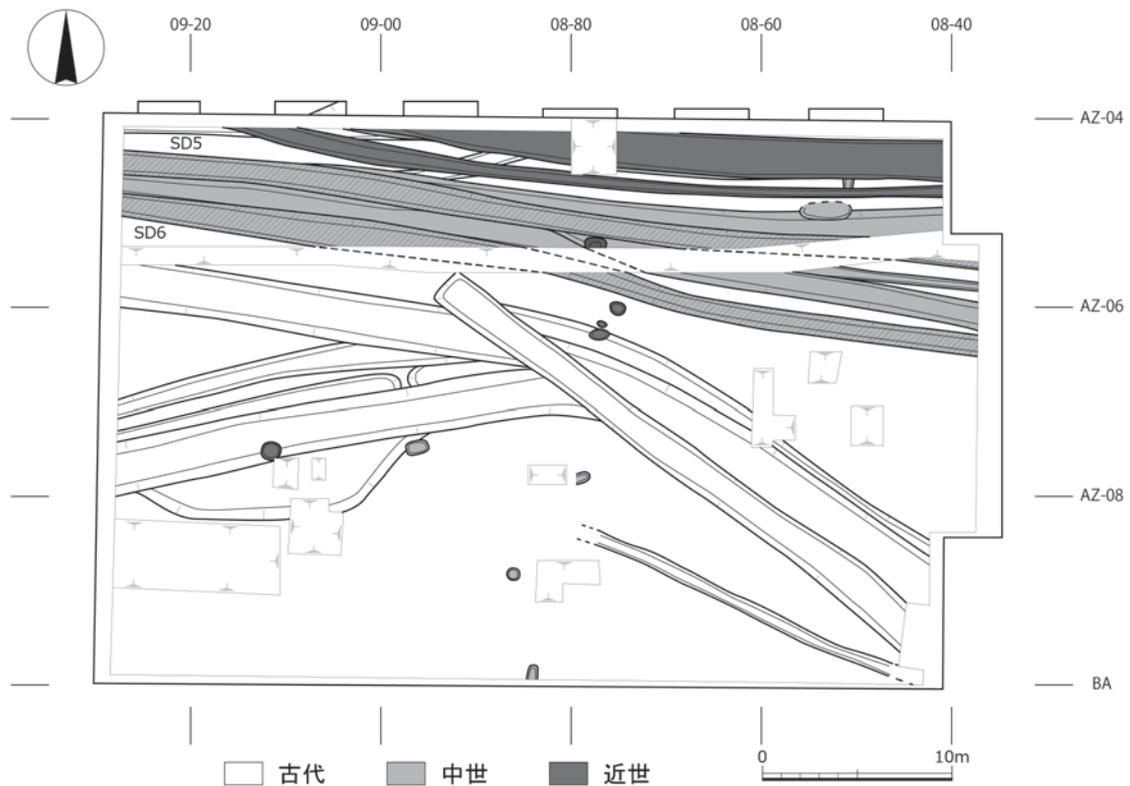


図13 古代～近世の遺構全体図（縮尺1/400）

点では後世の攪乱等が激しく畦畔は確認できなかった。7層（黒色土）中のプラントオパール分析を実施した結果、プラントオパールは検出されなかったことから、本調査地点まで畦畔が広がっていなかった可能性がある（本書第I部第1章第3節1参照）。

弥生時代後期以降は溝が幾重にも重複して掘削されていることが特徴である。第19次調査で検出された溝群の東への広がりを確認できた。弥生時代後期・古墳時代後期には、住居址や井戸などで構成される居住域が本調査地点の南西に位置する第10次調査地点において確認されている。本調査地点は、そうした居住域の周囲にあたる空間であり、居住域と生産域の中間地点にあたる場所と推測されよう。この地点に溝を配することで、キャンパス北側に広がる、より低位部の耕作域に水を供給していたのではないかと考えられる。また、古代・中世においても溝の位置や方向が変化することが明らかとなった。

また本調査では、遺構の記録に際し従来の方法に加えて、いわゆるドローンやSfM-MVS写真測量を積極的に用いている³⁾。GISと連携させ、今後様々な分析も行っていきたい。

なお、以上の内容は暫定的な内容であり、詳細な分析・検討を経て後日正式報告を行う。

註

- 1) 岩崎志保・野崎貴博・横田美香2003『津島岡大遺跡12』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 2) 阿部芳郎編1994『津島岡大遺跡4』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 3) 山口雄治2020「最新技術を用いた測量の取り組み－津島岡大遺跡第37次調査－」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』No.64 (山口雄治)

第2節 立会調査の概要

1. 調査の実施状況

津島地区で11事業21件、鹿田地区で2事業4件の立会調査を行った。このうち、中国電力ケーブル埋設工事は、津島地区構内で岡山市教育委員会が行った立会調査である。ほとんどの掘削は造成土内または既掘範囲内で収まっているが、包含層を確認したものは、津島地区では縄文～弥生時代の黒色土層まで掘削したもの1件、中世層までのもの1件、鹿田地区では近世～近代層までのもの1件があった。ここでは縄文～弥生時代までの土層を確認した津島地区野球場バックネット改修事業について報告する。(野崎貴博)

2. 野球場バックネット設置工事 (津島地区：調査番号6、BB06)

a. 本調査地点の位置

本調査地点は、津島地区東キャンパスの北東部に位置する(図14)。本調査は野球場バックネットの設置工事に伴って実施された。当初はオーガーによる掘削が予定されていたが、本調査地点には攪乱内に礫が多量に含まれていたため掘削できず、小型重機による掘削に変更して行われた。そのため、掘削範囲の一部において断面観察を行うことができたので報告する。

本調査地点の周辺では、野球場の北側と南側において確認調査が行われている。北側の確認調査では縄文時代後期～弥生時代前期の微高地や縄文時代後期～晩期と考えられる遺構が確認されており¹⁾、南側の確認調査では、近代と弥生時代の遺構が確認されている²⁾。

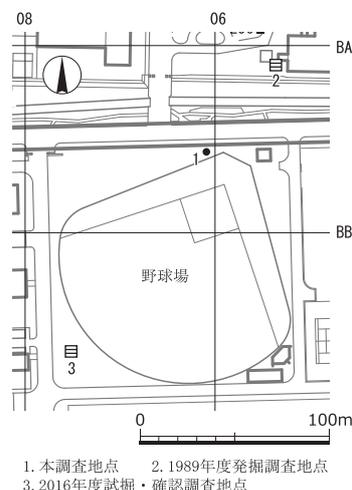


図14 調査地点の位置
(縮尺1/4,000)

b. 調査の成果

遺構は確認できなかったため、ここでは層序について報告する(図15)。

1層は現代の造成土であり、上面の標高は4.83mを測る。2層は淡灰色砂質土で近代、3層は灰褐色砂質土、4層は鉄分を多く含む褐灰色砂質土で近世の耕作土である。5層は淡灰褐色砂質土、6層は暗淡灰褐色砂質土で中世、7層は明灰褐色砂質土、8層は灰褐色砂質土で古代と考えられる。9層は褐灰色砂質土で鉄分を多く含む。弥生時代後期～古墳時代後期の可能性がある。10層は暗灰色砂質土で上層の9層をブロック状に含む。11層は黒灰色砂質土である。これらは弥生時代前期の可能性がある。12層は黒色粘質土である。いわゆる「黒色土」であり、弥生時代早期～前期に比定される。



図15 土層柱状図 (縮尺1/20)

c. まとめ

本調査地点では、近代から弥生時代早期～前期の「黒色土」までを確認することができた。弥生時代前期の地形について復元すると「黒色土」の標高は2.53mである。周囲の黒色土の標高は、本調査地点北側の確認調査では3.3m、南側の確認調査では3.1mとなっていることから、本調査地点では谷状に落ち込んだ地形が復元される。

津島地区東キャンパスの東側では発掘調査が行われておらず、遺構や地形についての詳細なデータが得られていない。本調査地点の成果は、地形復元に関して新たなデータを追加することができた。(山口)

註

- 1) 石坂俊郎1990「教育学部身体障害者用エレベーター設置に伴う発掘調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』7 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 2) 山口雄治2018「津島岡大遺跡南東部における確認調査」『紀要2016』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

表1 2019年度調査一覧(津島地区)

種別	調査番号	工事名称	調査期間	構内座標	調査深度 (GL-m)	造成土厚 (m)	内容	
発掘	1	異分野基礎科学研究所新営	8/28～3/19	AZ～BA08～09			弥生時代早期～前期：土坑・溝・河道、弥生時代後期～古墳時代後期：土坑・溝、古代：溝、中世：土坑・溝、近世：土坑・溝	
立会	2	情報統括センター改修	生活排水橋	4/8	AW11	0.80	-	造成土内
	3	異分野基礎科学研究所 屋外給水配管支障移設	配管(経路B)	6/26	AZ07～09	0.7～0.75	-	造成土内
	4		配管(経路A)	6/27	AZ09	0.7、 接続部0.8/1.0	-	造成土内
	5		外灯(4ヶ所)	7/17・18	AZ08、BA09	0.8～1.2	-	造成土内
	6	野球場バックネット	天井ネット改修	7/19・26	BB06	2.05	0.92	標高2.5mで黒色土確認
	7	異分野基礎科学研究所 埋文調査その他工事	仮設電源用建柱	8/29	BA08	0.90	-	造成土内
	8	農学部漏水復旧工事		10/31	BG18	0.85	-	既設内
	9	文・法・経講義棟漏水復旧工事		11/19	AW15	1.00	-	既設内
	10	中電ケーブル埋設工事		12/9	AU04	1.45	0.9	中世～近代層確認【岡山市立会】
	11	教育学部テニスコート 囲障改修	囲障基礎	12/10・12	AX00～AY02	0.6～0.85	-	造成土内
	12		門扉	12/24		1.05	-	造成土内
	13		雨水橋	1/14		0.90	-	造成土内
	14		雨水配管	1/14		0.40	-	造成土内
	15		植栽伐根1	11/29		0.40	-	造成土内
	16		植栽伐根2	12/3		0.40	-	造成土内
	17	植栽伐根3	12/16	0.65	-	造成土内		
	18	職員宿舍アース棒設置	設置棒1	2/18	BJ17	0.50	-	造成土内
	19	舗装改修工事	基礎撤去①	2/10	AU04～AV10	0.30	-	造成土内
	20		基礎撤去②	2/10		0.30	-	造成土内
21	標識設置		3/13	0.70		-	造成土内	
22	工学部13号館漏水調査		2/28・3/9	AV05	0.3～0.6	-	既設・造成土内	

表2 2019年度調査一覧(鹿田地区)

種別	調査番号	工事名称	調査期間	構内座標	調査深度 (GL-m)	造成土厚 (m)	内容	
発掘	1	アメニティモール新営	2018/11/19～ 9/18	AG～AS 31～41	2.2	1.2	弥生時代～古墳時代：土坑・溝・河道、古代：土坑・河道、中世：井戸・土坑・溝・河道・ピット、近世：土坑・溝、近代：畝状遺構・畦畔	
立会	2	基幹・環境整備 (ブロック塀対策)ほか	ボイラー室東	4/5	BE～BV04	0.8	-	造成土内
	3	アメニティモール新営	電気①	3/2	AE32～AS42	0.60	-	造成土内
	4		污水管	2/12・3/10		0.465～1.60	1.1～1.4	GL-1.35～1.4mで近代耕作土および溝確認
	5		給水管	3/10		0.80	-	既設・造成土内

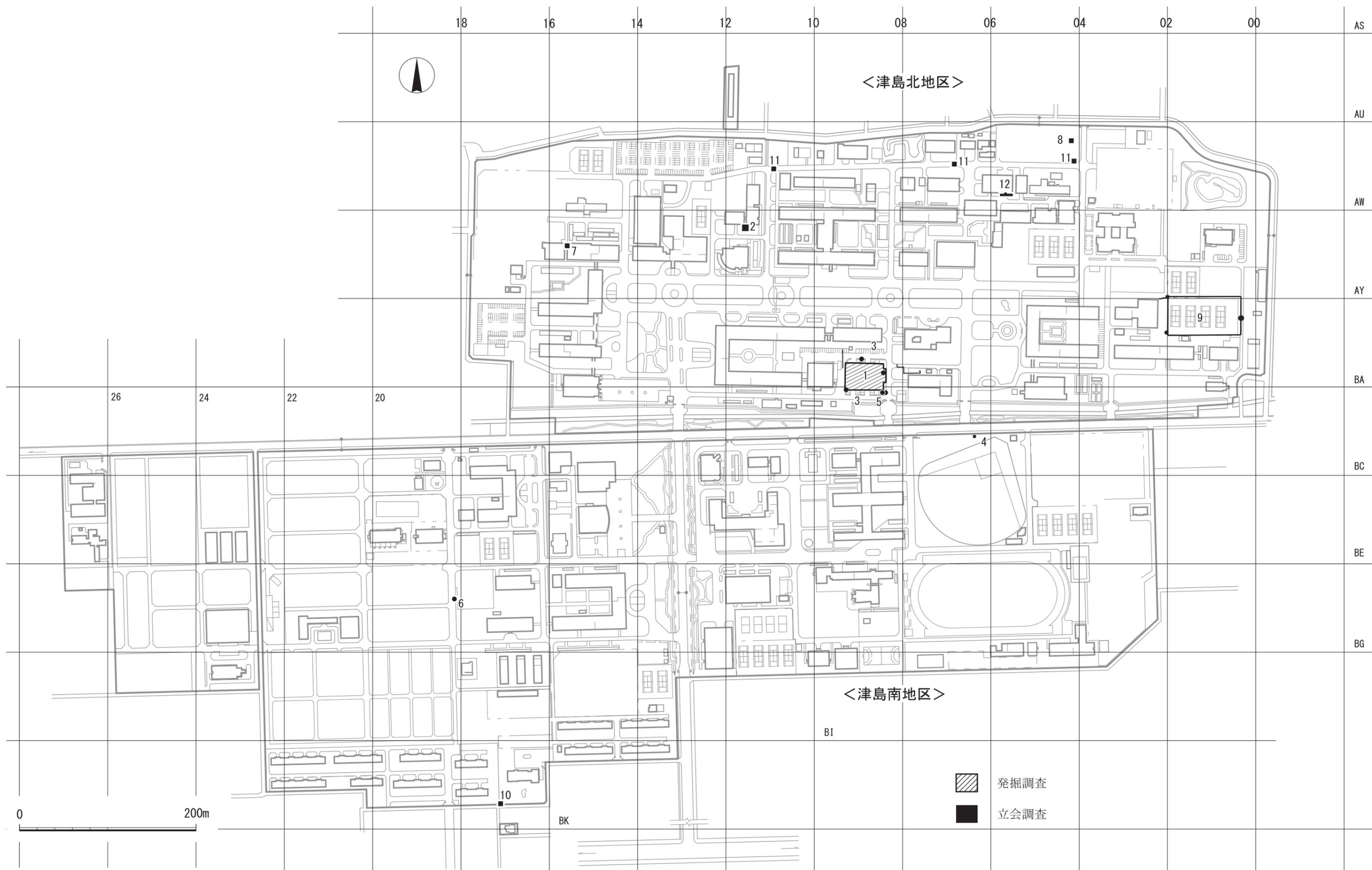


図16 2019年度の調査地点【1】—津島地区— (縮尺1/4,000)

※番号は表1の調査番号に対応する。

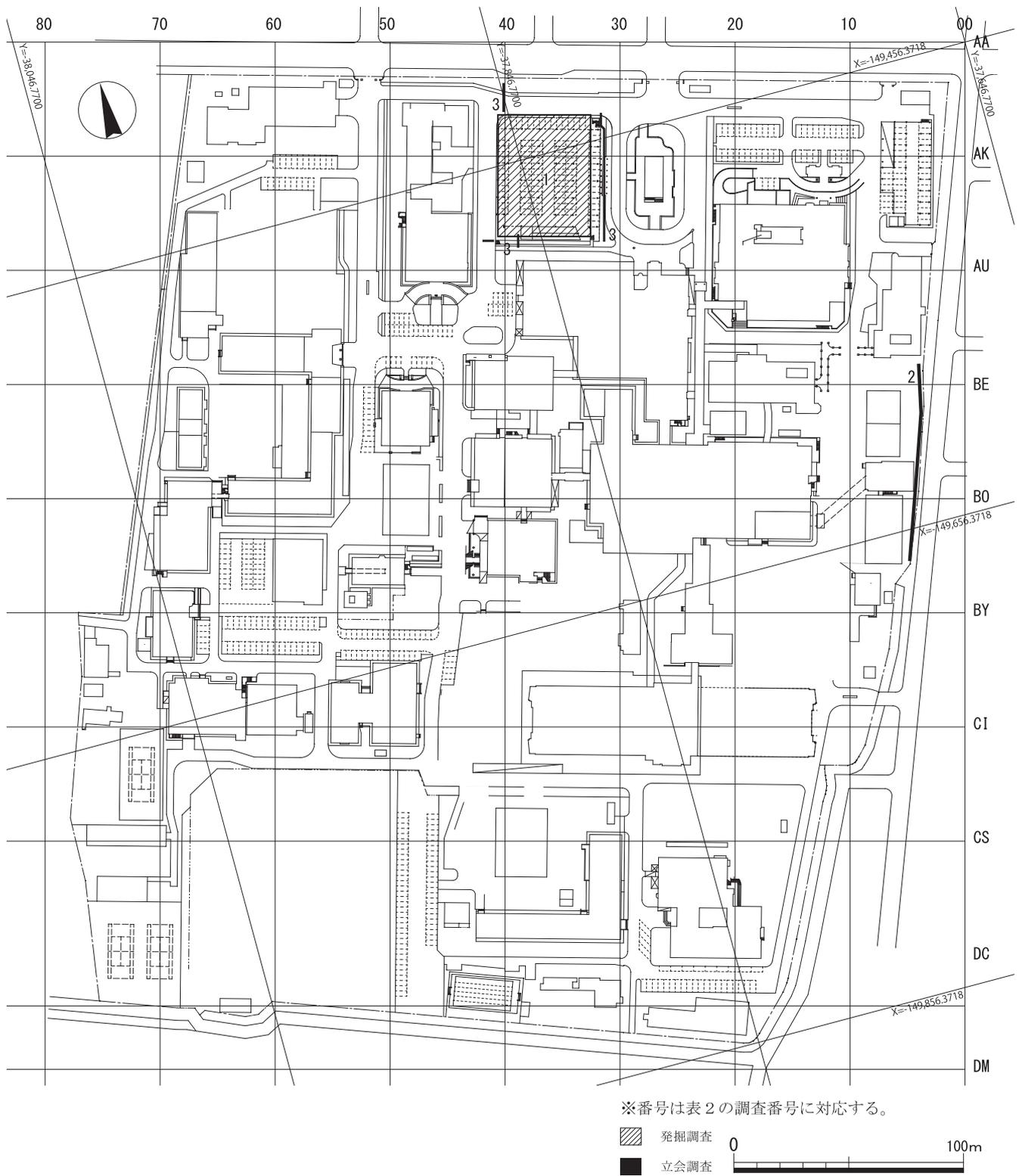


図17 2019年度の調査地点【2】—鹿田地区— (縮尺1/2,500)

第3節 構内遺跡に関する研究

1. 津島岡大遺跡第37次調査におけるプラント・オパール分析結果

宇田津 徹 朗 (宮崎大学)

田 崎 博 之 (愛媛大学)

a. はじめに

今回、報告する分析結果は、研究課題「プラント・オパール中の遺伝情報を利用した稲作史研究手法の構築に向けた学際的研究」(基盤研究(A):課題番号19H00542 研究代表者:宇田津)の一環として、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターのご理解とご協力の下で、実施したものである。

b. 材料と方法

1) 材料

津島岡大第37次発掘調査区(本書第I部第1章第1節2参照)の西壁および東壁から採取した各地層の土壌を供試した(図18・19)。試料採取は、地層の単位を基本とし、層厚や堆積状況によって、試料を追加した。特に、弥生時代の地層である7a層については、細かく採取を実施した。採取の際には、壁面の堆積状況について肉眼観察を実施し、木の根の影響など上層の影響(土壌の落ち込み等)を確認しながら、1点につき、5~10gを採取した。

分析に供した試料は、全部で29試料(内訳:西壁13試料、東壁16試料)である。

2) 方法

採取した土壌は、プラント・オパール定量分析用試料に調整し、分析に供した。調整と分析の概要は以下のとおりである。

調整は、採取土壌を絶乾した後、1gを秤量し、イネのプラント・オパールとほぼ同じ比重と平均粒径(約40 μ m)のガラスビーズを土壌1gに30万個加える。その後、水を加え、超音波を照射し、粒子の分散とプラント・オパールに付着する粘土粒子を除去する。最後に沈底法を用いて、20 μ m未満の粒子を除去し、乾燥する。

定量分析では、土壌に含まれる植物(主にイネ科植物)の表皮細胞に形成される植物珪酸体の化石であ

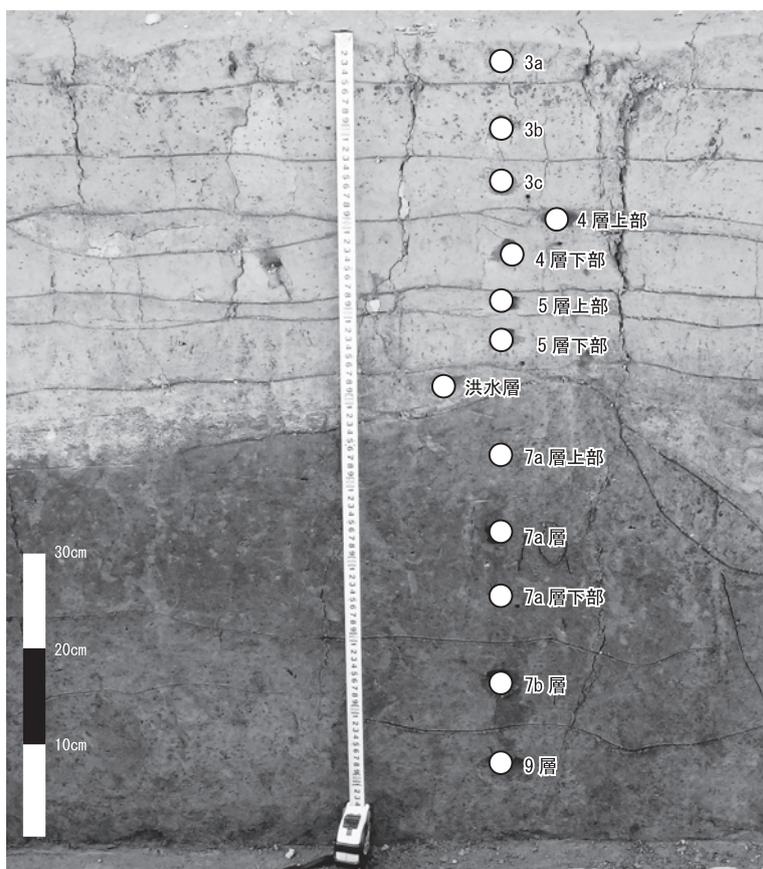


図18 西壁の試料採取状況

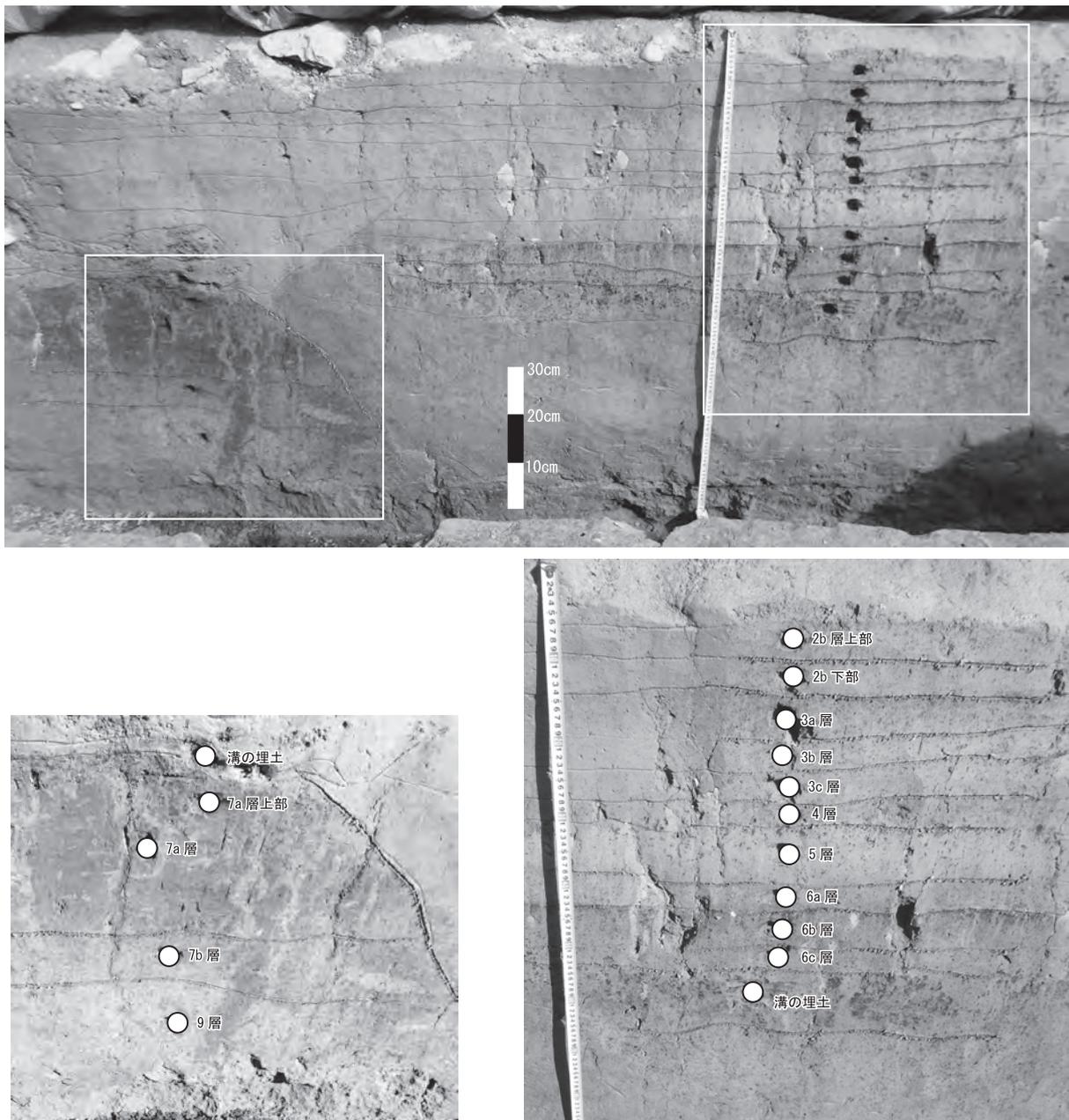


図19 東壁の試料採取状況

るプラント・オパールの密度（土壤乾燥重量1g当たりの個数）を検鏡プレパラート中に出現するガラスビーズとプラント・オパールの数量比から算定する（宇田津2003）。

今回、定量を行った植物は、イネ（*Oryza sativa* L.）、ヨシ属（*Phragmites*）、タケ亜科（*Bambusoideae*）、ウシクサ族（*Andropogoneae*）、キビ族（*Panicaceae*）である。

c. 結果

表3と図20、表4と図21が、それぞれ西壁と東壁の定量分析の結果である。イネプラント・オパールの検出密度に着目すると、西壁の3a～5層下部、東壁の2b層上部～6c層で稲作が行われたことが示唆される。地層の単位

では、西壁と東壁のイネの検出傾向はほぼ同じであるが、検出密度は、東壁がかなり高い。また、イネの検出密度に対して、ヨシ属はほとんど検出されないことに照らすと、これらの地層の時代には、安定して連続的に水田が営まれたことがうかがえる。この結果は、上層の帰属する時代が、近世・近代という考古学的所見とも符合していると言えよう。

7a層は、いずれの試料からもイネは全く検出されなかった。ヨシ属も未検出で、タケ亜科とウシクサ族（ススキなど）が一定密度で検出されていることから、比較的乾燥した環境であったことが推定された。

d. まとめ

7a層の土壌からは、イネのプラント・オパールは検出されず、当該調査区内に弥生時代の水田はもとより、畑作を含めても稲作が行われた痕跡を確認することはできなかった。一方、2b層～6c層は、西壁の5層上部を除き、水田による稲作が営まれ、特に3c層以降の時代には、安定した稲作が行われていたことが推定された。

表3 西壁の採取試料のプラント・オパール定量分析結果

層名	イネ <i>O.sativa</i>	ヨシ属 <i>Phrag.</i>	タケ亜科 <i>Bamb.</i>	ウシクサ族 <i>Andoro.</i>	キビ族 <i>Pani.</i>
3a層	2,854	0	6,658	5,707	0
3b層	4,703	0	941	3,762	941
3c層	4,608	0	2,765	6,451	0
4層上部	932	0	3,727	4,658	0
4層下部	997	997	5,980	8,970	0
5層上部	0	1,020	3,060	7,139	0
5層下部	1,603	2,405	4,008	6,413	0
洪水層	881	0	2,644	4,407	0
7a層上部	0	0	4,615	7,384	0
7a層	0	0	11,093	9,244	0
7a層下部	0	0	14,632	12,803	0
7b層	0	894	12,521	6,260	0
9層	0	0	6,615	3,780	0

(個/g)

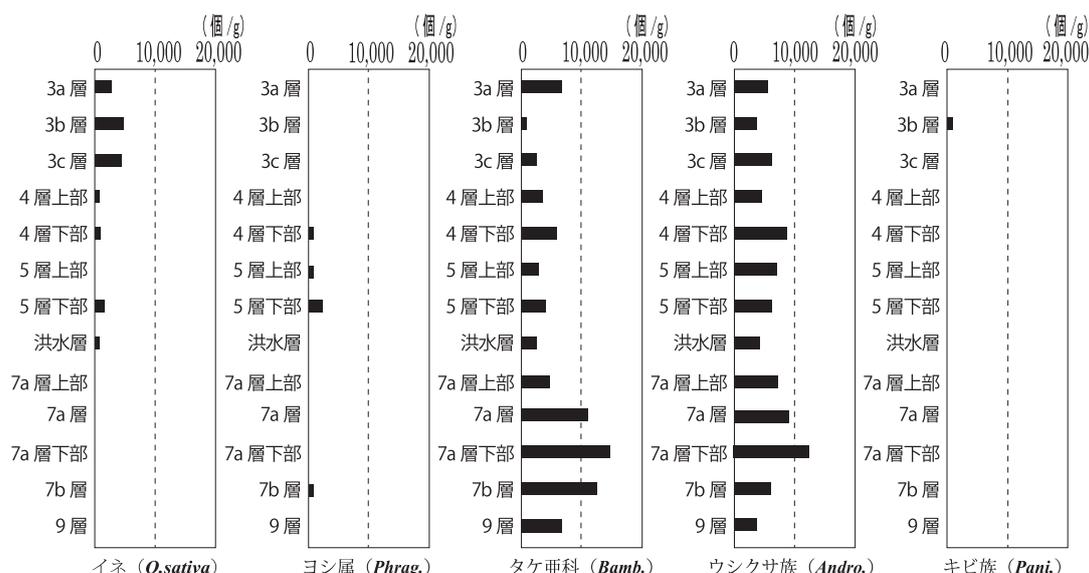


図20 西壁の採取試料のプラント・オパール定量分析結果

表4 東壁の採取試料のプラント・オパール定量分析結果

層名	イネ <i>O.sativa</i>	ヨシ属 <i>Phrag.</i>	タケ亜科 <i>Bamb.</i>	ウシクサ族 <i>Andoro.</i>	キビ族 <i>Pani.</i>
2b層上部	3,463	0	5,194	4,328	866
2b層下部	12,235	0	9,411	8,470	0
3a層	13,129	0	6,564	9,378	0
3b層	20,049	955	10,502	8,592	0
3c層	10,415	0	11,283	6,076	0
4層	3,670	917	917	4,587	0
5層	2,756	0	1,837	4,593	0
6a層	1,092	0	4,368	5,460	0
6b層	3,663	0	916	4,579	0
6c層	898	898	2,694	3,592	0
遺構埋土	0	985	2,955	1,970	0
溝の埋土	0	0	2,760	4,601	0
7a層上部	0	0	758	1,517	0
7a層	0	957	16,268	5,742	0
7b層	0	0	3,321	4,151	0
9層	0	0	8,745	8,745	0

(個/g)

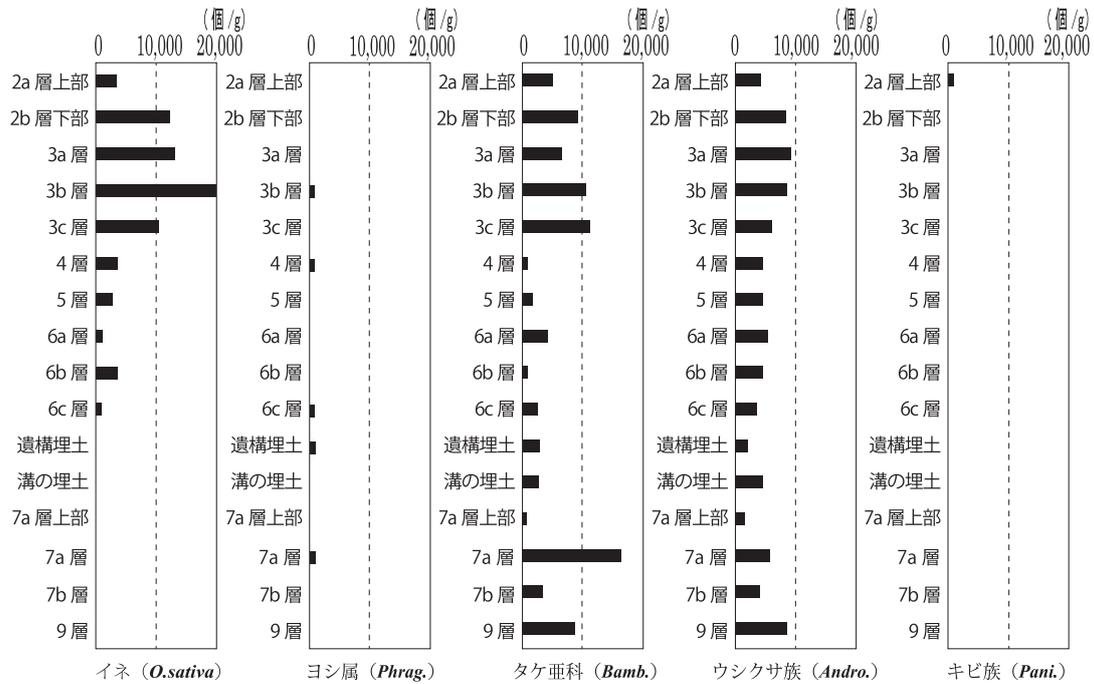


図21 東壁の採取試料のプラント・オパール定量分析結果

最後に、今回、貴重な調査分析の機会を与えていただいた、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの関係各位に感謝申し上げたい。

【参考文献】

宇田津徹朗2003「プラント・オパール分析」『環境考古学マニュアル』（松井章 編） 同成社、pp.138-146

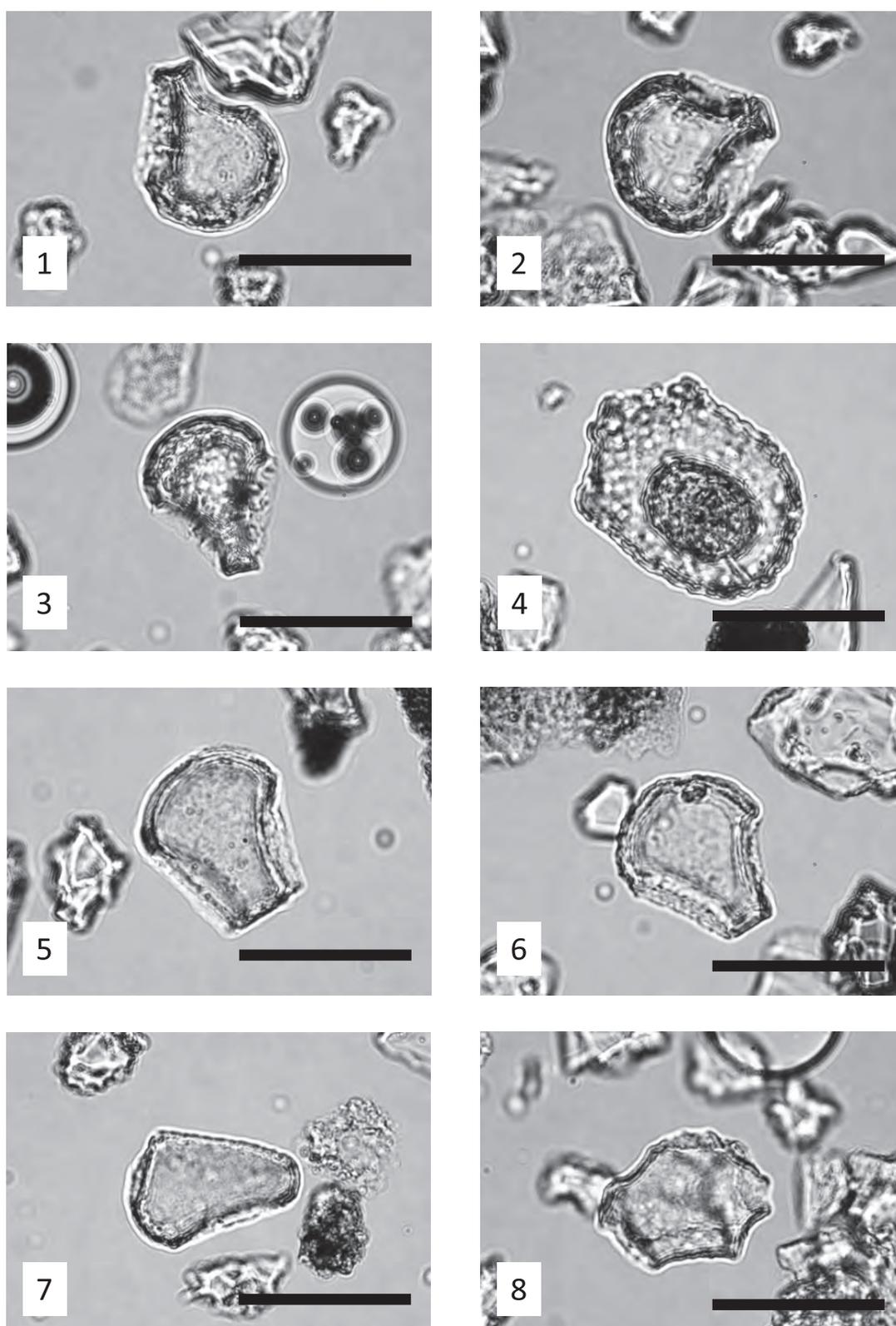


図22 検出されたプラント・オパール (第37次発掘調査区)
1～3：イネ、4：ヨシ属、5・6：タケ亜科、7：ウシクサ族、8：樹木 (シイ属)

※スケールは50 μ m

2. 津島岡大遺跡第38次調査におけるプラント・オパール分析結果

宇田津 徹 朗

はじめに

今回報告する分析結果は、研究課題「プラント・オパール中の遺伝情報を利用した稲作史研究手法の構築に向けた学際的研究」(基盤研究(A):課題番号19H00542 研究代表者:宇田津)の一環として、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターのご理解とご協力の下で、実施したものである。

1. 材料と方法

a. 材料

津島岡大遺跡第38次発掘調査区の北地点東壁および南地点東壁から採取された各地層の土壌を供試した(図23)(本書第2部参照)。試料採取は、地層の単位を基本とし、層厚や堆積状況によって、試料を追加した。特に、黒色土である北地点11層は、堆積状況により、さらに細かく分層して、試料を採取した。採取の際は、発掘担当者により、壁面の堆積状況について肉眼観察を実施し、木の根の影響など上層の影響(土壌の落ち込み等)を確認しながら、1点、5~10gを採取いただいた。

定量分析に供した試料は、全部で24試料(内訳:北地点17試料、南地点7試料)である。また、今回、黒色土

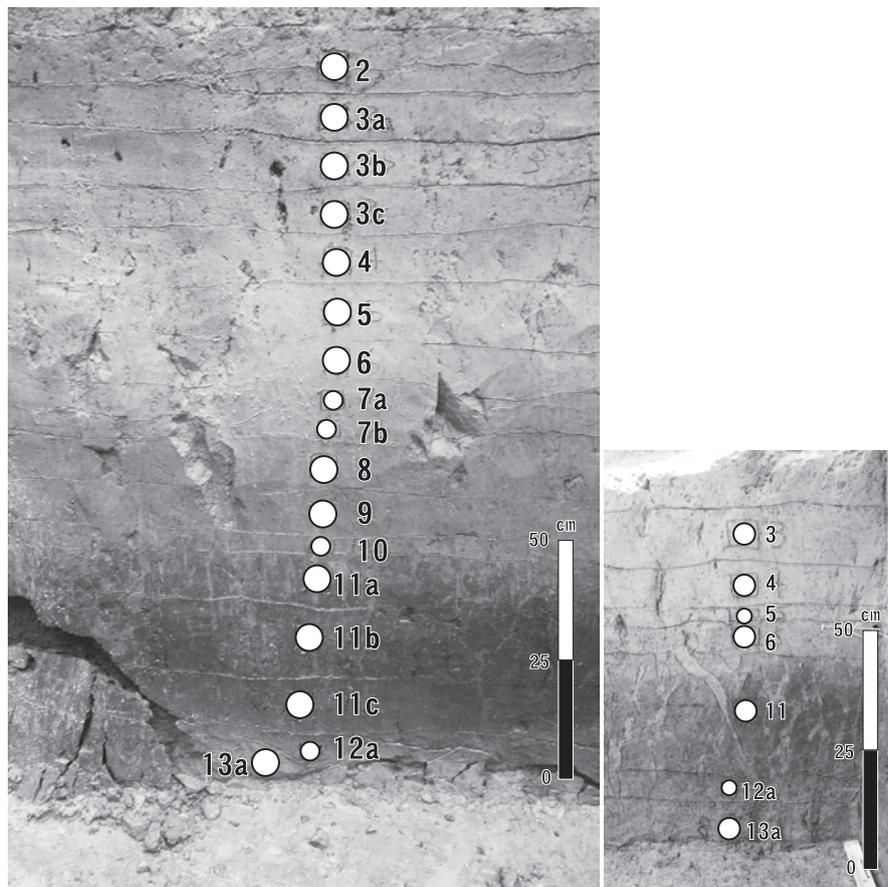


図23 試料採取状況(左:北地点東壁、右:南地点東壁)

に還元されているイネ科植物由来の有機物を確認するために、黒色土に含まれるプラント・オパールの全量抽出のために、1 試料100g（現場採取重量）として、3 試料（北地点2 試料：11b層・11c層、南地点1 試料：11層）を供試した。

b. 方法

①プラント・オパール定量分析

プラント・オパール定量分析に必要な試料の調整と分析の概要は以下の通りである。

調整は、採取土壌を絶乾した後、1gを秤量し、イネのプラント・オパールとほぼ同じ比重と平均粒径（約40 μ m）のガラスビーズを土壌に1gに30万個加える。その後、水を加え、超音波を照射し、粒子の分散とプラント・オパールに付着する粘土粒子を除去する。最後に沈底法を用いて、20 μ m未満の粒子を除去し、乾燥する。

定量分析では、土壌に含まれる植物（主にイネ科植物）の表皮細胞に形成される植物珪酸体の化石であるプラント・オパールの密度（土壌乾燥重量1g当たりの個数）を検鏡プレパラート中に出現するガラスビーズとプラント・オパールの数量比から算定する（宇田津2003）。

今回、定量を行った植物は、イネ（*Oryza sativa* L.）、ヨシ属（*Phragmites*）、タケ亜科（*Bambusoideae*）、ウシクサ族（*Andropogoneae*）、キビ族（*Panicaceae*）である。

②土壌からのプラント・オパール全量抽出

定量分析の結果は、先に述べたとおり、地層から採取した1g（乾燥重量）の土壌に含まれるプラント・オパールの種類とその密度を示している。1gで地層の土壌を代表しているため、地層に含まれている真のプラント・オパールの種類と密度と定量分析の結果には、一定の差異と誤差が存在する。今回は、黒色土に還元されているイネ科植物由来の有機物を確認するという目的に照らし、より信頼度を高めるために、南地点の11層から2,732g、北地点11b層から3,382g・11c層から3,252gをブロック状に採取し、その土壌を均質化し、それぞれから100gを取り出した土壌を抽出対象として、そこに含まれるプラント・オパールの全量抽出を行った。その概要は、次のとおりである。

主要なプラント・オパールは、土壌を構成する土粒子の大きさと比重において、おおむね図24に示す範囲に分布している。この粒径と比重の分布特性を利用し、土壌を粒径分画と比重分画で構成される抽出工程（図25）で処理することで、土壌からプラント・オパールを抽出する（宇田津・中村2019）。

2. 結果

表5と図26、表6と図27が、それぞれ北地点東壁と南地点南壁の定量分析結果、図28が検出プラント・オパールの写真である。イネの検出密度に着目すると、北地点では4層および6～8層、南地点では6層で安定した稲

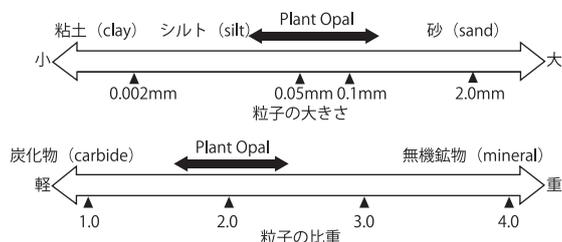


図24 土粒子におけるプラント・オパールの大きさと比重の分布



図25 土壌からのプラント・オパールの抽出工程

作が営まれていると推定される。特に、古代と推定されている北地点の7a層と中世とされる南地点の6層のイネプラント・オパールの検出密度がそれぞれの地点で高い値を示している。加えて、ヨシ属が検出されないことから、これらの地層の時代には、安定かつ連続的に水田が営まれたことがうかがえる。

黒色土については、北地点の11層ではイネプラント・オパールが検出されているが、部分的であり、密度もそれほど高い値ではない。また、イネ科植物由来の有機物の給源としてはイネではなく、タケ亜科であると判断される。

図29は、北地点2試料、南地点1試料の試料100gから抽出したプラント・オパールである。北地点11b層から0.863g、同地点11c層から0.864g、南地点11s層から0.707g程度が抽出され、数に換算（イネやタケ亜科やウシクサ族をモデルとして、重量比から算定）すると、およそ980万個～1,200万個となる。

図30・図31・図32は、各黒色層から抽出されたプラント・オパールを生物顕微鏡（100倍）で撮影したものである。基調となるプラント・オパール組成はいずれもタケ亜科が主体で次にウシクサ族（ススキ属など）という点で、いずれも共通していた（南地点11層、北地点11b層・11c層）。なお、南の11層には極めてわずかであるが、イネが含まれていた。また、3試料いずれにも、少量、ヨシ属が確認された。以上の結果から、プラント・オパール分析からは、黒色層の有機物の給源は、定量分析の結果と同様に、タケ亜科が主体であると推定された。

3. まとめ

南北両地点ともに、古代・中世と推定される地層において、安定した水田稲作が営まれ、近世、近代にまで稲作が継続された状況が推定された。また、黒色土の地層からは、イネの検出はほとんどなく、プラント・オパールの給源植物の主体は、定量分析および全量抽出の結果から、タケ亜科と推定された。今回の結果は、当然のこ

表5 北地点東壁の採取試料のプラント・オパール定量分析結果

層名	イネ <i>O.sativa</i>	ヨシ属 <i>Phrag.</i>	タケ亜科 <i>Bamb.</i>	ウシクサ族 <i>Andoro.</i>	キビ族 <i>Pani.</i>
2層	1.774	3.547	3.547	4.434	0
3a層	768	1.537	4.610	3.073	0
3b層	1.537	1.537	3.075	4.612	0
3c層	1.759	0	7.035	5.276	0
4層	6.413	916	4.580	9.161	0
5層	1.713	0	8.565	7.709	0
6層	2.936	2.202	9.542	8.074	0
7a層	10.202	0	5.565	5.565	0
7b層	2.516	1.678	5.872	3.355	0
8層	3.371	0	6.742	6.742	0
9層	0	0	10.823	6.660	0
10層	1.746	0	9.604	3.492	0
11a層	1.623	0	8.929	10.552	0
11b層	0	1.912	23.898	11.471	0
11c層	0	0	28.512	15.147	0
12a層	1.897	946	10.435	4.743	0
13a層	0	3.402	6.804	1.701	0

(個/g)

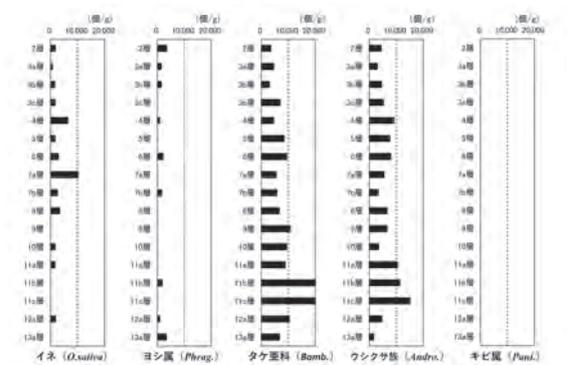


図26 津島岡大38次定量分析結果グラフ（1）

表6 南地点東壁の採取試料のプラント・オパール定量分析結果

層名	イネ <i>O.sativa</i>	ヨシ属 <i>Phrag.</i>	タケ亜科 <i>Bamb.</i>	ウシクサ族 <i>Andoro.</i>	キビ族 <i>Pani.</i>
3層	1.639	819	5.736	7.375	0
4層	1.506	2.259	15.060	11.295	0
5層	872	0	9.587	11.331	0
6層	3.340	0	8.349	7.514	0
11層	0	0	21.229	11.999	0
12a層	0	1.694	6.774	3.387	0
13a層	0	826	2.479	3.305	0

(個/g)

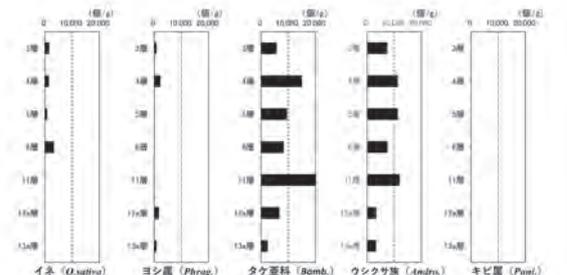


図27 津島岡大38次定量分析結果グラフ（2）

とながら、プラント・オパールを生産しない他の植物が黒色土の主要な還元有機物になっている可能性を否定するものではないことを申し添えておきたい。

最後に、今回、試料採取ならびに貴重な調査分析の機会を与えていただいた、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの関係各位に感謝申し上げたい。

参考文献

宇田津徹朗2003「プラント・オパール分析」『環境考古学マニュアル』同成社、pp.138-146

宇田津徹朗・中村俊夫2019「プラント・オパールの表面に残留する微細繊維による年代測定法の開発（Ⅱ）」『日本文化財科学会第36回大会要旨集』日本文化財科学界、pp.302-303

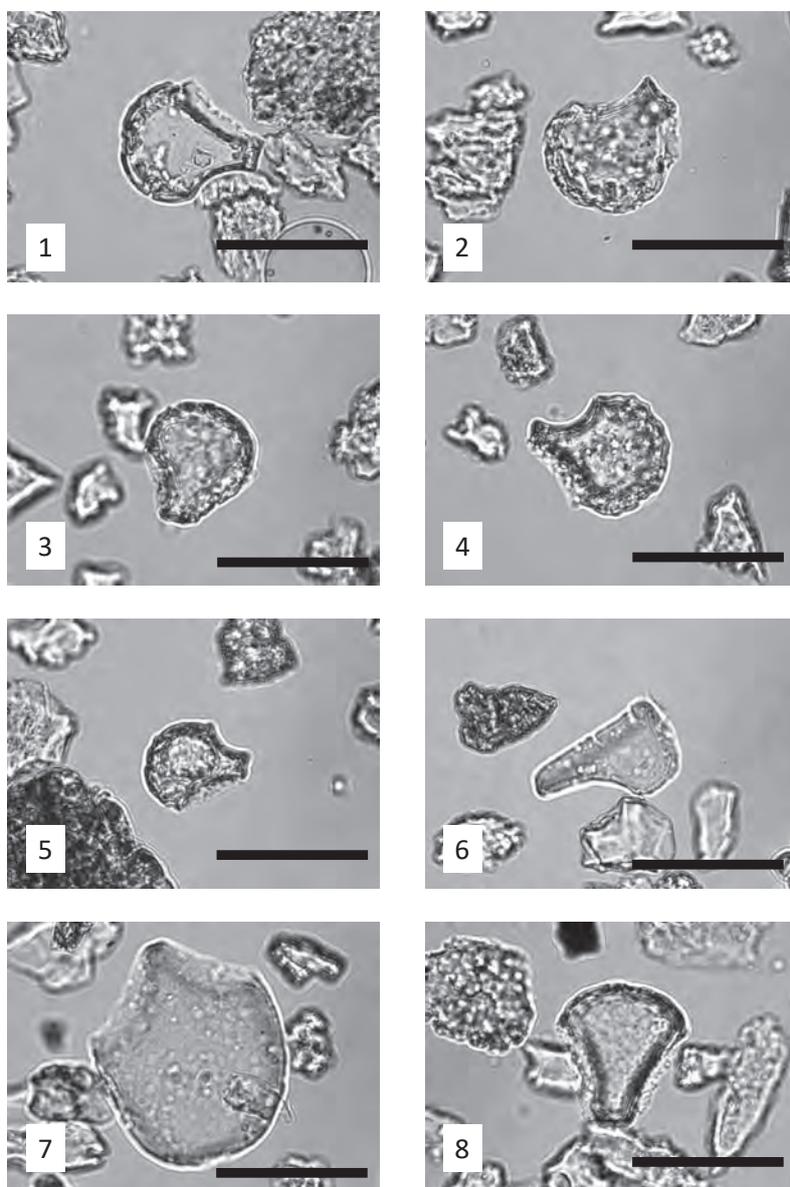


図28 検出されたプラント・オパール（第38次発掘調査区）
1～5：イネ、6：ウシクサ族、7：ヨシ属、8：タケ亜科

※スケールは50 μ m



図29 黒色土から抽出されたプラント・オパール

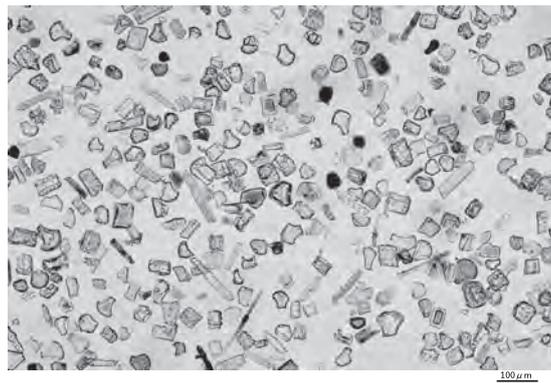


図30 黒色土から抽出したプラント・オパール（北地点11b層）

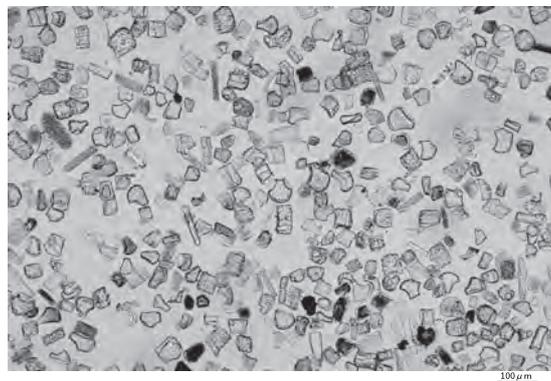


図31 黒色土から抽出したプラント・オパール（北地点11c層）

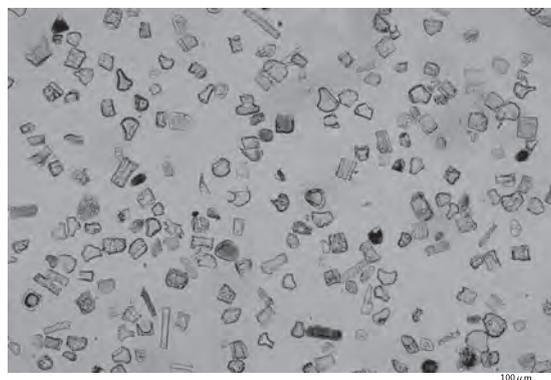


図32 黒色土から抽出したプラント・オパール（南地点11a層）

3. 鹿田遺跡第24次調査出土の草花双鳥鏡

南 健太郎

はじめに

鹿田遺跡は岡山市北区鹿田町に所在する、縄文時代から近代までの遺構・遺物が確認されている複合遺跡である。遺跡範囲は岡山大学鹿田キャンパス全域とその周辺に広がっている。岡山県の中心を南北に流れる旭川の下流西岸に位置し、干拓が始まる近世以前は海岸線に近い環境であったと考えられている。本遺跡の調査成果で大きなウエイトを占めるのは、平安時代に設けられた藤原摂関家の殿下渡領である鹿田庄に関するものである。殿下渡領は全国に4ヶ所設けられた藤原氏の氏長者が伝承した領地であり、鹿田庄はそのうちの一つに数えられている。これまでの調査では屋敷地を区画する溝や、井戸、墓などの遺構が多数確認されている。また出土遺物には他地域からもたらされた土器や陶磁器をはじめ、石帯や陶硯、漆塗り烏帽子などの稀少なものもみられる。このことから鹿田庄は古代・中世を通じて屋敷地として利用され、備前地域における文化・経済の拠点であったと考えられている。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが実施した鹿田遺跡第24次調査では1面の銅鏡が出土した。本遺跡での銅鏡の出土は初めてであった。本調査の成果についてはすでに報告書を刊行している（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編2018；以下『報告』と記す）が、この際本鏡は保存処理が未了であったため、その概略を述べるに留めていた。その後、2019年度に保存処理が完了したため、ここにその詳細を報告し、あらためて銅鏡出土の意義について考えてみたい。

1. 鹿田遺跡第24次調査の概要

本調査地点は岡山大学鹿田キャンパスの西端に位置する。弥生時代から近代の遺構・遺物が確認されたが、ここでは銅鏡に関連する平安時代から鎌倉時代の様相をみてみよう。確認された遺構は井戸5基、土坑2基、溝6条、土手状遺構1条、畦畔1条、ピット多数である（図33）。主要な遺構である井戸・土坑・溝を時期別にまとめると、井戸2が11世紀初頭と古く、井戸3・5・土坑2および溝7・8が12世紀中葉～13世紀前半、井戸4・

6および溝4・5（+土手状遺構）・9が13世紀後半～14世紀前半となる。

銅鏡が出土したのは溝4の東西方向中央部の南側である。溝4の検出面である5c層を掘削中に、完形の土師皿4点、破片の白磁碗1点と近接して出土した¹⁾。土師皿1点が原位置をとどめていたため出土後に周囲を精査したが、遺構は確認されなかった。

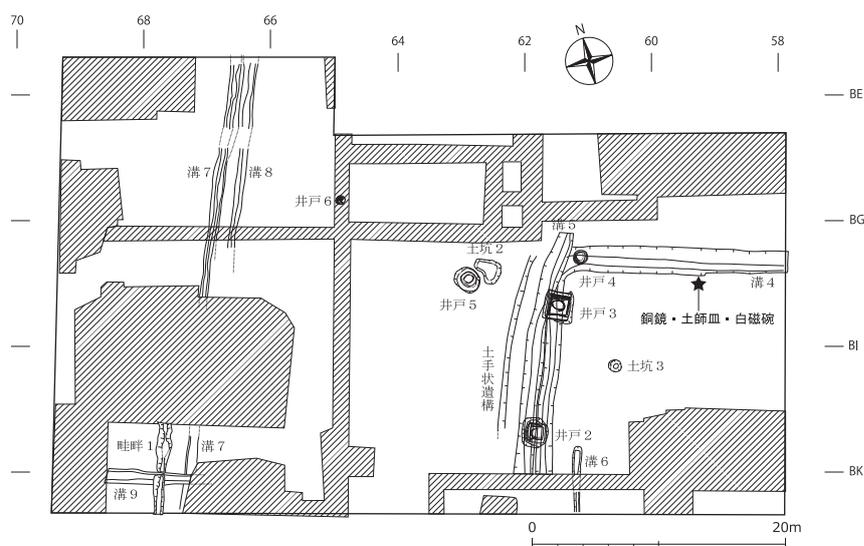


図33 銅鏡・土師皿・白磁碗の出土位置（★）（縮尺1/600）

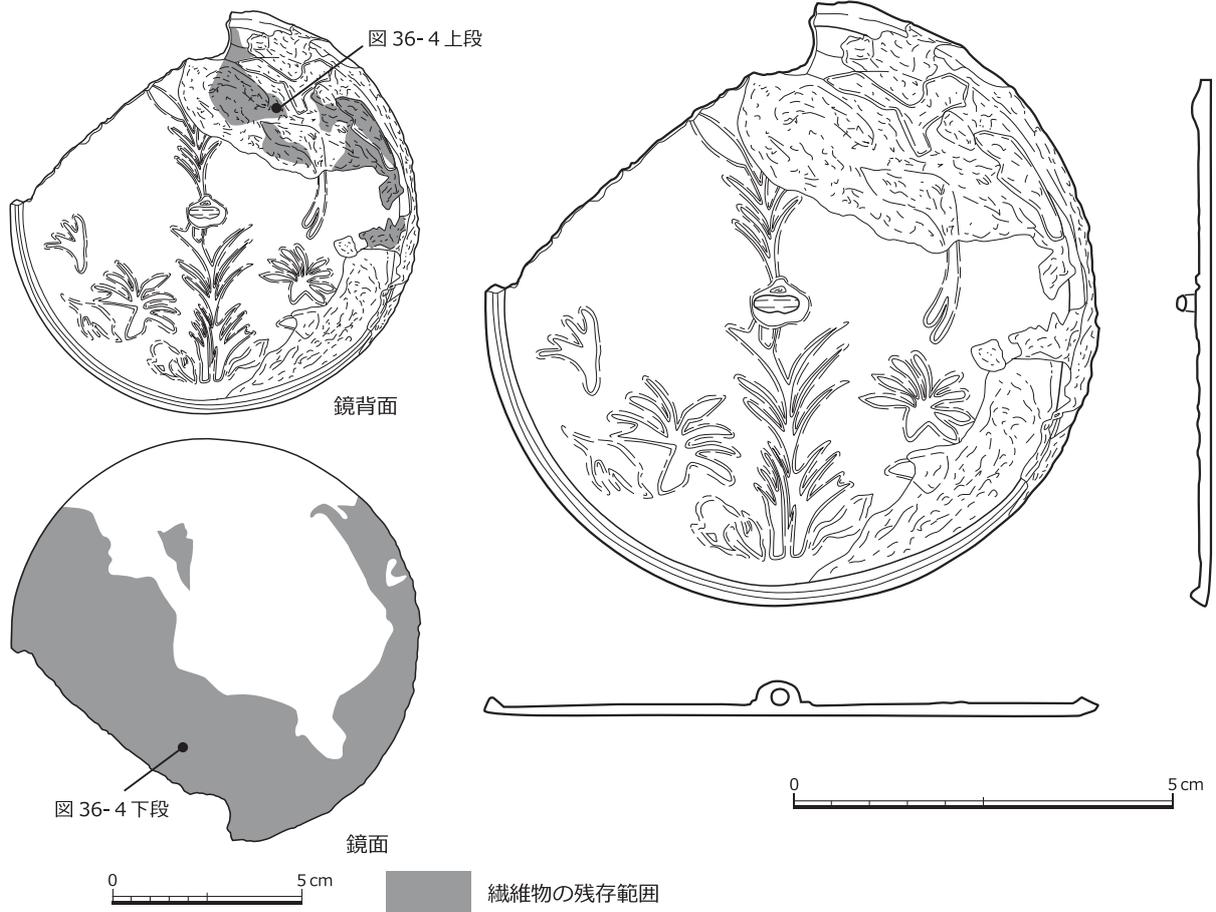


図34 銅鏡実測図 (縮尺1/1、繊維物残存範囲：縮尺2/3)

2. 銅鏡の検討

出土後の整理作業において鏡背面の複数個所に繊維物が確認されたため、『報告』では土を落とさない状態で記録をとり、その内容を記載した。その際は径8.06cm、縁厚0.22cm、縁幅0.3cm、鈕厚0.47cm、内区厚0.16cm、重量32.2gであった。内区文様はエックス線写真で把握し、鈕の両側に枝分かれた葉のような文様、その外側の花状の文様が確認された。

2019年度に実施した保存処理によって全体の形状や鏡背面の文様が明瞭となったので、あらためて形態、文様、製作技術、繊維物について検討する(図34~36)。

形態 面径は鈕孔の直角方向で80.27mm、鈕孔方向で79.97mmを測る。縁幅は3.04mm、縁厚は2.0~2.24mm、断面形は頂部に丸みを帯びる三角形状で、蒲鉾型に近い。重さは29.9gである。内区厚は文様のないところで1.41mm、文様の

あるところで1.73mmであり、全体的に大きな差はなく均一である。鈕は素鈕で、幅2.83mm、長さ6.46mmの橋状を呈する。断面形は半円形で、中央に正円形の鈕孔を有する。鈕の高さは3.0mm、鈕の部分の厚さは4.42mm、

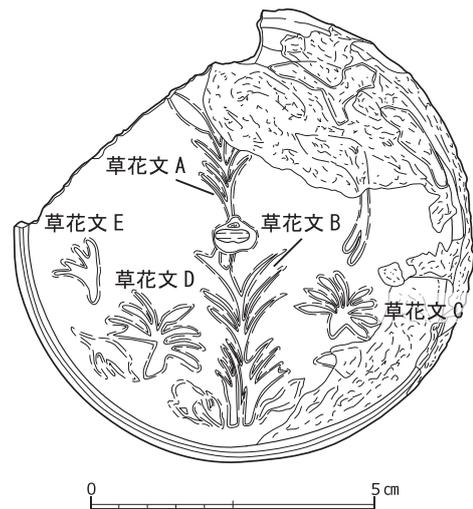


図35 草花文の配置 (縮尺3/4)

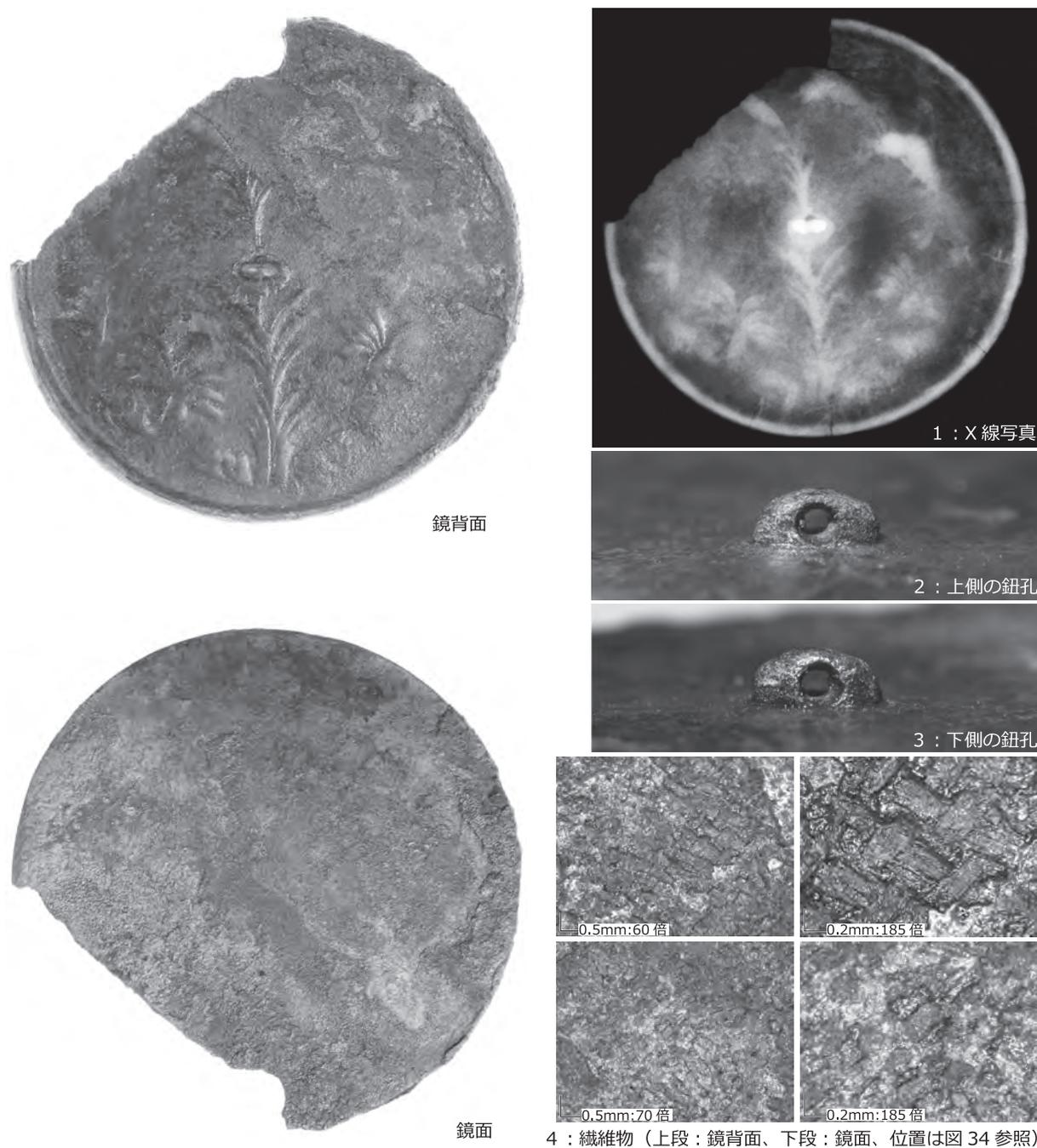


図36 銅鏡の写真 (左：縮尺1/1、右1～3：縮尺任意、右4：60～185倍)

鈕孔の径は1.88mmである。鈕にはわずかに厚みのある楕円形の鈕座が付随している。鈕座は長辺8.91mm、短辺6.27mmである。なお鏡面の反りはない。

文様 鈕の両側とその周囲に配された草花文と、双鳥が文様構成の主体である。鈕をはさんで配される草花文の始点を下にした方向で記述する。草花文は丈の長いものと短いものがあり、前者は鈕の上下、後者は鈕よりも下の位置に配されている。草花文は形状がそれぞれ異なっているため、鈕の上の草花文をA、鈕の下の草花文をB、Bの右側の草花文をC、Bの左側の草花文をD、Dの左の草花文をEとする(図35)。草花文Aは鈕座に始

点が接しており、始点を起点として茎・葉を左右に伸ばしている。草花文は先端が細くなっているが、最も上部には中央に膨らみを持つ葉が表現されている。草花文Bは縁の内側が視点となり、左右に伸びる茎・葉が配されている。草花文Aと比べると基部が太く、さらに2つに分けて表現されている点異なる。また草花文は先細りで表現されており、草花文Aのような膨らみを持つ葉の表現はみられない。基部の左右にも文様が確認できるが、不鮮明であるため何を表現したものかは決め難い。草花文Cは短尺の草花文で、基部は葉よりも太く表現されている。左右に各4つの茎が表現されるが、いずれも下方の二つは中央が膨らむ葉が表現されている。草花文Dも同様に基部が太く、左右に4つずつ茎が伸びる。右側最上部の茎の先には中央に膨らみをもつ葉の表現がみられる。また基部左側に何らかの文様が鋳出されている。草花文Eは草花文C・Dの左側半分のみが表現されたものである。

また保存処理の際に繊維物が残存しているため土を除去しなかった部分には、X線写真で頭部を草花文A側に向けた鳥文状の文様が2体分確認できる。両者とも頭部には三角形の嘴があり、体は尾に向けて幅を減じる。下方の鳥文は上方のものよりも大きく、尾の部分は土を落とした部分の外側まで伸びている。尾は二本の線で表現されており、先端部分を太くし、丸くおさめている。このような尾の構成は上方の鳥文も共通している。さらにX線写真では、下方の鳥文胴部の右上と尾の右下に白いまとまりがあり、この部分はやや厚みがある。このことからこれらの位置にも何らかの文様（蝶？）が表現されている可能性がある。

以上の特徴から鏡式は草花双鳥鏡とすることができる。

製作技術 文様は全体的に不鮮明であるが、その一方で鈕孔の角は丸みを帯びることなく鋭い状態を保っている。このことは鈕孔に紐を通して長期間、あるいは頻繁に使用したために、本来鮮明だった文様が不鮮明になったというわけではないことを示している。文様の不鮮明さは鋳造後にすでに生じていたと考えてよかろう。文様不鮮明さの要因としては、原型に鋳型材を押し付けて文様を転写する、踏み返し技法による製作が挙げられる。踏み返し技法で製作された場合、鋳型材の押し付けが不十分であった場合、原型よりも文様が不鮮明になりやすい。本鏡では踏み返し鏡の痕跡を見出すことができないが、その可能性は残しておくべきだろう。

また上側の鈕孔の基部には、平面半円形の浅い窪みが確認される。この窪みは鈕孔とほぼ同じ幅を有する。鋳型成型時に、鈕孔を作り出すために設置された中子の脇に、中子と同じ幅の小さな塊が存在したことを示している。鈕孔と窪みはほぼ接するが一連にはなっていない。このため、小塊が中子設置にともなう処置であったかどうかは判断できない。ただし、このような小塊が鈕孔製作のために重要な中子の傍らに存在していた場合は容易に取り除くこともできたはずである。しかしこれを残したまま鋳造がなされていることは、本鏡製作者集団の鋳型成形の特徴と捉えることができるかもしれない。

繊維物 鏡背面と鏡面で残存が確認された（図34・36-4）。鏡面と鏡背面の繊維物は接点をもたないが、本来は一体のものであったと考えられる。このため、本鏡は繊維物に包まれた状態であったと思われる。特に鏡背面は残存状態がよく、その構造がよく観察できる。縦・横ともに同じ幅の材が用いられており、直交に交差するように規則正しく編みこまれている。横材を基準にした場合、縦材は横材を超える→潜るが繰り返されており、隣り合う縦材はその反対の動作が繰り返されている。この編み方は全体に共通している。

3. 鋳造時期について

ここまでの検討で、本鏡は草花双鳥鏡であり、以下のような特徴を有することを示した。

- ・文様には円圏を用いない
- ・橋状の素鈕
- ・蒲鉾型に近い縁

これらの文様構成や形態的特徴は、いわゆる多度式鏡と共通するものである（中野1969、内川2003・2014）。



1 東城寺経塚郡 (三寸二分 (約 9.7cm))

2 多度大社 (8.9cm)

3 西野田経塚 (8.4cm)

図37 多度式鏡の諸例 (縮尺1/2)

多度式鏡は宋代を中心に製作された湖州鏡の影響を受けて成立した鏡式である。ここでは多度式鏡や他の和鏡との比較から鑄造時期について検討する。

多度式鏡のような宋鏡の影響を受けた和鏡は、鳥取県湯梨浜町伯耆一宮経塚 (倭文経塚) 出土の康和五年 (1103年) 銘経筒に納められていた蝶鳥六花鏡が最古例とされている。また福岡県直方市永満寺経塚では文久元年 (1113年) 銘経筒に納められていた薄鳥文鏡や、茨城県土浦市東城寺経塚郡出土の保安三年 (1122年)・天治元年 (1124年) の銘をもつ経筒に伴って出土した蝶鳥鏡も同様の特徴をもつ鏡である (図37-1)。紀年銘資料にともなった多度式鏡にこれ以降の年代の資料と共伴したものは確認されおらず、製作の下限時期は明確にし難い。ここで鎌倉時代に継承される縁が垂直気味に立ち上がり、圏線を有し、菊花をあしらった鈕座を有する和鏡についてみてみたい。このような特徴をもった古い和鏡として、保安三年 (1122年) 年銘経筒と伴出した松鶴鏡が挙げられる。この鏡は鳥文表現が多度式鏡とは大きく異なっており、形態の特徴、文様構成の決定的な相違から、両者は異なる系譜にあると考えられる。1122年前後には和鏡生産の画期が存在したことが考えられ、多度式鏡生産は12世紀第2四半期初頭ごろまでであった可能性を示唆している。

鹿田遺跡第24次調査出土鏡は、草花が鈕の上下に配される点や、草花の基部および中央が膨らむ葉の表現、鳥文の尾の表現が多度大社の草花蝶鳥鏡に類似している (図37-2)。この鏡には鈕孔付近に窪みが見られ、この点も鹿田鏡と共通している。ただ鹿田鏡の草花には丈が短いものもあり、左右の開きは多度大社鏡よりも短い。丈が短い草花表現は広島県西野田経塚出土草花双鳥鏡でも確認でき、西野田鏡の草花の開きは鹿田鏡よりもおさえられている (図37-3)。西野田鏡の草花は鈕を挟んだ上下配置ではなく、鳥文の尾の表現も異なっている。これを文様の省略と捉えるならば、多度大社鏡→鹿田鏡→西野田鏡という製作順序が考えられる。

保安三年 (1122年) の経筒に伴った蝶鳥鏡は鳥文の表現が退化してはおらず、蝶は多度大社鏡に通じる。西野田鏡をこれよりも下るものと考えて12世紀第2四半期にかかるころの製作と考えた場合、鹿田鏡の製作年代は12世紀第1四半期末ごろとすることができるだろう。

4. 鏡出土地点周囲の遺物

鏡の周囲では完形の土師皿4点、白磁碗1点が出土したことはすでに述べた (図38)。明確な遺構は検出されなかったが、近接し、ほぼ同じ

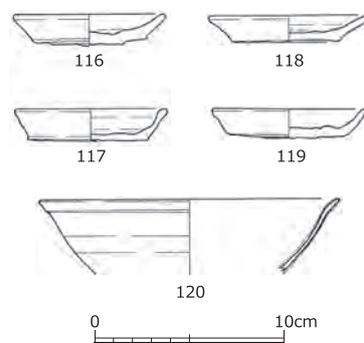


図38 銅鏡と同一地点で出土した土師皿・白磁碗 (縮尺1/4)

高さから出土したことから、同時期のものである可能性が極めて高い。ここではその編年的な位置づけを考えてみよう。

まず土師皿4点をみてみよう（図38-116～119）。歪みの大きい118を除くと、これらは口径7.9～8.2cm、底径6.1～6.4cm、器高1.5～1.8cmであり、鹿田遺跡でも数多く出土している小皿であると言える。当地域における中世の土師質土器は、時期が新しくなるにつれて調整手法の簡略化と法量の縮小化がすすむことが指摘されている（福田1981）。本遺跡の小皿は松木武彦によって検討されており、11世紀から14世紀にかけて、径の縮小・軽量化ならびに粗放化が進行することが明らかにされている（松木1993）。本小皿群の口径は8.0cm前後であり、12世紀末～13世紀の領域に含まれている。また重量は118の26.8gから116の54.9gであり、これも12世紀末～13世紀の資料群と共通する特徴といえる。岡山県瀬戸内市助三畑遺跡井戸4では養和元年（1181年）銘題籤に伴って土師質小皿が出土しているが、口径は8.0～8.2cmのものが最も多く、器高は1.4cm前後である（馬場他2014）。このようにサイズからみると本小皿群は12世紀末前後のものであると考えられる。

白磁碗（図38-120）は大宰府分類白磁碗V-2類である（太宰府市教育委員会編2000）。大宰府編年のC期のもので、11世紀後半から12世紀前半にあたる。

このように鏡と同位置で出土した資料は土師質小皿が12世紀末、白磁碗が12世紀前半であり、時期に少なくとも隔りがある。しかし、本遺跡をはじめとした岡山県南部地域ではC期の陶磁器の出土ピークが大宰府よりも遅れることが指摘されており、14世紀前半以降も継続して出土する傾向がある（岩崎1997）。このため土師皿と白磁碗が共伴したとしても矛盾した状況というわけではない。銅鏡についても廃棄時期は製作・入手・保有期間を見込む必要がある。このことからこれらの廃棄時期が12世紀末ごろであった可能性は十分考えられるだろう。

5. 銅鏡出土の歴史的意義

本論では鹿田遺跡第24次調査で出土した銅鏡の詳細を報告し、あわせて鏡と同位置で出土した土師皿、白磁碗の検討をおこなった。銅鏡は12世紀第1四半期末前後に製作されたと考えられるいわゆる多度式鏡である。鹿田遺跡の位置する岡山県地域では古代から中世の銅鏡の出土がみられるが、発掘調査等で出土した明確な遺構にともなったものをみると、墓や経塚からの出土が圧倒的に多い。また墓ではほとんどが土師皿や陶磁器と共伴して出土しているという傾向がみられる。これらのことから鹿田遺跡第24次調査では明確な遺構は検出されなかったが、土師皿や白磁碗と同位置で出土したことから、墓の副葬品であった可能性が考えられる。鹿田遺跡では第5次調査、第25次調査で12世紀後半～13世紀初頭の墓が確認されており、銅鏡がこの時期の墓の副葬品であったと考えても矛盾なく理解できる。

ではこの時期において銅鏡が副葬されたのはどのような社会的階層の人物であったのであろうか。兵庫県における平安時代～中世の墓の検討では、銅鏡は副葬品の中でも最も上位に位置づけられ、銅鏡副葬墓の被葬者は在地における最上層の階層である下司級領主であったことが指摘されている（宮原2002）。岡山県南平野部では、この時期の集団墓地が確認されている。岡山市津寺遺跡では白磁合子や白磁碗、刀子といった墓群で最も豊富な副葬品を棺内外に納めた墓から銅鏡が出土しており（岡山県古代吉備文化財センター編1994）、岡山市高塚遺跡でも墓群で唯一刀子と青白磁合子（蓋）がセットで副葬された墓から銅鏡が出土している（岡山県古代吉備文化財センター編2000）。また百間川原尾島遺跡では青磁碗・青磁皿とともに湖州鏡が出土しており、やはり墓群では副葬品の内容が優れている（岡山県古代吉備文化財センター編1996）。これらのことは鹿田遺跡が位置する岡山県地域でも銅鏡は階層的上位者のみが保有できる器物であったことを示している。

このように、銅鏡の出土は12世紀の鹿田遺跡が当地域で最上位の有力者集団の領地であったことを物語っている。鹿田遺跡は藤原摂関家の殿下渡領であった鹿田庄の所在地と考えられており、10世紀後半には文献にもその名がみられる。殿下渡領という摂関家直属の荘園としての社会的位置づけは、12世紀に至ってもなお色濃く残っ

ていたと考えられるだろう。

本論を草するにあたっては實盛良彦氏から貴重な助言を賜りました。記して感謝いたします。

註

- 1) 『報告』P69の3行目では「図76-116~119、図77-M5は5c層の掘削中に一括で出土」と記載しているが、正しくは「図76-116~120、図77-M5は5c層の掘削中に一括で出土」であった。また『報告』P96の観察表では120の器種を青磁碗としているが、正しくは白磁碗である。このことから鏡とともに出土したのは、本論の文中で示した土師皿4点、白磁碗1点である。『報告』をここで訂正する。

参考文献

- 岩崎志保1997「輸入陶磁器から見た鹿田遺跡」『鹿田遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 内川隆志2003「和鏡の型式と変遷」『考古学ジャーナル』No.507 ニュー・サイエンス社
- 内川隆志2014「鏡と信仰－和鏡の成立と展開－」『印旛郡市文化財センター第18回遺跡発表会講演資料』
- 大阪市立美術館編1938『扶桑紀年銘鏡図説』大阪市立美術館学報第一 便利堂
- 岡山県古代吉備文化財センター編1994『三手遺跡 津寺遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90
- 岡山県古代吉備文化財センター編1996『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106
- 岡山県古代吉備文化財センター編2000『高塚遺跡 三手遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150
- 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編2018『鹿田遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第33冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 太宰府市教育委員会編2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財49 太宰府市教育委員会
- 中野政樹1969『和鏡』日本の美術10・11 至文堂
- 馬場昌一・福田正継・白石純2014「岡山県助三畑遺跡井戸4出土遺物の様相－養和元（1181）年銘題籤が伴う遺物の実態－」『古文化談叢』第71集 九州古文化研究会
- 福井県立博物館編1986『古鏡の美～出土鏡を中心に～』福井県立博物館第5回特別展
- 福田正継1981「中世の土器について」『百間川沢田遺跡1 百間川長谷遺跡 百間川岩間遺跡 百間川当麻遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告46 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会
- 松木武彦1993「鹿田遺跡における中世土師質小皿の検討」『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 宮原文隆2002「兵庫県内における平安時代末～中世の墓の様相」『思い出遺跡群IV』中町文化財報告27 兵庫県多可郡中町教育委員会
- 村上正名1956「安芸国豊田郡本郷町野田山経塚」『吉備考古』第91号 吉備考古学会

図出典

- 図33~36：筆者作成、図37：1 大阪市立美術館編1938、2 福井県立博物館編1986、3 村上1956、図38：岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編2018

4. 鹿田遺跡第24次調査出土銅鏡の成分分析調査

(株) 吉田生物研究所

1. はじめに

岡山大学が所蔵する鹿田遺跡から出土した銅鏡1点について、材質を明らかにする為に以下の通り成分分析を行った。その結果を報告する。

2. 資料

調査した資料は銅鏡1点である。直径80.27mm。1/5程欠損。土錆に覆われている。両面に繊維が残存する。X線写真で草花文?が確認できる。(図39)。

3. 方法

資料の銅鏡鏡面をクリーニング後に蛍光X線分析を行い、元素を同定した。装置は島津製作所製のエネルギー分散型蛍光X線分析装置EDX-8100を用いた。

4. 分析結果

成分分析結果のスペクトルを付す(図40)。図40に分析結果一覧を示すが、その数値はあくまで参考すぎない。結果から銅(Cu)、錫(Sn)、鉛(Pb)、砒素(As)が主な成分として検出されていた。これらから資料の銅鏡は銅錫合金の青銅製品で、鉛(Pb)は湯通しを良くするために添加されている。砒素(As)についても2%以上あるので鉛と同様に湯通しを良くするために添加されたものと推測される。微量元素の銀(Ag)、アンチモン(Sb)は銅の精錬過程で精錬しきれずに残留したものと考えられる。珪素(Si)、カルシウム(Ca)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)は土壌由来と考えられる。



鏡背面

鏡面

図39 分析資料

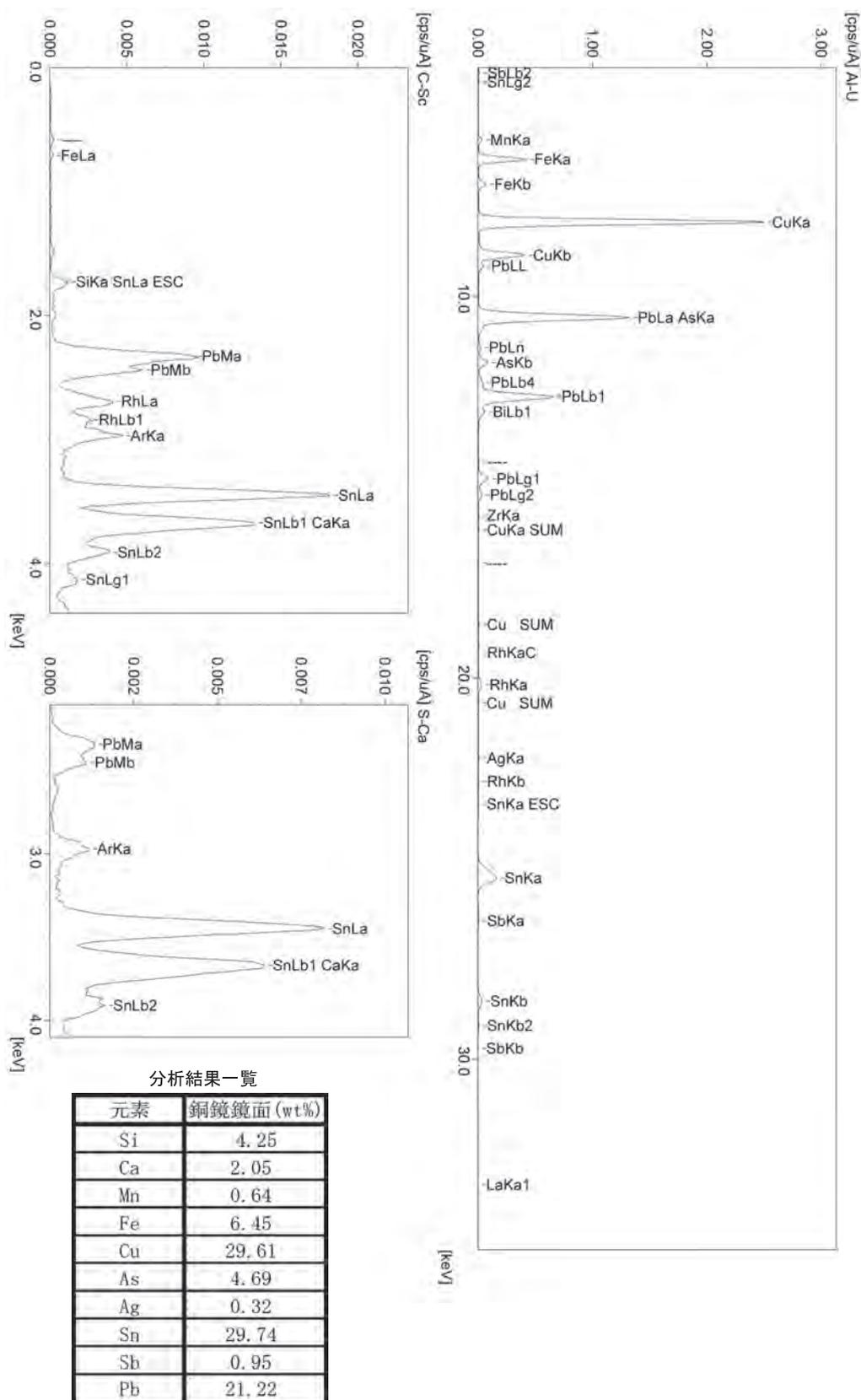


図40 分析結果

第2章 調査資料の整理および公開・活用

第1節 調査資料の整理・保存処理

1. 調査資料の整理

2019年度は鹿田遺跡第12・17・19・20・22・28次調査の整理作業を実施した。具体的には第12次調査では調査図面のトレース、第17次調査では出土遺物の実測・トレースおよび調査図面のトレース、第19次調査では遺物接合、第20次調査では調査図面の整理、第22次調査では注記、第28次調査では出土遺物の洗浄をおこなった。そして、鹿田遺跡第17次調査成果について『鹿田遺跡14』（岡山大学構内遺跡発掘調査報告36冊）として刊行した。

自然科学的分析は、表7の通りである。

表7 2019年度分析一覧

調査次	分析資料	分析の種類	分析機関・分析者	主な結果
鹿田24次	銅鏡	成分分析・繊維物材質分析	(株)吉田生物研究所	本書第1部第1章第3節参照。繊維物については残存状況が悪かったことから材質の特定に至らなかった。
津島岡大第37次	土壌	プラントオパール分析	宇田津徹朗	本書第1部第1章第3節参照。

2. 調査資料の保存処理

a. 木製品のPEG処理

2019年度は第14期の保存処理を実施した。

第14期：鹿田遺跡第9・11次調査、同第20次調査A地点、同第23次調査、同第24次調査、同第25次調査、同第26次調査、津島岡大遺跡第27次調査

b. 出土遺物の委託保存処理

鹿田遺跡第24次調査出土銅鏡の保存処理を株式会社吉田生物研究所に依頼し、2020年3月に納品された。

(南)

第2節 調査成果の公開・活用

1. 公開・展示

a. 第20回キャンパス発掘成果展「岡山大学への道—近世・近代の津島—」

2019年度は岡山大学が創立70年を迎えるということもあり、近世・近代を経て岡山大学へと至る過程をテーマとした展示会および、岡山大学構内に残る旧陸軍関連施設の見学イベントを企画した。展示会場は津島キャンパスの総合研究棟1階ロビーとし、会期は2020年3月3日～7日を予定していた。しかし、新型コロナウイルスの流行により、展示会とその関連イベントはすべて2020年度に延期することとなった。

(山口)

b. 第10・11回公開講座

「考古学と関連科学」を全体テーマとした本センターの講座は、2019年度で4年目となった。2019年度も例年通り三回（11・1・3月）を予定していたが、新型コロナウイルスの流行により3月は開講することができず、11月・1月の二回を実施した。募集定員は各回50名、参加費は各回500円とした。また漆器をとりあげた第12回は講座内容に関連する資料の小展示をおこない、構内遺跡で出土した漆塗製品や、講師が作成した漆器を眼前にしたフリートークもおこなわれた（図41）。

2019年度の実施内容は以下の通りである。

第10回 「戦いの考古学」

2019年11月16日（土）14：00－16：00

岡山大学津島キャンパス文・法・経済学部講義棟

1階 12番教室 参加者40名

大藪 由美子（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム学芸員）

「弥生時代人の争いごと－土井ヶ浜弥生人の事例－」

清家 章（岡山大学大学院社会文化科学研究科教授）

「古墳時代の女性と戦争」



図41 公開講座の様子

第11回 「漆器の世界」

2020年1月25日（土）14：00－16：00

岡山大学津島キャンパス附属図書館

3階セミナー室 参加者27名

塩津 容子（日本工芸会会員）

「備中漆の活用と漆器の製作」

岩崎 志保（本センター助教）

「鹿田遺跡出土の漆碗」

2. 資料・施設等の利活用

a. 調査・研究への支援

(1) 資料調査協力

- ・津島岡大遺跡出土石器：藤井翔平（岡山県古代吉備文化財センター） 2019年4月24日
- ・津島岡大遺跡第5・6・9次調査出土種子：那須浩郎（岡山理科大学） 2019年7月9日・8月5日
- ・津島岡大遺跡第5次調査出土縄文土器：小南裕一（北九州市教育委員会） 2020年2月7日

(2) 図書の貸し出し

- ・図書の外部貸し出し：9冊（岡山大学教員、学生）

(3) 資料提供

- ・津島岡大遺跡第37次調査土壌：宇田津徹朗 2020年2月20日

(4) 写真掲載・画像使用等

- ・津島岡大遺跡出土縄文土器・弥生土器：(株)小学館 2019年9月20日
- ・『吉備の弥生時代』掲載写真：村上恭通 2020年1月9日
- ・鹿田遺跡第28次調査現地説明会資料・調査写真：ジャパン通信情報センター 2020年2月13日

(5) マスコットキャラクター利活用

- ・しかたん画像提供：鹿田夏祭り実行委員会 2019年5月2日
- ・しかたん画像提供：NPO法人むきばんだ応援団 2019年9月9日
- ・しかたん画像提供：岡山大学鹿田祭「医学展」 2019年9月29日（南）

(6) クラウドファンディング

本センターでは2013年度に鹿田遺跡のマスコットキャラクターを公募により決定し、広報に活用している。2015年度からは、着ぐるみを自主製作し、展示会や地域の夏祭り等の機会に登場させることで鹿田遺跡の認知度を上げてきた。こうした広報活動をより効果的に行うため、クラウドファンディングの利用について2018年度後半から企画を練った。本年度、学術系クラウドファンディングサイトacademistと連携し下記の取り組みを実施した(図42)。支援金額に応じて返礼品を贈る「購入型クラウドファンディング」である。なお、本プロジェクトが、岡山大学とacademistの初の連携である。

期 間：2019年8月30日～10月28日

プロジェクト名：鹿田遺跡の発掘成果をしかたんの活用で多くの人に届けたい

用 途：キャラクター着ぐるみの更新

募集金額：1,000,000円

支援総額：350,500円

支援者数：50名

期間内に目標額に達成せず不成立に終わったが、多くの支援者を得ることができ、一定の成果はあった。着ぐるみの更新はかなわなかったが、キャラクターを活用した広報活動の有効性を改めて認識できた。(岩崎志保)

b. 教育支援

(1) 博物館実習 2019年8月9日

2019年度は13名の実習生が受講した。発掘調査出土資料の整理作業を体験することで、考古資料の取扱いに関する基礎知識の習得を目的とし、本センターでの室内作業を実施した。実習は2グループに分かれ、出土遺物の洗浄・注記・接合作業を中心におこなった。実習の最後には各班から実習内容の総括と反省について発表する時間を設けた。チームで課題に取り組ませることで、講義の習熟度とコミュニケーション能力を高めることを図った。さらに非常勤職員とともに作業にあたるという職場環境を提供し、実践型社会連携教育の効果も図った。



図42 クラウドファンディング

表8 2019年度非常勤講師の委嘱依頼

職名	氏名	担当科目	委託期間
教授	山本 悦世	人文系博物館実習 a	平成31年4月1日～令和元年8月31日
助教	岩崎 志保	人文系博物館実習 a	平成31年4月1日～令和元年8月31日
助教	野崎 貴博	人文系博物館実習 a	平成31年4月1日～令和元年8月31日
助教	南 健太郎	人文系博物館実習 a	平成31年4月1日～令和元年8月31日
助教	山口 雄治	人文系博物館実習 a	平成31年4月1日～令和元年8月31日

(2) 大学における授業の受け入れ

博物館資料保存論 a (学生62名) 2019年11月7日

(3) 学内ワークスタディ

2019年度は2名の学生(工学部、農学部)を雇用し、構内遺跡出土の遺物整理作業、および発掘調査報告書作成作業をおこなった。

c. 社会貢献

(1) 中学生職場体験

- ・岡山市岡北中学校 2019年11月13日～15日 3名
- ・岡山市高松中学校 2019年11月13日・14日 3名

(2) 職員の兼業

山本悦世

- ・岡山県環境影響評価技術審査委員会委員
- ・岡山県文化財保護審議会委員
- ・史跡こうもり塚古墳保存活用計画策定準備委員会委員
- ・徳島県文化財保護審議会委員
- ・徳島県文化財保存活用大綱策定委員会委員
- ・鳥根県古代文化センター企画運営委員
- ・鳥根県文化財保存活用大綱策定委員会委員

岩崎志保

- ・岡山県埋蔵文化財保護調査指導委員

野崎貴博

- ・岡山県埋蔵文化財保護調査指導委員

南健太郎

- ・岡山県埋蔵文化財保護調査指導委員
- ・岡山シティミュージアム調査指導

山口雄治

- ・ノートルダム清心女子大学文学部現代社会学科 非常勤講師
- ・国立歴史民俗博物館 共同研究員
- ・岡山県古代吉備文化財センター 講師

(3) 展示見学の受け入れ

・常設展示室見学：2名（一般2名）

(4) 地域の催しへの参加

・鹿田学区活性化推進委員会主催「第5回鹿田夏祭り」 2019年7月13日 (南)

第3節 調査研究員の個別研究活動

1. 外部資金獲得状況

山本悦世：基盤研究（C）「中部瀬戸内地域における縄文時代の環境変動と人間活動に関する考古学的研究」研究代表者

岩崎志保：基盤研究（C）「中部瀬戸内地域における縄文時代の環境変動と人間活動に関する考古学的研究」（研究代表者：岡山大学 山本悦世）研究分担者

南健太郎：基盤研究（B）「三角縁神獣鏡の製作地解明に向けたミュオンビームによる非破壊成分分析とその検証」研究代表者

挑戦的研究（開発）「宇宙線を用いた完全非破壊オンサイト成分分析法の開拓：古代青銅器文化の解明に向けて」（研究代表者：大阪大学 佐藤朗）研究分担者

山口雄治：基盤研究（C）「西日本における縄文時代の人口動態に関する研究」研究代表者

基盤研究（C）「中部瀬戸内地域における縄文時代の環境変動と人間活動に関する考古学的研究」（研究代表者：岡山大学 山本悦世）研究分担者

公益財団法人高梨学術奨励基金平成30年度若手研究助成「中央アナトリアにおける銅石器～前期青銅器時代の年代学的研究（2）」研究代表者

2. 論文・資料報告ほか

山本悦世：山本悦世2019「岡山平野における沖積平野形成過程と遺跡動態」『一般社団法人日本考古学協会2019年度岡山大会研究発表資料集』日本考古学協会2019年度岡山大会実行委員会、pp.61-74.

山本悦世2020「岡山県南部地域における縄文時代の遺跡動態と環境変化」『環太平洋文明研究』4号 雄山閣、pp.32-45.

那須浩郎・山本悦世・岩崎志保・山口雄治・富岡直人・米田穰2020「津島岡大遺跡から出土した植物種子の再検討」『紀要』2018 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、pp.12-26.

岩崎志保：岩崎志保・沖陽子2020「鹿田遺跡第17次調査出土種子と土器圧痕の種子同定」『鹿田遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第36冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、pp.115-121.

那須浩郎・山本悦世・岩崎志保・山口雄治・富岡直人・米田穰2020「津島岡大遺跡から出土した植物種子の再検討」『紀要』2018 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、pp.12-26.

野崎貴博：野崎貴博2019「岡山・鹿田遺跡」『木簡研究』第41号 木簡学会、pp.111-112.

野崎貴博・藤野次史・吉田広2019「2018年西日本豪雨による中四国地方の文化財被害」『日本考古学協会第85回総会 研究発表要旨』日本考古学協会、pp.174-175.

- 南健太郎：南健太郎2019「特殊器台成立期の製作技術－岡山市雲山鳥打1号墓採集資料の検討から－」『古代吉備』第30集 古代吉備研究会、pp.1-12.
- Kentaro MINAMI, Akira SATO, Kazuhiko NINOMIYA, M. Kenya KUBO, Dai TOMONO and Yoshitaka KAWASHIMA (2019) “Non-destructing non-contact elemental analysis of Han mirror using muon X-rays” アジア鑄造技術史学会研究発表資料集13、pp.41-42.
- 南健太郎2019「鑄造技術からみた後漢・三国時代の銅鏡」『銅鏡から読み解く2～4世紀の東アジア』アジア遊学237 勉誠出版、pp.61-71.
- 南健太郎2019「隋末・初唐期におけるソグド人墓の鏡－寧夏回族自治区固原の史氏を中心に－」『先史学・考古学論究』Ⅷ 龍田考古会、pp.221-230.
- Kentaro MINAMI, Akira SATO, Kazuhiko NINOMIYA, M. Kenya KUBO, Dai TOMONO and Yoshitaka KAWASHIMA (2020) “Non-destructive elemental analysis of archaeological metal materials using muonic X-rays” CAMP-ISIJ, 33, p73.
- 南健太郎2020「弥生・古墳時代におけるモモの利用について－岡山県地域南部を中心に－」『紀要』2018 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、pp.27-34.
- 山口雄治：山口雄治2019「岡山平野における土器組成と農耕の展開」『農耕文化複合形成の考古学』雄山閣、pp.71-80.
- 山口雄治2019「中央アナトリアにおける銅石器～前期青銅器時代の年代学的研究2」『高梨学術奨励基金年報－平成30年度研究成果報告－』公益財団法人高梨学術奨励基金、pp.60-67.
- 山口雄治2020「ボーリングコアを用いた古地形の発達過程とその評価」『日々の考古学3』六一書房、pp.201-210.
- 那須浩郎・山本悦世・岩崎志保・山口雄治・富岡直人・米田穰2020「津島岡大遺跡から出土した植物種子の再検討」『紀要2018』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、pp.12-26.
- 久米正吾、新井才二、覚張隆史、辰巳祐樹、早川裕弌、藤澤明、宮田佳樹、山口雄治、イングリダ・チチウルカイト、ゲーストゥティス・ペセカス、ゲドレ・モツザイト・マツゼビチウテ、ヒクマトウツラ・ホシモフ、アイダ・アブディカノワ、ボキジョン・マトババエフ2020「中央アジア初期農耕牧畜民の交流から東西交流の始まりを考える－キルギス、モル・ブラク1遺跡（第3次）、ウズベキスタン、ダルヴェルジン遺跡（第2次）の発掘調査（2019年）」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』西アジア考古学会、pp.56-61.
- 紺谷亮一、山口雄治、下釜和也、フィクリ・クラックオウル2020「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて－キュルテペ遺跡北トレンチ発掘調査2019年－」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』西アジア考古学会、pp.49-51.

3. 研究発表・講演ほか

- 山本悦世：山本悦世・山口雄治・鈴木茂之・岩崎志保「岡山県南部における縄文時代の海域変遷と遺跡動態」2019年4月20・21日 岡山大学（考古学研究会第65回総会・研究集会）
- 山本悦世「瀬戸内海の海水準変動と人口変動」2019年8月2日 立命館大学（立命館大学環太平洋文明研究センターシンポジウム 超長期的視点から見た人口・環境・社会）
- 鈴木茂之・山本悦世・山口雄治・岩崎志保・野口真利江・辻康男「岡山大学構内ボーリング調査から得られた完新世会水準変動」2019年9月23-25日 山口大学（日本地質学会）

- 山本悦世「岡山平野における沖積平野形成過程と遺跡動態」2019年10月26・27日 岡山大学（一般社団法人日本考古学協会2019年度岡山大会）
- 岩崎志保：山本悦世・山口雄治・鈴木茂之・岩崎志保「岡山県南部における縄文時代の海域変遷と遺跡動態」2019年4月20・21日 岡山大学（第65回考古学研究会総会・研究集会）
- 岩崎志保「漢代壁画墓の系譜と展開」2019年9月21日 島根県立荒神谷博物館（島根県立荒神谷博物館講演会）
- 鈴木茂之・山本悦世・山口雄治・岩崎志保・野口真利江・辻康男「岡山大学構内ボーリング調査から得られた完新世水準変動」2019年9月23-25日 山口大学（日本地質学会）
- 岩崎志保「鹿田遺跡出土の漆椀」2020年1月25日 岡山大学（第11回岡山大学埋蔵文化財調査研究センター公開講座）
- 野崎貴博：野崎貴博・藤野次史・吉田広「2018年西日本豪雨による中四国地方の文化財被害」2019年5月19日 駒澤大学（日本考古学協会第85回総会セッション8「災害と文化財－その現状と課題－」）
- 野崎貴博・藤野次史・吉田広「2018年西日本豪雨による中四国地方の文化財被害」2019年5月19日 駒澤大学（日本考古学協会第85回総会ポスターセッション）
- 南健太郎：Kentaro MINAMI, Akira SATO, Kazuhiko NINOMIYA, M. Kenya KUBO, Dai TOMONO and Yoshitaka KAWASHIMA「Non-destroying non-contact elemental analysis of Han mirror using muon X-rays」2019年8月24-26日 中国西北工業大学（アジア鑄造技術史学会第13回西安大会）
- 南健太郎「銅鏡のミュオン非破壊成分分析と鉛同位体比分析についての展望」2019年12月25・26日 大阪大学中之島センター（第2回文理融合シンポジウム 量子ビームで歴史を探る－加速器が紡ぐ文理融合の地平－）
- 南健太郎「遺跡出土桃核の形態分析と地域間比較」2020年2月7日 岡山大学（野生桃研究会第1回講演会）
- Kentaro MINAMI, Akira SATO, Kazuhiko NINOMIYA, M. Kenya KUBO, Dai TOMONO and Yoshitaka KAWASHIMA「Non-destructive elemental analysis of archaeological metal materials using muonic X-rays」2020年3月17-19日 東京工業大学（日本鉄鋼協会第179回春季講演大会国際セッション「Current developments in nondestructive analysis using synchrotron radiation, neutron, and muon-towards application of cultural heritage research-」）
- 山口雄治：山本悦世・山口雄治・鈴木茂之・岩崎志保「岡山県南部における縄文時代の海域変遷と遺跡動態」2019年4月20・21日 岡山大学（第65回考古学研究会総会・研究集会）
- 山口雄治「日本考古学における縄文時代人口・文化動態シミュレーション研究の現状と課題」2019年5月25日 同志社大学（第2回SIMAS研究会）
- 山口雄治「考古学のためのSfM-MVSを利用した三次元計測」および実技指導 2019年5月31日 岡山県古代吉備文化財センター（岡山県古代吉備文化財センター職員研修）
- 山口雄治「西日本における縄文・弥生時代遺跡の時空間動態」2019年6月29日 同志社大学（第3回SIMAS研究会）
- 松多信尚・山口雄治・森脇敏・川上賢太「災害遺構の保存について－倉敷市真備町を例に－」2019年6月30日 岡山大学（2019年度地域地理学会）
- Shimogama, K., Kontani, R., Uesugi, A., Yamaguchi, Y., Kulakoğlu, F. Deep Sounding in Search of the Earliest Levels at Kültepe: New Results and the Early Bronze Age Ceramic Sequence in the North of Kültepe. 2019年8月1-4日 Kayseri, Turkey (Kültepe International Meeting 4

(KIM4).).

- 中尾央・中川朋美・田村光平・山口雄治「弥生時代中期北部九州における戦争」2019年8月7日 北海道大学（進化学会第21回大会）
- Tamura, K., Nakao, H., Yamaguchi, Y. and Matsumoto N. Elliptic Fourier Analysis of the Ongagawa Pottery in Prehistoric Japan. 2019年9月13-15日 Tohoku University (The 4th Conference on the Archaeological and Anthropological Application of Morphometrics.).
- 鈴木茂之・山本悦世・山口雄治・岩崎志保・野口真利江・辻康男「岡山大学構内ボーリング調査から得られた完新世水準変動」2019年9月23-25日 山口大学（日本地質学会）
- 山口雄治・紺谷亮一・上杉彰紀・下釜和也・千本真生・Fikri Kulakoğlu「中央アナトリアにおける前期青銅器時代土器の変遷とその年代－キュルテベ遺跡出土資料を中心に－」2019年10月12-13日 明治大学（日本オリエント学会第61回大会）
- 坂平文博・大澤僚也・岸本幹史・大久保孝晃・山口雄治・津村宏臣「進化シミュレーションで解く縄文・弥生時代の文化変容」2019年10月13日佐賀大学（第73回日本人類学会大会）
- 富岡直人・山口雄治「趣旨説明：環境変化と生業からみた社会変動」2019年10月26・27日 岡山大学（日本考古学協会2019年度岡山大大会）
- Yamaguchi, Y. QGIS: Basic Use for Archaeology. 2020年11月25-30日 Batken State University, Kyrgyzstan (The 2nd Workshop for International Contribution to Cultural Heritage Protection Project in Central Asian Countries funded by the Agency for Cultural Affairs, Japan.).
- 光本順・清家章・山口雄治「岡山市造山古墳群の三次元計測に関する学史と展望」2020年1月11-12日 南山大学（出ユーラシアの統合的人類史学第2回全体会議）
- 山口雄治「ウズベキスタンフェルガナ盆地遺跡データベース分析結果（予備）」2020年1月10-11日 帝京大学文化財研究所（中央ユーラシア高地民・低地民の相互交流と騎馬遊牧社会の成立基盤に関する考古学研究第6回全体会議）
- 久米正吾、新井才二、覚張隆史、辰巳祐樹、早川裕式、藤澤明、宮田佳樹、山口雄治、イングリダ・チチウルカイト、ゲーストゥティス・ペセカス、ゲドレ・モツザイト・マツゼビチウテ、ヒクマトゥッラ・ホシモフ、アイダ・アブディカノワ、ボキジョン・マトババエフ「中央アジア初期農耕牧畜民の交流から東西交流の始まりを考える－キルギス、モル・ブラク1遺跡（第3次）、ウズベキスタン、ダルヴェルジン遺跡（第2次）の発掘調査（2019年）」池袋サンシャインシティ文化会館（第27回西アジア発掘調査報告会）2020年3月28・29日
- 紺谷亮一、山口雄治、下釜和也、フィクリ・クラックオウル2020「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて－キュルテベ遺跡北トレンチ発掘調査2019年－」池袋サンシャインシティ文化会館（第27回西アジア発掘調査報告会）2020年3月28・29日

第3章 2019年度における調査・研究のまとめ

調査

2019年度は鹿田キャンパスで1件、津島キャンパスで1件の発掘調査を実施した。

鹿田遺跡第28次調査では、各時代における遺跡北端の状況が明らかとなった。弥生時代から古墳時代の生活域として利用された高まりである微高地と河道の境、古代における微高地の拡張と祭祀行為がおこなわれた河道の流路、中世鹿田庄の屋敷地北限、中世から近代にわたる土地利用形態の継承といった、自然環境と集落景観の変遷過程を復元するための重要な成果が得られた。鹿田遺跡初見の形態をみせる井戸や、そこで利用された多様な利用状況の曲物が得られた点も注目される。

津島岡大遺跡第37次調査では、弥生時代早期～前期以降の遺構・遺物が検出された。弥生時代早期～前期では河道と貯蔵穴の可能性のある土坑が確認された。周辺の調査でも縄文時代後期・弥生時代早期の貯蔵穴群が確認されており、河道とその際に展開した貯蔵空間が広がっていたものと思われる。弥生時代後期以降は重複した溝群が確認され、時期によって位置と方向が変化することが明らかとなった。今回の調査で居住域と耕作・生産域の中間地点の様相が確認されたことは、津島岡大遺跡の集落構成の復元に向けた重要な成果であると言える。

研究

調査資料の整理作業は鹿田遺跡の6地点の調査について実施し、そのうち第17次調査の成果を『鹿田遺跡14』として刊行した。第17次調査地点は鹿田キャンパスの西端中央に位置し、古墳時代初頭以降の遺構・遺物が確認された。特に古墳時代初頭および中世前半の調査成果は、鹿田遺跡の空間利用を考える上で重要なものとなった。古墳時代初頭の遺構群は古・新の二段階に分けられ、特に新段階においては集落縁辺部における手工業生産の場であったことが明らかとなった。また中世前半では12世紀後半に1/3町の二区画を東西にあわせた東西2/3町・南北1/3町の屋敷地が形成され、13世紀～14世紀前葉にはこの屋敷地の拡大と閉鎖的空間化、さらに北には東へ1/2町ずらした位置に別の屋敷地が設けられることが明らかとなった。

研究費は、科学研究費補助金が研究代表者3件、研究分担者3件で、代表者・分担者ともに新規1件、継続2件であった。また民間の研究助成が1件であった。さらに本書には構内遺跡の研究として発掘調査現場で採取された試料のプラント・オパール分析や、銅鏡とその成分分析についての論考を所収した。異分野との共同研究の成果が科学研究費の獲得や論文といった形で結実しており、今後のさらなる発展が期待される。

情報発信

本年度の活動は、2020年2月中旬以降、新型コロナウイルス感染拡大の影響を大きく受けた。2月15日の津島岡大遺跡第37次調査の現地説明会は開催できたものの、第20回キャンパス発掘成果展、第12回公開講座は開催を断念せざるを得なかった。これらについてはひとまず2020年度以降に延期としたが、今後の感染拡大の推移を見据えて開催の可能性を探りたい。一方で、鹿田遺跡マスコットキャラクターを中心に据えたクラウドファンディングへの挑戦は、大学の魅力を社会へ発信する先駆的な取り組みといえる。残念ながら今回は目標に達することができなかったが、多くの方々のご支援をいただいた。感謝の意を表するとともに、今後も様々な形で地域への貢献、情報発信をすすめていきたい。

まとめ

本年度は発掘調査や報告書作成をはじめ多くの調査研究成果が得られた一方、新型コロナウイルスの影響で情報発信が制限された。今後の状況は依然不透明であるが、オンラインを含めた活動を検討し、積極的に社会発信をおこなっていきたい。

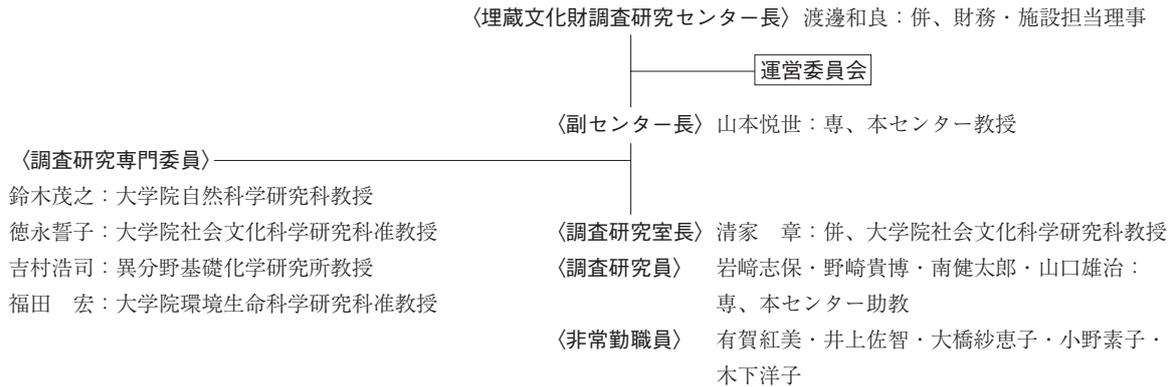
(南)

資 料

1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程・組織等

a. 2019年度岡山大学埋蔵文化財調査研究組織

(1) センター組織



(2) 運営委員会

【委員】

渡邊和良 財務・施設担当理事（センター長）	大橋俊孝 大学院医歯薬学総合研究科教授
山本悦世 本センター教授（副センター長）	清家 章 大学院社会文化科学研究科教授（調査研究室長）
今津勝紀 大学院社会文化科学研究科教授	鈴木茂之 大学院自然科学研究科教授（調査研究専門員）
松本直子 大学院社会文化科学研究科教授	岩永 仁 施設企画部長
加藤鎌司 大学院環境生命科学研究科教授	

【2019年度協議・報告事項】

第95回 2019年7月30日

報告事項

- ・平成30年度決算について

協議事項

- ・令和元年度埋蔵文化財調査研究センター事業計画（案）について
- ・令和元年度予算（案）について

その他

- ・鹿田遺跡発掘調査状況について

第96回 2020年2月14日

報告事項

- ・令和元年度埋蔵文化財調査研究センター業務報告について

協議事項

- ・令和2年度埋蔵文化財調査研究センター事業計画（案）について
- ・令和2年度埋蔵文化財調査研究センター予算（案）について
- ・教員の人事について

その他

- ・津島岡大遺跡第37次発掘調査現地説明会の実施について

b. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの規程

(1) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

〔平成16年4月1日〕
〔岡大規程第93号〕

改正 平成20年3月31日規程第28号
平成23年3月31日規程第26号
平成23年9月27日規程第84号
平成26年1月28日規程第1号

(趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人岡山大学管理学則（平成16年岡大規則第1号）第26条の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2条 センターは、岡山大学（以下「本学」という。）の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に関すること。
- 二 発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。
- 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に関すること。
- 四 その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項

(自己評価等)

第3条 センターは、センターに係る自己点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行い、その結果を公表する。
2 前項の自己評価については、本学の職員以外の者による検証を受けることを原則とする。

(教育研究等の状況の公表)

第4条 センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

(センター長)

第5条 センターにセンター長を置く。
2 センター長は、財務・施設担当理事をもって充てる。
3 センター長は、センターを代表し、その業務を総括する。

(副センター長)

第6条 センターに副センター長を置く。
2 副センター長は専門的知識を有する本学の教授のうちから学長が任命する。
3 副センター長は、センター長の職務を助ける。
4 副センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(調査研究室)

第7条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

- 2 調査研究室は、室長、センター専任の教員及びその他必要な職員で構成する。
- 3 室長は、専門的知識を有する本学の教員のうちからセンター長の推薦に基づき、学長が任命する。
- 4 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 5 調査研究室の構成員は、センター長の命を受け、センターの業務に従事する。

(調査研究専門委員)

第8条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

- 2 専門委員は、本学の教員のうちからセンター長が委嘱する。
- 3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(運営委員会)

第9条 センターに、センターの運営に関する重要な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

- 2 運営委員会に関し、必要な事項は、別に定める。

(事務)

第10条 センターの事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

(雑則)

第11条 この規程に定めるもののほか、センターに関し、必要な事項は、別に定める。

附 則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成23年11月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成26年1月28日から施行する。

(2) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程

(平成26年1月28日)
(岡大規程第2号)

改正 平成27年3月31日規程第65号

(趣旨)

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程(平成16年岡大規程第93号)第9条第2項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター(以下「センター」という。)の運営に関する次の事項を審議する。

- 一 センターの業務に関する重要事項
- 二 教員の教育研究業績の審査に関する事項
- 三 その他センターの運営に関する重要事項

(組織)

第3条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- 一 センター長
 - 二 副センター長
 - 三 本学の教授のうちからセンター長が必要と認めたる若干人
 - 四 センターの調査研究室長
 - 五 センターの調査研究専門委員のうちからセンター長が必要と認めたる 1人
 - 六 施設企画部長
- 2 前項第3号及び第5号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の在任期間とする。
- 3 教員の選考に関する事項を審議する場合には、第1項第

4号及び第5号のうち教授でない者並びに第6号の委員は、審議に加わらないものとする。

(委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときには、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員会の成立等)

第5条 運営委員会は、委員の半数以上の出席がなければ、議事を開き、議決することができない。

2 運営委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第6条 委員長が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

(事務)

第7条 運営委員会の事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

附 則

1 この規程は、平成26年1月28日から施行する。

2 この規程の施行後に最初に任命される第3条第1項第3号及び第5号の委員は、この規程の施行に伴い廃止される岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会内規(平成16年4月1日学長裁定)第3条第1項第3号及び第4号の委員をそれぞれ充てることとし、その任期は、第3条第2項の規定にかかわらず、平成26年3月31日までとする。

附 則

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

c. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

平成12年5月15日

埋蔵文化財調査研究センター長
施設部長

I. 請負業者が留意すべき事項

1. 請負業者は現場代理人を発掘作業の現場に常駐させ、作業員の安全と健康の管理につとめること。
2. 発掘作業の現場に「地山掘削」と「土止め支保工」の技能講習修了者をおき、作業員の安全や健康にも注

意すること。

3. 工事用電力の保安責任者をおくこと。
4. 非常停止装置を備えたベルトコンベアーを用いること。
5. 重機の運転は、免許所有者がおこなうよう厳守させること。

II. 発掘現場で注意すべき事項

1. 服装・装備・用具等
 - 1) 安全で機能的な服装にする。
 - 2) 平坦面から2m以上の穴等を掘削する場合は、ヘルメットを着用する。
 - 3) ベルトコンベアーの移動時および周辺での作業の際には、ヘルメットを着用する。
 - 4) グラインダーを使用する際は、手袋・防護眼鏡を着用する。
 - 5) スコップ・草削りなどの用具は、危険がないよう使用方法や置き方や保管方法に十分注意する。
2. 掘削
 - 1) のり面の角度

造成土：通常の土壌の場合は50～60度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。砂地の造成土の場合は35度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。

堆積土：基本75度とし、状況や土質に応じて安全な角度をとる。

発掘区の壁際を深さ1.5m以上掘削する場合は、原則として途中で段を設ける。その場合の段の中は、60cm以上とする。
 - 2) のり面の保護

のり面はシート等で覆うなどし、崩落防止のために必要な保護措置をとる。
 - 3) 深い遺構（深さ1.5m以上の遺構）

遺構掘削者以外の者が上面で安全確認を行い、十分な注意を払う。場合によっては周囲を広くカットして対応する。なお、作業現場内への昇降のために、階段を設置する。
3. 高所（高さ2m以上の場所）での作業
 - 1) 作業中には安全帯を使用する。

- 2) 架台を組んだ場合は最上段に手すりを設け、安全を確保する。
- 3) 2段以上の架台は、分解して移動させる。
4. 発掘用機械類の操作

（ベルトコンベアー・ポンプ等）

 - 1) 調査用電源の設置と取扱いについては、工事用電力の保安責任者が安全確認を行う。
 - 2) ベルトコンベアー・水中ポンプ等の知識を持つ者が整備・稼働させる。
 - 3) ベルトコンベアーを重ねたつなぎ目の部分には、なるべく土が落ちないように措置をする。
 - 4) 原則としてベルトコンベアーの直下での作業・通行を避ける。
 - 5) ベルトコンベアーの移動時は作業員の中で指揮者を決め、周辺の安全性を確保したうえで移動させる。

（重機関係）

 - 1) 重機の免許所有者以外は運転しない。
 - 2) 運転者は、周囲の安全に注意する。
 - 3) 稼働中は、重機の旋回半径内に立ち入らない。
5. 健康管理
 - 1) 作業中に体調が悪くなった場合は直ちに申し出る。

III. その他

- 1) 作業現場内の状況の変化に絶えず注意し、異常を発見したら、直ちに作業を中止して現場代理人に報告し、施設部の監督職員の指示を受ける。
- 2) 調査区の状況や遺構などの特殊性・重要性等により、上記の2の1)～3)どおりに発掘作業を実施することが困難な場合は、現場代理人が監督職員と協議のうえ、安全に留意し作業を行う。

d. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター教員審査に関する申し合わせ

平成20年10月29日
埋蔵文化財調査研究センター
運営委員会承認
改正 平成27年3月30日

蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に教員審査委員会（以下「審査委員会」という。）を設置する。

（趣旨）

第1条 この申し合わせは、岡山大学教授会規則（平成16年岡大規則第20号）第10条の規定に基づき、埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）における教員の審査に関し、必要な事項を定める。

（教員審査委員会）

第2条 センター長は、教員審査の必要が生じたときは、埋

2 審査委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 センター長
- 二 副センター長
- 三 運営委員会委員からセンター長が必要と認めたる者若干名
- 3 審査委員会に委員長を置き、審査委員会で選出される。
- 4 審査委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立

し、議事は、出席者の2分の1以上をもって決するものとし、可否同数の時は、委員長が決する。

5 審査委員会は、審査の方針について定め、候補者の資格及び適性について審査し、その結果を運営委員会に報告する。

(公募)

第3条 採用人事は、原則として公募により行うものとする。ただし、センターの教員（専任教員を含む。）で審査基準を満たす者があると認められる場合は、公募を行わないことがある。

(審査基準)

第4条 教授、准教授、講師及び助教となることのできる者は、規則に定める資格を有する者とする。

2 教授、准教授、講師及び助教の審査にあたっては、履歴書、業務目録（発掘調査の実績を含む）、論文（著書を含む）、主要研究業績についての適切な説明書の提出を求めるものとし、必要に応じてその他審査に必要な書類の提出を求めるものとする。

(雑則)

第5条 この申し合わせに定めるもののほか、教員の審査に関し、必要な事項は、センター長が別に定める。

附 則

この申し合わせは、平成20年10月30日から施行する。

附 則

この申し合わせは、平成27年4月1日から施行する。

2. 2018年度以前の調査・研究一覧

付表1 1982年度以前の構内主要調査(1980～1982年度)

年度	地区名	種類	工事名称：調査名称	調査組織	調査面積 (㎡)	文献	備考
1980	鹿田	立会	歯学部附属病院棟新営	岡山市教育委員会	8		
1981	津島	BD26	農学部寄宿舎新営	〃			
	〃	〃	文法経 合併処理槽施設	〃			
	〃	〃	文法経 合併処理槽施設	〃			
	〃	BD09、 BC09～11	基幹整備(共同溝取付)	〃			
	〃	BD～BE04～07	陸上競技場改修(配水管施設)	〃			
	鹿田	〃	(医病)高気圧治療室新営	〃			
	〃	〃	(医病)動物実験棟新営	〃 岡山県教育委員会			大学が市教委への確認調査依頼をせずに掘削。その後、岡山市・岡山県教委が残存壁面の調査を実施
	〃	〃	(医病)理解剖体臓器処理保管庫新営	岡山市教育委員会			
1982	津島	AV06・10、 AW05・14、 AX08、BD07、 BE10	試掘 排水基幹整備	〃			津島AW14区で弥生時代包含層確認、協議→津島岡大遺跡第1次調査へ
	〃	AW14	発掘 文法経 排水集中槽(NP-1)埋設 ：津島岡大第1次調査	岡山大学	24.0	3	[小橋法目黒遺跡]と報告
	〃	〃	試掘 武道館新営	岡山市教育委員会	2.3		
	〃	AY15・16	〃 法経 校舎新営	〃	7.0		
	鹿田	〃	〃 医学部標本保存庫新営	岡山県教育委員会	8.0		
	〃	〃	〃 (医病)外来診療棟新営	〃 岡山市教育委員会	4.0	2	
	〃	〃	立会 医学部動物実験施設関連排水管・ガス管理設	岡山県教育委員会		1	
〃	AE～AN22、 AE22～26	〃 歯学部電話ケーブル埋設	〃 岡山市教育委員会 岡山大学埋蔵文化財調査室				

文献

1. 光永真一 1983「岡山大学医学部附属病院動物実験施設新営工事に伴う排水管付設工事に伴う立会調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 岡山県教育委員会
2. 河本 清 1983「岡山大学医学部附属病院外来診療棟改築に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 岡山県教育委員会
3. 吉留秀敏 1985「岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡(AW14区)の発掘調査」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第1集 岡山大学埋蔵文化財調査室

付表2 2017年度以前の構内主要調査(1983～2017年度)

* 凡例	・総合番号：調査地区別通し番号(立会調査は選択的に保存)
	・津島岡大遺跡第1次調査は、本機関設置以前の調査であるため、総合番号を「※1」として区別する。
	・試掘確認調査のうち、事後に実施の発掘調査範囲内に入った場合、本表に対応する調査地点図(後出)から番号表記を省く。全てが発掘調査範囲内に含まれるものについて、本表-(2)では、総合番号に()を付して表記する。
	・立会調査で、本表-(3)に保存する基準：①中世土層以下を確認した調査 ②明確な遺構・遺物を確認した調査
	・番号：年度別報告番号
	・文献：後出の刊行物一覧表の番号に対応する。正式報告が刊行された場合は、年報・紀要掲載の概報文献は削除する。

付表2-(1) 発掘調査

<津島地区：津島岡大遺跡>

総合 番号	年度	番号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積(㎡)	概要(主要遺構ほか)	文献
※1	1982	-	津島岡大遺跡第1次調査 ：排水集中槽(NP-1)埋設	AW14	10.28～11.24	24	弥生中期・古代：溝、「小橋法目黒遺跡」と報告	3
1	1983	-	津島岡大遺跡第2次調査 ：排水管理設	BE14・18、BF17・18 BG14 BH14・15	84.1.9～3.5	265	弥生早・前期：遺物	4
2	1983	-	津島岡大遺跡第2次調査 ：合併処理槽埋設	BH13	11.14～11.22 4.1.9～3.5	276	弥生前期水田関連遺構(溝他)	4
15	1986 1987	2 1	津島岡大遺跡第3次調査 ：男子学生寮新営	AV00、AW00-01	12.1～87.6.18 8.24～9.5	1550	縄文後期河道、弥生早期：貯蔵穴群・河道、弥生前期～近代：水田・溝、古代糸里関連溝	19
16	1986	3	津島岡大遺跡第4次調査 ：屋内運動場新営	BF・BG09	87.1.19～1.22	70	弥生前期溝、中世河道	6
26	1988	1	津島岡大遺跡第5次調査 ：大学院自然科学研究科棟新営	AY06～08 AZ06-07	6.27～89.3.19	1537	縄文後期・弥生早期：貯蔵穴群・河道、弥生時代末～近世：水田関連遺構	27
27	1988 1989	2 1	津島岡大遺跡第6次調査 ：生物応用工学科棟新営	AV・AW04・05	9.20～89.5.31	600	縄文後期：貯蔵穴群・河道、古代糸里関連溝、弥生前期～近世：水田・溝	35
28	1988	3	津島岡大遺跡第7次調査 ：情報工学科棟新営	AV・AW05・06	10.12～89.3.31	800	縄文後期：炉・ピット、弥生前期～近世：水田・溝	35

総合番号	年度	番号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積 (㎡)	概要 (主要遺構ほか)	文献
39	1990	1	津島岡大遺跡第5次調査 ：自然科学研究科棟共同溝・検水機設置	AY・AZ08	4.3～4.21	90	古墳後期溝	27
44	1991	2	津島岡大遺跡第8次調査 (A地点) ：遺伝子実験施設新営	BD18・19	7.23～12.25	650	縄文時代土坑、弥生時代～近世：溝群	32
45	1991	3	津島岡大遺跡第8次調査 (B地点) ：合併処理槽新営	BH13	7.23～12.2	140	弥生時代溝、古代～近世：水田	32
50	1992	1	津島岡大遺跡第9次調査 ：生体機能応用工学科棟新営	AU～AW04	7.1～93.1.29	650	縄文後期：貯蔵穴群・土坑・溝・火処、弥生時代～近世：水田関連遺構	47
51	1992	2	津島岡大遺跡第10次調査	BB～BC10～11	93.2.1～3.31	400	弥生後期土坑群、古墳時代：井戸・住居・炉、古代柱穴群、中世溝、近世耕作関連遺構	64
	1993	1	：保健管理センター新営		4.17～7.31			
54	1993	2	津島岡大遺跡第11次調査 ：総合情報処理センター新営	AV～AW11～12	9.14～94.1.11	640	縄文後期：ピット・炉、弥生前期水田畦畔	36
55	1993	3	津島岡大遺跡第12次調査	AV～AW13～14	94.2.9～3.31	1472	弥生前期水田、弥生中期～古墳時代：溝群、古代～近世：条里関連溝	64
	1994	1	：図書館新営		4.1～11.30			
64	1994	2	津島岡大遺跡第13次調査	AW～AX11～12	10.6～11.30	816	縄文後期ピット、弥生水田、弥生～古墳時代：溝群	41
	1995	1	：福利厚生施設 (北棟) 新営		95.7.10～10.4			
69	1995	2	津島岡大遺跡第14次調査 ：福利厚生施設 (南棟) 新営	BB～BC12・13	10.25～96.2.14	856	弥生前期水田、弥生～古墳時代：溝群	46
70	1995	3	津島岡大遺跡第15次調査	AW00-01	96.1.16～4.25	1600	縄文後期・弥生早期：貯蔵穴群・河道、縄文後期：ピット群・石材アボ・火処、弥生前期水田、古墳～中世：水田・溝	72
	1996	1	：サテライトベンチャービジネスラボ ラトリー新営					
74	1996	2	津島岡大遺跡第16次調査 ：動物実験棟新営	BD19～20	5.7～15	30.3	A地点：縄文時代・古墳時代：土坑 B地点：中世溝、古代柱穴列、弥生時代水田	44
75	1996	3	津島岡大遺跡第17次調査 ：環境理工学部校舎 (Ⅰ期) 新営	AW02～04	5.21～97.1.9	1451	縄文後期：住居・土坑・溝、弥生前期：水田、弥生時代溝群、古墳後期柱穴列、古代水田、中近世耕作痕	77
85	1998	2	津島岡大遺跡第18次調査 ：福利施設 (南) ポンプ槽取設	BB11	4.7～4.10	16	古代溝状遺構	53
86	1998	3	津島岡大遺跡第19次調査 ：コラボレーション・センター新営	AZ09-10	7.27～99.2.18	1019	縄文後期：ピット・炉、弥生前期：水田・土坑・河道、古墳時代・中世：溝、近世：道路状遺構・溝	65
87	1998	5	津島岡大遺跡第20次調査 ：環境理工学部校舎ポンプ槽取設	AY07	10.19～28	16	黒色土上面に溝、中世溝	53
88	1998	6	津島岡大遺跡第21次調査 ：工学部エレベーター設置	AX09	11.6～24	30.2	縄文中期土坑、弥生早期～前期：溝、古代：土坑・溝	65
89	1998	8	津島岡大遺跡第22次調査	AW02-03	99.3.1～7.12	773.5	縄文後期～弥生前期：河道、弥生早期土坑、弥生前期水田、弥生中期溝、古墳～近世：条里関連溝・水田	77
	1999	2	：環境理工学部校舎 (Ⅱ期) 新営					
104	1999	5	津島岡大遺跡第23次調査	AZ15-BA14	00.2.3～7.28	1339	縄文後期～弥生前期河道、縄文後期杭列、弥生早期：貯蔵穴・溝、弥生前期：堰・溝、弥生中期～近世：溝	80
	2000	1	：総合研究棟新営					
111	2000	3	津島岡大遺跡第24次調査 ：総合研究棟渡り廊下建設	AZ14	12.5～14	34.2	縄文後期：河道・杭列	80
112	2000	4	津島岡大遺跡第25次調査 ：散水施設設置	BA15	01.1.29～31	20	中世～近世：溝	61
113	2000	5	津島岡大遺跡第26次調査 ：事務局棟新営	BC～BD14～15	01.3.26～9.30	1550	縄文中・後期：土坑・炉、弥生早期貯蔵穴、弥生前期土坑、弥生後期溝、古墳後期～中世：柵列・道路状遺構、近世：溝・堰	76
121	2001	2	津島岡大遺跡第27次調査	BB～BC14～15	02.2.1～6.24	1648	縄文後期炉、弥生・古墳時代：溝群、中世畦畔 (条里関連)	68
	2002	1	：創立五十周年記念会館新営					
127	2002	2	津島岡大遺跡第28次調査 ：自然科学系総合研究棟新営	AW～AY06～08	4.30～9.20、 11.28～03.1.15	1798	弥生前期水田、弥生前期～中期：溝、古代：溝 (内に柱穴列)、中世島関連遺構	87
128	2002	4	津島岡大遺跡第29次調査 ：共同溝設置	BF16	9.18～10.3	62.6	弥生～古墳時代：溝・ピット	71
163	2007	1	津島岡大遺跡第30次調査 ：岡山大インキュベータ新営	BC19・20	8.1～12.17	1035.4	縄文後期～弥生早期：土坑群、弥生～古墳時代：溝群、古代道路状遺構、中・近世：土坑群・畦畔・溝群	93
168	2008	1	津島岡大遺跡第31次調査 ：大学生協東福利施設新営	AX04	6.17～8.22	212	弥生前期畦畔、古代道路状遺構	95
184	2009	1	津島岡大遺跡第32次調査 ：教育学部武道場新営	AX02	7.16～10.13	383	縄文後期貯蔵穴群、弥生前期畦畔、弥生前・中期・中近世：溝	100
196	2010	1	津島岡大遺跡第33次発掘調査 ：薬学部講義棟新営	BB17・18、BC17・18	7.16～11.11	972.2	縄文中・後期：ピット、弥生時代：土坑・溝、古墳時代後期～古代：総柱建物、古代・中世：道路状遺構	117
197	2010	2	津島岡大遺跡第34次発掘調査 ：国際交流会館新営	AU・AV13・14	7.30～9.28	1590	弥生前期：畦畔・溝、近世土坑群、平面調査は中世上面まで実施し下層部は保存	105
216	2013	1	津島岡大遺跡第35次発掘調査 ：附属図書館増築	AW13	7.8～8.29	80	縄文時代：ピット、古墳時代後期：溝・ピット、古代：ピット列、近世：畦畔、土坑・溝	116
246	2015	1	津島岡大遺跡第36次発掘調査 ：職員宿舎新営	BH・BI16	5.26～6.17	43.5	縄文後期：土坑、弥生早期～前期：水田畦畔、弥生後期～古墳時代：溝、古代～中世：ピット、旧陸軍：水路・建物	124

< 鹿田地区：鹿田遺跡 >

総合番号	年度	番号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積 (㎡)	概要 (主要遺構ほか)	文献
1	1983 1984	-	鹿田遺跡第1次調査 ：外来診療棟新営	AU～BD28～40	7.27～11.22 84.1.9～8.31	2188	弥生時代中期後半～中世の集落遺構群	7

総合 番号	年度	番 号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積 (㎡)	概要 (主要遺構ほか)	文献
2	1983	-	鹿田遺跡第2次調査 ：NMR-CT室新営	BG~BI18~21	8.1~12.30	176	弥生時代後期~中世の集落遺構群	7
10	1986	1	鹿田遺跡第3次調査 ：医療技術短期大学校舎	CN~CU27・28、 CT~CY19~27、 CX~DD16~25、 DD~DG22・23	6.2~11.29	2390	中世の集落遺構群、古代の橋脚・河道	10
12	1987	3	鹿田遺跡第4次調査 ：医短校舎周辺の配管敷設	DD~DF25 DG~DI27・28	11.2~11.21	30	古代の河道	10
13	1987	2	鹿田遺跡第5次調査 ：管理棟新営	BB~BH35~42	10.6~88.32 88.323~3.31	1192	弥生時代中期後半~中世の集落遺構群	24
16	1990	2	鹿田遺跡第6次調査 ：アイソトープ総合センター新営	BW~CC67~71	11.20~91.630	690	古墳時代初頭土坑、中世集落遺構群	40
25	1997	4	鹿田遺跡第7次調査 ：基礎医学棟新営	BR55~BX61 BY56~57	98.227~8.6	829	古墳時代初頭・中世の集落遺構群、近世の水田・溝	85
27	1998	4	鹿田遺跡第8次調査 ：RI治療室新営	BP~BS30~32	7.28~9.1	165	古墳時代と中世の溝群	85
28	1998	7	鹿田遺跡第9次調査 ：病棟新営	CD33~37、 CE・CF28~37、 CG~CJ20~37、 CK・CL25~37	11.27~99.511	2088	弥生時代水田・溝、中・近世集落遺構群	126
31	1999	3	鹿田遺跡第10次調査 ：共同溝設置関連	CD・CE10~12 DD~DF16~22	5.7~10.14	244.1	古代の杭列、弥生時代ピット、近世溝	108
32	1999	4	鹿田遺跡第11次調査 ：病棟新営	CD~CM19~42	8.19~12.22	2020	弥生時代水田畦畔、古代の池状遺構、中・近世集落遺構群	126
40	2000	2	鹿田遺跡第12次調査 ：エネルギーセンター新営	CO~CV35~44 CN・CM38~41 CN28~38	10.2~01.05.10	1897	弥生時代溝・河道、古墳時代溝・土器溜まり、中世集落遺構群、近世土坑・溝	56 61
46	2002	3	鹿田遺跡第13次調査 ：総合教育研究棟新営	BL~BR46~51	4.30~10.25	934	弥生時代の溝、古墳時代の土器溜まり・溝、中世集落遺構群、近世土坑群	98
55	2003	1	鹿田遺跡第14次調査 ：病棟(Ⅱ期)新営	CD~CM12~20	7.31~12.17	1331	弥生~古墳時代の畦畔・溝、中世の集落遺構群、近世のため池・土坑	113
56	2003	2	鹿田遺跡第15次調査 ：総合教育研究棟外構	BQ~BS45・46	10.16~10.29	30.4	古墳時代初頭の井戸・溝	98
59	2004	1	鹿田遺跡第16次調査 ：立体駐車場新営	AH~AI6・7 AF12・13、 AN~AO4	10.21~11.8	49.15	近世~近代の畦畔・溝・畝・土坑、中世の土坑、弥生~古墳時代の河道	81
60	2006	1	鹿田遺跡第17次調査 ：総合研究棟(医学系)新営	BR~BY60~64	7.10~11.14	642	古墳時代~中世の集落遺構群、近世土坑・溝	137
64	2007	1a	鹿田遺跡第18次調査A地点 ：中央診療棟新営	BT13~BY20	10.10~08.3.14	872.2	弥生時代後期~近世の集落遺構群	92
65	2007	1b	鹿田遺跡第18次調査B地点 ：防火水槽設置	CG~CI9・10	10.16~11.1	43.2	古代後半の井戸、近世入江状遺構・護岸施設	108
66	2007	1c	鹿田遺跡第18次調査C地点 ：用水路改修	CM~CN9・10 CO10・11	12.27~08.1.16	56	弥生時代土坑・溝	108
76	2008	1	鹿田遺跡第19次調査 ：歯学部渡り廊下設置	AW~AY22~23	6.26~9.12	80	弥生時代後期の「方形高まり」、貝塚・壺棺・土坑・溝、古墳時代土坑・溝、古代ピット、近世土坑	95
80	2009	1a	鹿田遺跡第20次調査A地点 ：中央診療棟共同溝設置	BZ~CC31~40	6.18~7.31 8.5~24	632	弥生時代~近世の遺構・遺物	131
81	2009	1b	鹿田遺跡第20次調査B地点 ：中央診療棟新営(本体工事)	BS20~23 BT~BW20~24 BX~CD13~25	10.15~11.2.22 3.1~8	2482	弥生時代~近世の遺構・遺物	102
84	2010	1	鹿田遺跡第20次調査C地点 ：中央診療棟新営	BR・BS12~21 BT~BX12~13	7.20~10.8	276	弥生時代~近世の遺構・遺物	105
85	2010	2	鹿田遺跡第20次調査D地点 ：中央診療棟新営	BT~BU24	2011.2.18~3.2	15	中世~近世の遺構・遺物	105
86	2010	3-1	鹿田遺跡第21次調査A地点 ：外来棟周辺他環境整備	AD~AF30・31		21.2	平安時代河道、鎌倉時代溝状遺構	105
87	2010	3-2	鹿田遺跡第21次調査B地点 ：外来棟周辺他環境整備	AG・AH30・31	11.18~12.9	22	平安時代河道、鎌倉時代溝状遺構	105
88	2010	3-4	鹿田遺跡第21次調査D地点 ：外来棟周辺他環境整備	AS・AT25~28		59.4	弥生時代包含層	105
94	2011	1	鹿田遺跡第22次調査 ：地域医療人育成センター新営	AV~BB 04~07	7.14~9.22 10.14~11.18	533	弥生時代井戸・溝、中世井戸・溝、近世井戸・溝、近代溝・池	107
96	2012	1	鹿田遺跡第23次調査 ：Jホール新営	AN~AR 57~62	6.25~8.30	612	弥生時代~古墳時代初頭畦畔、古代溝、中世溝・炉、近世溝・土坑・畝、近代溝・トロッコ軌道	120
97	2012	2	鹿田遺跡第24次調査 ：医歯薬融合棟新営	BD~BL 57~69	11.27~ 2013.4.25	1867	弥生時代溝、古墳時代土器箱、古代井戸・土坑、中世溝・畦・井戸・土坑、近世溝・土坑、近代畝状遺構	130
101	2013	2	鹿田遺跡第25次調査 I 工区 ：中央診療棟Ⅱ期	BY~CD24~38	2014.1.6~4.17	650	弥生時代畦畔、中世井戸・土坑・溝・柱穴、近世土坑・溝	131
124	2014	1	鹿田遺跡第25次調査 II 工区 ：中央診療棟Ⅱ期	BS~BY24~41	2014.3.15~ 8.25	1895	弥生時代井戸、中世井戸・土坑・墓・溝・柱穴、近世土坑・溝	131
125	2014	2	鹿田遺跡第26次調査 ：動物実験施設改修	CD~CJ46~48、 CJ・CK61・62	2014.8.18~ 11.17	295.5	弥生時代溝・畦畔、古墳時代井戸・土坑・溝・畝状遺構、古代土坑・ピット、近世土坑	135

総合番号	年度	番号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積 (㎡)	概要 (主要遺構ほか)	文献
142	2017	1	鹿田遺跡第27次調査 ：自家発電設備	CN・CO43・44	2017.10.10～ 11.10	34.5	弥生時代～古墳時代溝、古墳時代後期～飛鳥時代溝、中世ピット	134
144	2018	1	鹿田遺跡第28次調査 ：アメニティモール新営	AG～AS31～41	2018.11.19～ 2019.9.18	2940	弥生時代～古墳時代：土坑・溝・河道、古代：土坑・河道、中世：井戸・土坑・溝・河道・ピット、近世：土坑・溝、近代：畝状遺構・畦畔	138

<三朝地区：福呂遺跡>

総合番号	年度	番号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積 (㎡)	概要 (主要遺構ほか)	文献
1	1997	1・2	福呂遺跡第1次調査 ：実験研究棟新営	-	97.5.10～20 7.28～31	269	縄文時代早期・弥生時代中期・中世・近世の集落	55
2	1997	3	福呂遺跡第2次調査 ：実験研究棟新営に伴うスロープ設置	-	97.11.25～12.5	120	古代・中世・近世の集落	55

付表2-(2) 試掘・確認調査

<津島地区：津島岡大遺跡>

総合番号	年度	番号	調査対象地名 他	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要		文献	
							TP数	内容・その後の対応		
(3)	1983	-	農学部合併処理槽予定地	BH13	2.5	-	1	→津島岡大第2次調査：1983年度	1	
4	1983	-	農学部排水管中間ポンプ槽予定地	BF17	3.5	-	1	→工事立会		
5	1983	-	農学部排水管理設予定地	BE～BG14、 BE・BH15、BE18、 BF16～18、BC18	2.0	-	29	→津島岡大第2次調査：1983年度		
6	1983	-	農学部農場畜舎棟予定地	BF22・23	2.0～3.0	0.6	2	土器片→1987年度工事立会		
(7)	1983	-	大学事務局棟予定地	BC・BD15	2.0～3.0	0.9	3	→津島岡大第26次調査：2000年度		
(8)	1983	-	保健管理センター予定地	BB10	2.0～3.0	0.8	1	→津島岡大第10次調査：1999年度		
9	1983	-	津島宿舎予定地	BI16	0.9	0.9	2	土器片→1987年度工事立会		
10	1983	-	工学部校舎新営予定地	AW05	3.0	1	1	土器片		
12	1985	1	教養講義棟予定地	BE08	3.5	1.2	2	遺構など未確認→1986年度工事立会		5
13	1985	2	教育研究棟予定地	AX02	2.6～3.4	1.2	3	縄文～弥生・中世土器出土		
14	1985	3	男子学生寮予定地	AV・AW99～01	2.0～3.0	1	12	→津島岡大第3次調査：1986年度		
(17)	1986	3	屋内運動場予定地	BF・BG09	2.4、1.2～1.7	1.1	3	→津島岡大第4次調査：1986年度		6
(18)	1986	4	大学院自然科学研究科棟予定地	AY・AZ07	1.6～3.2	0.6～0.8	3	→津島岡大第5次調査：1988年度		
22	1987	4	外国人宿舎予定地	AP02	2.2～2.8	-	2	縄文時代・弥生時代・近世の遺構面		8
(23)	1987	5	総合情報処理センター予定地	AV11	2.0～3.0	2	2	→津島岡大第11次調査：1993年度		
24	1987	6	理学部身体障害者用エレベーター予定地	AY09	3.0～3.5	約1.0	1	中世・近世の遺物、古代・中世の水田 <継続して調査>		
25	1987	7	教養部身体障害者用エレベーター予定地	BD09	2.5	0.7	1	縄文時代遺構、縄文・中世・近世土器 <継続して調査>		
29	1988	17	工学部校舎予定地	AX04・06、AW04	2.0～3.5	1～1.5	6	→津島岡大第6・7次調査：1988年度	11	
30	1988	19	動物実験飼育棟・遺伝子実験棟予定地	BD18・19	2.3	1.1～1.2	3	→津島岡大第8次調査：1991年度		
31	1988	20	国際交流会館予定地	BC26	2.5	1.2	3	中・近世土器→1988年度工事立会		
33	1989	2	教育学部身体障害者用エレベーター予定地	AZ・BA05	2.5	0.8	1	縄文後期・弥生早期の落込み、縄文後期～中世土器<継続して調査、面積38.5㎡>	14	
34	1989	3	大学院自然科学研究科合併処理槽予定地	AZ17	4.0	1.6～2.0	1	中世～明治の水田畦畔・溝→1989年度工事立会		
35	1989	4	学生合宿所予定地	BD02	2.0～3.2	1	1	弥生前・前期の畦畔→1989年度工事立会		
(36)	1989	5	図書館予定地	AV・AW13	3.0	1.4～1.6	2	→津島岡大第12次調査：1993年度		
40	1990	3	学生合宿所ポンプ槽予定地	BC02	2.5	1.1	1	弥生前期畦畔、中世土器	18	
41	1990	6	福利厚生施設予定地	AW・AX11	3.9	1.4～1.6	2	→津島岡大第13次調査：1994年度		
56	1993	3	農学部汎用耕地実験実習施設予定地	BE～BF22～23	1.5	-	2	中～近世の耕作土	30	
65	1994	3	農・薬学部動物実験施設予定地	BD20	2.0	0.9	1	GL-1.4mで黒色土、縄文土器1点→盛り土保存		
71	1995	4	国際交流会館予定地	BE26	4.1・2.4	1.6	2	中世～明治層確認、以下は湿地、遺構・遺物無し(明治畝のみ)→工事立会	38	
72	1995	5	環境理工学部校舎予定地	AW02・03	2.4	1.2	2	→津島岡大第17次調査：1996年度		
73	1995	6	ボクシング部ボックス移設予定地	BF07	3.0	1.2	1	標高2.5mで黒色土、弥生～古墳時代の溝2条、古代溝1条		
(90)	1998	9	コラボレーション・センター予定地	AZ09	2.7～3.4	1.3	2	→津島岡大第19次調査：1998年度	53	
(91)	1998	10	環境理工学部校舎予定地	AW02・03	4.5	1.2	2	→津島岡大第22次調査：1998年度		
92	1998	13	工学部システム工学棟予定地	AW04	2.8	1	1	GL-1.8m黒色土、縄文後期の遺構		
93	1998	14	遺跡保護区整備関連範囲	AU02・03・06、 AV03	2.4～3.8	0.8～1.6	5	TP1・3・5：微高地、TP2・4：低湿地、TP1：弥生溝、TP3：弥生溝・ピット、TP4：中世溝		
(105)	1999	6	文法経 総合研究棟予定地	AZ15、BA14	2.7、3.5	0.8 1.1	2	→津島岡大第23次調査：1999年度	56	
106	1999	7	電波暗室設置予定地	AV08	1.2	0.2	1	現表土以下に基盤となる岩盤層		
114	2000	6	縄文～弥生時代における環境復元に伴う調査	AV00、 AX00・02・03、 AZ06、AW08	2.6～3.2	1.7～0.9	6	縄文・弥生時代の微高地、古代溝	61	
115	2000	7	創立五十周年記念館予定地	BB14	2	0.8	1	→津島岡大第27次調査：2001年度		
129	2002	5	事務局旧本部棟移転予定地	BD15	2.1	1	1	黒色土の落ち	71	
185	2009	2	学童保育室予定地	AV14	3.24	1.95	1	黒色土確認		

総合 番号	年度	番号	調査対象地名 他	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要		文献
							TP数	内容・その後の対応	
186	2009	3	農学部構内植物工場予定地	BF20	3.4 2.3	2.3 1.1	2	近代溝・畦畔 弥生中期～古代におさまる溝	102
198	2010	3	国際交流会館予定地	AU13・14	3.4	1.6～1.9	3	→津島岡大第34次調査：2010年度	105
199	2010	4	生協プレハブ予定地	BC12	2.2	0.9	1	黒色土は未堆積を確認	
208	2011	1	文法経フェンス工事	AW17、AX17、 AY17、AZ16	1.1～2.0	1.0～1.6		近代の土塁、水路	107
213	2012	1	正課外活動施設予定地	BD02	2.9	1.1	1	縄文時代～近代層確認	111
217	2013	2	Jテラス新営	BG13	1.8・2.3	1	2	縄文時代ピット、弥生時代前期土坑・遺構	116
247	2015	2	職員宿舎新営	BH16～BI17	2.35	1.0	2	弥生早期～前期水田	124
251	2016	1	津島岡大遺跡南東部における確認調査	BD07	3.0	1.23	1	弥生時代土坑、近代水路	129
259	2018	1	グッドジョブセンター増築	BD15	2.4	1.46	1	黒色土確認	138

＜鹿田地区：鹿田遺跡＞

総合 番号	年度	番号	調査対象地名 他	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要		文献
							TP数	内容・その後の対応	
(4)	1984	—	西病棟北側受水槽予定地	BU30・31	1.4	0.5～0.7	2	中世土器・包含層確認→盛り土保存	2
(5)	1984	—	医療短期大学部校舎予定地	CT・CU25、 CZ19・20・23・24	2.7	0.8～1.0	3	→鹿田第3次調査：1986年度	
6	1985	4	外来診療棟環境整備工事範囲	AJ33、AI40 AJ・AK26	2.2～3.0	0.9～1.4	3	弥生時代～中世の遺物	5
(17)	1990	5	アイソトープ総合センター予定地	BY・BZ68	2.3	1.2～1.3	1	→鹿田第6次調査：1990年度	18
(26)	1997	8	基礎医学棟予定地	BT57	2.2	0.9	1	→鹿田第7次調査：1997年度	50
29	1998	11	病棟予定地	CF・CG43・44、 CH25・26、 CK35・36、CK15	2.0～2.4	1	4	→鹿田第9次調査：1998年度	53
82	2009	2	学生サークル棟予定地	CR70・71、CW75	2.1～2.3	0.9～0.7	2	弥生時代低湿地、中世以降耕作地、集落外縁	102
89	2010	4	岡山県地域医療総合支援センター予定地	AZ04・BA08	2.3～2.4	1.2～0.6	2	近世溝・弥生包含層確認→鹿田第22次調査：2011年度	105

＜倉敷地区＞

総合 番号	年度	番号	調査対象地名 他	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要		文献
							TP数	内容・その後の対応	
1	1990	4	資源生物科学研究所遺跡確認	—	2.5	0.7	1	中世後半以降の土器	18
2	1998	12	バイオ実験棟予定地	—	1.5	0.2	1	近世干拓地内、遺構未確認	53
3	2013	1	植物ストレス科学研究等拠点施設建設工事	—	2.0	0.7	1	近世耕作土層確認	116

＜東山地区＞

総合 番号	年度	番号	調査対象地名 他	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要		文献
							TP数	内容・その後の対応	
3	2006	1	附属小学校校舎予定地	—	3.0	0.3～0.5	4	近世・近代：溝3条、中世？畦畔	88
4	2008	1	附属中学校校舎予定地	—	2.3～2.4	1	2	近代畦畔	95
5	2013	1	附属小学校屋内運動場建て替え工事	—	2.1	0.9	1	中世～近世耕作土層確認	116

＜三朝地区：福呂遺跡＞

総合 番号	年度	番号	調査対象地名 他	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要		文献
							TP数	内容・その後の対応	
3	1997	5・6	実験研究棟予定地	—	1.66～2.1	0.8	2	→福呂第2次調査：1997年度	50
5	2004	1	三朝宿泊所増築予定地	—	1.3	0.5～0.9	2	遺構・遺物・包含層未確認	
6	2004	2	高圧線・電話線設置予定地	—	1	0.85	1	河床礫、段丘礫層確認	81

付表2-(3) 立会調査

＜津島地区：津島岡大遺跡＞

総合 番号	年度	番号	工事名称／細目	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要		文献
11	1984	—	南宿舎合併処理槽関係配水管理設	BI15～17	1.0～2.2	1	溝・土坑、弥生土器・須恵器	2	
19	1986	12	教養部校舎新営	BE08・09	2.3	1.3	中・近世：溝・土器	6	
20	21	ハンドボールコート新設	BG08	0.2～2.0	0.8	黒色土			
21	26	教養部校舎新営に伴う電気配管	BF07・08	1.8	0.9	中世包含層			
32	1988	17	テニスコート夜間照明施設	BG10・11	2.2	1.5	GL・約2mで黒色土、西に向かう落ち推定	11	
37	1989	8	自然科学研究科棟新営：工用道路	AZ08	1.4	—	弥生後期水田、近世溝、75㎡	14	
38	10	生物応用工学科棟新営に伴う電柱架設	AV04・05	1.5～1.9	0.7～1.2	黒色土			
42	1990	16・19	岡山市道本町津島東線拡幅に伴う補償工事	AV04～10	0.4～3.0	0.6～1.4	5ヶ所、黒色土、条里南北溝	18	
43	20	学生合宿所給排水管設置	BC02～04 BD03・04	2.3	1.2	GL-2.3mで黒色土			
46	1991	9	防火用水撤去	BC18	2	0.8	基盤層まで掘削、石礫	21	
47	17	津島地区基幹整備（電気）	ハンドホール・アース板	BB16	1.7～1.8	0.5	2ヶ所、明治層～淡灰色粘土層		
48	19	アース板	BD15	1.7	1	GL-1.5mで黒色土			

総合 番号	年度	番号	工事名称／細目	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献	
49	1991	40	南北道路外灯設置	BC・BE・BF12	1.5	-	3ヶ所、GL-1.4mで古代層	21	
52		15	遺伝子実験施設ハンドホール設置	BD18	1.5	0.75~1.1	縄文後期層まで、溝2本	25	
53	1992	34	附属図書館北側駐車場整備	AV12	3	1.7	造成土以下は粘土層		
57		17	保健管理センター新営	外構工事電気配線 旧棟改修電気配線	BB~BC10~12	1.8	0.6~0.7		黒褐色土はGL-1.15~1.7m
58		19			BB11	1.1	0.8	弥生土器、工法変更	
59		23	津島地区基幹整備RI共同利用施設排水処理施設	BA07	3.2	-	明治~中世層・暗褐色土層、古代溝？ 縄文 晩期土器	30	
60	1993	28	津島地区環境整備	ボックスカルバート	BD~BE13	1.5	1		近世~中世層
61		33		水銀灯設置	BB~BG12~13	1.8	0.5~1.2		10ヶ所、中世層まで、一部で暗褐色土層
62		34		信号機設置	BD~BE12-13	1.6	1		中世層まで、一部で暗褐色土層
63		39~ 41	野球場バックネット・防球ネット改修	BB05~07 BC05-41	2.0~3.2	1	GL-1.2~2.0m付近で黒色土、以下黄色砂~ 青灰色粘土		
66		9	陸上競技場照明灯設置	BD・BE・BF04~07	2	0.96	GL-1.92~2.0mで黒色土	33	
67	1994	13	総合情報処理センター新営電気工事	AV10、AW10、 AU11	2.2	1.5	GL-1.7mで黒色土、近世溝		
68		20	焼却場設置	BD20	2.2	1.5	GL-1.9mで黒色土		
76		4	農・薬学部動物実験棟新営	造成土取り	BC18	2.2	1.9	黒色土層付近まで	44
77		5		ハンドホール設置	BD16~19	1.3	-	4ヶ所、造成土以下に5層	
78	1996	12	サテライトベンチャービジ ネスラボラトリー新営	外灯設置	AV02、AV03、 AV04、AV99、 AW02、AW04	1.0~1.5	0.76~1.1	6ヶ所、明治層~弥生層？	
79		13	環境理工学部校舎新営予定地電柱移設	配管設置	AV03~AW03	2	0.95	弥生時代層まで、古墳前期：遺構・遺物	
80		18		AW03	2	-	黒色土まで		
81		25	附属図書館新営雨水樹・外構工事	AV13	1.3	1	造成土以下に青灰色・黄褐色・灰褐色粘質土		
82		16	南北道路ガスマ管理設	BB13~BH13	1.5	-	中世層まで	50	
83	1997	19		AW11~BA13					
84		24	福利厚生施設新営に伴う共同溝新設	BC12	2	0.8	GL-1.65mで黒色土、古代~近世の溝		
94		15	外灯設置	BA09	1.47	1	GL-1.42mで黒色土	53	
95		22	コラボレーション・センター支障配管布設替	AZ09、BA09	1.4	1	GL-1.4mで黒色土		
96		24	南福利外灯設置	BB12、BC12	1.4	0.95	中世層まで		
97		31	環境理工学部校舎新営に伴うガスマ管理設	AW03・AX~AY03 ~06	1.2~1.4	0.65~0.95	中世層まで (12ヶ所)		
98		34	学生会館改修に伴うトラップ撤去	BC10	2.2	1.45	GL-1.7mまで灰褐色粘土、GL-2.2mまで灰 色粘土		
99	1998	35	NTT電柱移設	BA00	1.5	0.9	造成土以下に褐色系粘質土		
100		41	環境理工学部実験排水管理設	AX03~AY07	1~2.4	0.6~1.4	10ヶ所、5地点で中世層、2地点で古代層、 1地点で古墳時代層まで		
101		42	馬場移設に伴う樹木移植	AU02	2.2	1.1~1.3	GL-2mで弥生後期層、GL-2.2mで縄文基盤 層		
102		44	環境理工学部校舎新営	生活排水樹設置	AV03、AW03	1.97	1.4		古墳時代層まで、須恵器・土師器
103		48		ガス管理設	AW03	1.45	1		中世層まで
107		8	外灯設置	AY00、AZ01・03	1.15~1.35	0.5~1.2	3ヶ所で黒色土 (GL-0.85~1m)	56	
108	1999	12	コラボレーション・センター新営：ハンドホール設置	AZ08・09	1.48~2.1	1.03~1.16	2ヶ所、そのうち1ヶ所は古墳時代層まで		
109		13	環境理工学部校舎新営に伴うスロープ設置	AW02	3.5	1.2	調査面積25㎡、黒色土下面まで、近代土坑、 古代溝、縄文後期ピット		
110		42	コラボレーション・センター新営に伴う排水樹設置	AZ09	1.0~1.2	0.8~1.0	6ヶ所、1ヶ所で黒色土対応層まで		
116		17	津島地区電柱設置	BA12	1.6	1	造成土下に灰色粘質土・暗茶褐色粘質土層	61	
117		23	理学部校舎改修	本館基礎補強	AY09	1.3	0.9		造成土下に暗青灰色粘質土・褐色粘質土・灰 色粘質土
118	2000	28		機械設備電気	AX10、AY10	0.85~1.60	0.8~1.6		南側ハンドホール：GL-1.6mまで、GL- 1.52mで中世溝 (方向は南東~北西)
119		42	精密応用化学科棟都市ガスマ改修	AW08、AX08	1.6~2.05	1.45	GL-1.82mで明灰褐色粘土 (中世?)		
120		44	文法経 総合研究棟仮設電柱設置	BA16	1.5~1.7	1	GL-1.4mで中世層？ 軍庭園の築山・土塁一 部掘削		
122		4	理学部校舎改修：電気設備	ハンドホール	AZ10	1.6	1.0~1.2	中世溝	66
123		11	本部棟新営	電柱	BB~BC16	1.5~2.1	1.2~1.4	2ヶ所、GL-1.4mで灰色粘土、GL-2.1mまで 谷か？	
124		27		車庫移設	BB・BC13	0.5~1.6	1	2ヶ所、中世層まで	
125		30		樹木移植	BB14	1.6	0.65~0.8	GL-1.4mに灰色粘質土層 (古代)	
126		31	旧変電室基礎解体	BB14	1.05	0.45~0.75	12ヶ所掘削、中世層まで		
130		29	農学部校舎改修：電気設備	BE15	1.8	1.5	3ヶ所、古代・古墳層まで	71	
131		34	本部棟新設	排水樹・管路	BC13~15	1.2~2.5	0.7~1.2		突帯文土器・石器多数、近世溝、弥生溝
132		51		雨水排水樹・管路	BB13	1.57	0.8		中世・古代・古墳層
133	2002	54		外灯	BB13・BD14	0.95~1.9	0.8		2ヶ所で中世層と古代層まで、GL-1.3mで黒 色土
134		55	一般教育棟B棟外灯設置工事	BC07・09	1.0~1.26	0.95	4ヶ所、中世層まで		
135		57	創立五十周年記念館新営	汚水排水	BB~BC14~15	1.0~2.3	0.85~1.0	一部黒色土上面まで	
136		1	創立五十周年記念館新営	雨水排水樹・管理設	BB13~15	1.3	0.7~0.8	中世層まで	74
137		4	総合研究棟新営機械設備ガスマ管理設	AX06	1.4	0.9	古代層？まで		
138		6	旧事務局庁舎改修電気設備工事	BC15	2.43	0.85	GL-1.9mで黒色土、GL-2.1mで縄文基盤層		
139	2003	7	農学部総合研究棟改修電気設備工事	BB、BC18	1.7	0.7	GL-1.2m前後で黒色土層、GL-1.5~1.6m前 後で縄文後期基盤層		
140		8	総合研究棟新営その他工事	雨水排水	AX06~BA06	1.7	0.7~0.8	標高3.3~3.4mで黒色土、弥生~古代：東西 溝多数、近世・近代：東西溝・畦畔	

総合 番号	年度	番号	工事名称/細目	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献	
141		14	総合研究棟新営その他工事	電気設備工事(外灯)	AW、AX06、07	1.4	-	中世層まで	74
142		15	総合研究棟新営その他工事	排水	AW~AX06~07	0.5~2.5	-	樹で一部縄文基盤層まで掘削、弥生溝	
143		17	旧事務局庁舎改修	外部給水・消火配管	BC~BD15	2.75	1.1	樹で縄文基盤層	
144		21-1	公共下水道接続工事	No.1区間 農学部合併処理槽	BG~BH13	1.8	0.9	縄文基盤層まで	
145	2003	21-2		No.2区間 体育館東~武道場西	BE~BG10	1.95~2.25	0.8~0.9	樹で縄文基盤層、管路で弥生早・前期まで、 弥生溝、縄文土坑	
146		21-4		No.4区間 文・法・経2号館西	AZ16	2.45	1.5	縄文基盤層まで、弥生溝	
147		21-5		No.5区間 理学部	BA10	1.9	0.7	中世頃の座主川を確認	
148		21-6		No.6区間 農学部4号館東	BG22	1.5~1.9	0.9~1.4	縄文基盤層まで、弥生~古墳初頭：ピット、 近代畦畔状遺構	
149		21-7		No.7区間 津島宿泊所	BI16	1.15~1.3	0.8	中世層まで	
150		21-8		No.8区間 南宿舍	BI15	2.0~2.45	1.1	縄文基盤層まで	
151	2004	1		公共下水道接続工事	留学生等宿泊施設	BB~BD26	1.22~1.68	1	中世層まで
152		6	津島キャンパス環境整備：留学生センター西	BB9-10	0.5~1.15	0.4~0.6	弥生後期：包含層・遺構、礫層		
153		3	総合研究棟改修	仮設電柱	AV08	1.5	0.9	青灰~白灰色の粘質土、黒色土は確認されず	83
154		5		アース板	AW09	1.8	-	縄文基盤層まで、黒色土	
155	2005	9	キャンパス環境整備(門扉改修等)		BE02、BG07	1.0~1.3	0.7	-1mで中世層、近世畦畔	
156		13	プール改修(排水管改修)工事		BC~BE03、 BB~BC02	0.75~2.4	0.8~1.3	縄文基盤層まで、黒色土、弥生~古墳：溝 多数、近世土坑、近代：大畦畔・溝	88
157		14	サッカー場防球ネット設置工事		BB~BC04	2.0~2.2	-	オーガによる掘削、一部で黒色土	
158		2	総合研究棟改修工事：耐震工事に伴う支障物撤去・PC 耐震柱基礎掘削		AX10	1.4~1.6	1.0	中世層まで、近世：南北方向の溝	88
159		3	教育学部公共下水道接続工事		AZ~BA02~04	1.3~2.3	0.7~1.0	樹：深さ2.3m、配管：深さ1.05~1.92m、黒 色土or基盤層まで、東西方向の溝	
160		5	プール改修配管接続工事		BA~BB02、BC02	1.7	0.7~0.8	黒色土層or基盤層まで、古墳時代頃の溝状 遺構	
161		11	総合研究棟：耐震工事に伴うPC耐震柱基礎掘削		AX08~09	1.8	-	古墳~弥生時代層	
162		13	農学部2号館南電柱移設		BF16	2.0	-	中世層まで	92
164		4	公共下水道接続工事(理学部他)		BA12	2.0	0.8~0.9	GL-1.6mで黒色土、弥生時代溝	
165		8	総合研究棟改修	外灯基礎及び管路	AV・AX07・08	1.4~1.7	1.2	近世~中世層	
166		10		外構樹・配管(東半部)	AW07・08	1.1~1.4	0.9	近世層、土坑1基	
167		13		インキュベーション施設外構配管	BA~BC20	1.2~1.4	0.6~0.8	縄文時代~近代層、中世・近代の溝	
169		7	理学部ヘリウム液化装置基礎工事：基礎杭設置		AZ09	4	-	黒色土なし、GL-4m以下で礫層	95
170		21	電気工事：建柱	AY03・AZ03・BA03	2	-	3地点掘削、北地点で黒色土無し		
171		22	総合研究棟(教育系)改修	電気工事：接地極埋設	AY04	1.7~1.78	-	古代層下土溝or河道の砂層	
172		26	機械工事：都市ガス	AZ03	1.2	-	GL-0.95mで黒色土		
173		28	KDDI無線基地局新設工事：建柱	BB12	1.8	0.8~1.05	灰褐色砂質土層まで、黒色土未確認		
174		32	プール系統水道メーターボックス取設工事	BB04	0.9~1.5	-	中世層(?)まで		
175		33	南宿舍電柱設置工事	BJ17	2	-	GL-1.2~1.5mで黒色土		
176		39	大学生協東福利施設新築	ガス管	AX04	0.85~1.21	1	中世層まで	
177		40		外灯移設	AX05	1.1~1.2	0.68~0.95	2地点掘削、古代層まで	
178		42	新技術センター公共下水道接続工事		AW00~01	0.85~1.75	0.7	中世~近代溝4条(南北里境か)、黒色土上 面まで	
179		43	動物室	AY01	0.85	0.85	黒色土上面で弥生~古墳時代の水田畦畔	102	
180		44	教育学部体育館他改修	仮電柱設置	AY03、BA03	1.2~1.7	-		2地点掘削、北：中世層まで、南：東西溝
181		49	接地極埋設	AY02	0.3~1.7	-	古代層まで		
182		52	大会館他改修工事：一般教育講義棟ガス設備	BB10~11	0.7~1.2	0.55	GL-1.0m以下で礫層、土坑1基、溝?1条		
183		53	工学部屋外ガス配管改修工事	AV04~06、AW04	0.8~1.48	0.8~1.1	一部で中世層まで		
187		6	総合教育棟(共通教育)改修工事：高圧ケーブル	BE~BF04~08	1.3	-	2ヶ所、中世層・近世層まで		
188		14	環境整備(施設誘導案内板)新設工事	BB10	0.8~0.95	0.6	保健管理センター北東で弥生?遺構埋土		
189		16	工学部21号館(動物飼育室) 改修	ガス管	AU06	0.8~0.9	-		一部弥生?包含層
		17		排水管	AU06-07	0.65~0.9 2.2	1.25		北東部で河道
190		21①	南北道路信号機付け替え	西門南東	BB12	1.8	0.58~1.25		中世~弥生層まで、底面で黒色土
		22		西門北東	BA12	2.0		縄文層まで、黒色土確認	
		23		西門北西	BA13	2.05		縄文層まで、黒色土確認	
		24		事務局前北東	BD12	1.95		縄文層まで	
	2009	25	総合研究棟Ⅱ期(教育系) 改修	ガス管	AY-AZ02-03	0.8	-	弥生層確認	
		27		電気設備：アース埋設	AY01・AZ03	1.65	0.4	縄文層まで、黒色土・中世以前の遺構	
				電気設備：配管		0.8		弥生包含層・遺構	
				電気設備：外灯		0.8~1.3		黒色土まで	
		29		屋外排水	AY02-03	1.15	1	黒色土・弥生遺構	
		30		屋外排水：管路	AZ00-02	管路 0.8~0.9	0.7	包含層・畦畔・小溝	
				屋外排水：樹		樹1.2-1.7		縄文層まで、北：黒色土、南：黒色土無し	
		32	電気設備：アース埋設	AZ00・AY-AZ01	1.7	0.6	縄文層まで、黒色土		
			電気設備：配管		0.8~0.9		包含層・土師器小片		
			電気設備：外灯		1.3		既設土内		
192		42	文法経ボイラー用煙突撤去工事		AX16	2.5	1.5	縄文層まで、弥生中・後期溝1条	

総合 番号	年度	番号	工事名称/細目	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献	
193	2009	48	総合研究棟(薬学系)改修	電気設備:配管	BB16・BC17	1.45	近世層、近代溝 包含層(中世?)	102	
				電気設備:アース板	1.50~1.54				
		54	環境理工学部公共下水道接続工事	AU03	2.3	0.9	弥生~古墳層まで、近代東西畦畔1条 黒色土上面まで		
194	2009	55	薬学部下水道管位置確認工事	BC18	2.7	0.55	<岡山市教育委員会対応> 縄文層まで、黒色土		
200	2010	8	外灯整備工事	AZ06	1.1	0.7	黒色土	105	
201		17	創立五十周年記念館	BB14・15	1.1~1.6	1.15	近世層、近代石組用水路		
202		23	総合研究棟(薬学系)に伴う支障管移設	BB・BC17	0.87~1.4	0.8	古代層		
203		26	テニスコート陥没復旧工事	BG11	1.9	-	既設内、砲弾他<岡山西署回収>		
204		34	薬学部本館改修工事	電気設備:管路	BC・BD18	0.7~1.28	1.1		中世層
205		35		電気設備:ハンドホール		2			縄文時代層、近世・近代:里境溝
206		36		外灯設置:管路	BB17	0.63~0.74	0.85		近世・近代層
206	2010	36	外灯設置:基礎		1.08~1.34		中世層		
206	36	農学部水道管復旧工事(緊急対応)	BF15	1.1	-	既設内			
207	37	国際交流会館	排水樹掘削工事	AU・AV13・14	2.2~2.5	-	4ヶ所、中世上面から0.55m掘削、弥生後期層		
209	2011	1	文法経フェンス工事	AW17、AX17、AY17、AZ16	1.1~2.0	1.0~1.6	近代の土塁、水路	107	
210		8		AZ17	0.8	-	門跡・陸軍建物基礎		
211		9	津島線配水管布設工事	BA10	1.3	0.6	中世層まで、近世・近代溝確認		
212		12	教育学部講義棟トイレ改修工事<屋外排水>	BA08	1.5	0.6	中世層まで、近代畦畔・溝		
214	2012	9	美しい学都整備	防球ネットポール	BB06~07	3.0	1.0	基盤層まで	111
215		11	農学部周辺排水管整備	樹・管路	BE~BF13	1.6	1.0~1.3	基盤層まで	
218	2013	5c	総合研究棟改修(工学系)	設置路線③	AV05	0.9	-	近代の雨落ち溝	116
219		5d		設置路線④		0.75	-	近代の東西方向石組溝	
220		6a		接地銅板①		1.65	0.85	縄文層確認	
221		6b		接地銅板②					
222		8	電気設備:管路	AW05	0.8	-	近代の東西方向石組溝		
223		16	NTT電柱引き込み	電柱	BB15	1.6	-	旧陸軍東西方向水路	
224		19b	暖房ビット②	BC10	1.05~1.1	0.5	中世層、近世南北方向溝		
225		21a	東西道路南側外灯①	BB08	1.0	0.55	弥生層確認		
226		21b	東西道路南側外灯②	BB09	1.1	-	旧陸軍東西放水路		
227		21c	東西道路南側外灯③		1.3	-			
228		21d	東西道路南側外灯④		1.4	0.3	礫層確認		
229		21e	東西道路南側外灯⑤	BB11	1.5	0.95	中世層、近世東西方向溝		
230		21f	東西道路南側外灯⑥		1.4	0.85	中世層、近世東西方向水路		
231		21g	東西道路南側外灯⑦	BB12	1.1	0.7	近世層、近世東西方向溝		
232		22a	集水樹①	BB10	1.4	0.6	礫層確認		
233		22b	集水樹②	BB11	1.4	0.9	中世層、近世東西方向溝		
234		23b	大会会館周辺他環境整備	東西道路南側樹木植穴②~④	BB10・11	0.6~0.7	-	旧陸軍東西方向水路	
235		24	自由勾配側溝①	BB09~12	0.8	0.6	近世層、近世南北方向の段・溝、近代南北方向溝		
236		25	重圧管管路	BB10・11	1.0~1.1	-	旧陸軍東西方向水路		
237		26a	ガス管管路1-①	BB10	1.0	-	旧陸軍東西方向水路2条		
238		26b	ガス管管路1-②	BB10	1.2	0.55	礫層、近世土壌、近代南北方向溝		
239	28a	さくら広場外灯①	BB10	1.4	0.5	弥生前期層確認			
240	28b	さくら広場外灯②	BC10	1.1	0.45~0.55	古墳時代前期層、古墳時代後期土坑(焼土◎)、近世土坑			
241	30	ガス管②	BB10・BC10	0.75~1.4	0.85	近世層、近世土坑、近世~近代東西方向溝			
242	31	パーゴラ電気設備	BC11	1.5	0.75	礫層、弥生時代ビット、戦国時代南北方向溝			
243	35a	ガス漏れ修理	AZ03	1.1	0.5	弥生時代前期黒色土確認			
244	2014	8	Jテラス新営	排水管	BG・BH13	0.7	-	旧陸軍南北方向水路	121
245		12	津島宿泊所	電柱新設工事	BJ16	2.7	-	オーガ掘削、GL-1.6~1.8mで黒色土	
248	2015	9	職員宿舍新営		BI16	0.8~1.9	1.0	陸軍水路確認GL-0.4m	124
249		13			BI16	0.9~1.45	0.65~0.85	南端GL-1.3mで弥生後期層確認	
250		16			BI16・17	2.5	0.9~1.2	オーガ掘削、GL-1.6mで黒色土、-1.8mで基盤層確認	
252	2016	7	職員宿舍電柱立替		BI14	2.5	0.8	オーガ掘削、GL-1.6~1.8mで黒色土	128
253		13	講義棟改修(教育系)	導水ブロック柵		1.1	0.6	黒色土まで確認	
254		14		新設柵1		1.5	1	黒色土まで確認	
255		15		新設柵2	AZ-BA04-06	1.4	0.65~0.9	黒色土まで確認	
256		16		外灯基礎1		1.4	0.78	黒色土、中世溝確認	
257		17		外灯基礎2		1.4	0.7	黒色土、中世溝確認	
258	18	外灯基礎3			1.4	0.8	黒色土まで確認		
260	2018	6	理学部2号館電気室設置極埋設工事		AY09	0.75~1.7	1.2	中世層	138
261		21	野球部バックネット改修ほか	野球部バックネットポール基礎	BB05-06	3.0	0.9~1.0	東側2か所は青灰色粘土、西側2か所は-2.4m付近に黒色土、以下灰黄褐色砂質土~青灰色粘土	

総合番号	年度	番号	工事名称/細目	構内座標	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
262	2018	22	基幹・環境整備(ブロック塀対策)他 津島宿舍南	BJ16・17	0.7	0.7	土塁測量実施	138

< 鹿田地区：鹿田遺跡 >

総合番号	年度	番号	工事名称/細目	構内座標	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
3	1983	-	外来診療棟蒸気配管埋設	AO~AW22	1.3	-	弥生後期：土器・分銅形土製品、貝集積	1
7	1985	6	外来診療棟関係屋外排水管理設	AW~BH23、 BH-BI24	1.3~1.7	0.7~1.3	弥生・中世：遺構・遺物	5
8		12	基幹環境整備緑化工事：電気配線ハンドホール掘削	AG31、AG24、 AF23	1.2~1.7	0.9~1.3	3ヶ所、中世包含層・ピット	
9	1986	9	記念館東側污水管改修工事	BI~BN4	0.8~1.3	0.8	中世包含層、土器	6
11		24	護岸及び囲障工事	CL~CR12、 CR~CX13、 CX~DA14	2	0.8~1.0	中世包含層	
14	1987	8	管理棟新営に伴う基礎杭確認	BC37	2.5	-	弥生時代：包含層・遺構	8
15	1989	46	旧管理棟跡地環境整備：外灯基礎	CE30・37・44、 CJ・CK45、CL28・29	1.2~1.5	0.7~1.0	2ヶ所、中世層	14
18	1992	29	アイトープセンターL形側溝・集水槽	BW71	1.4~1.5	0.9	中世溝1条	25
19		41	テニスコート脇電柱埋設	CI73	1.2	1	古代土器1点	
20	1994	5	護岸改修工事	DH60~62	1.5	0.8	近世層以下は遺構埋土か、溝3条・ピット9基	33
21	1995	11	附属病院連絡通路新設	BG・BI18	1.5	1	造成土以下に茶褐色土・青灰色粘質土層、 遺物なし	38
22		14	鹿田地区基幹整備 液酸タンク設置	CD07・08	2.3	1	中世2面、溝3条、溝内から古代・中世土器	
23		17	液酸タンクU字溝埋設	CD08~CC11	1.23	0.85	包含層、中世土器、攪乱で区間全長の1/2 程度破壊	
24		23	防球ネット取設工事	DF56~67	3	0.8	径60cmを12ヶ所、内4ヶ所で土器片・石器、 調査区西寄り：GL-2m以下は旧河道か	
30	1998	36	校舎新営に伴う仮設電柱工事	BV73、CN78	1.2	1	中世層まで	53
33	1999	15	研究棟新営 給排水・管路	BV65~71	1.2~1.4	0.9	中世層まで	56
34		18	検水槽	BU65	2.2	1.1	面積8.2㎡、近世溝、中世：溝・ピット	
35	1999	27	基幹整備(電気設備)：地中配管	BY42・43、 B43・44	1.25~1.45	0.45~0.5	2ヶ所、中世層まで、時期不明遺構	56
36		41	病棟新営 共同溝解体	CF21~28、 CF~CL28、 CD~CF28~33	1.7	-	面積18㎡、鹿田11次調査南側で中世ピット	
37		46	汚水・管路	CN46~DE49	2.3	1.2	古墳時代：井戸1基・土坑1基、中世溝等	
38		47	グラウンド防球ネットポール	CM・CN・CP・CR・ CT58、CV・DA・ DC・DD・DF59	2.0~2.3	-	11ヶ所、南側6ヶ所：河道、7~10ヶ所：微 高地、最北端：河道	
39	2000	48	病棟新営 污水検水栓	BT51	2	1	古墳時代層まで	61
41		25	病棟新営 管路・雨水	CD41~CN45	1.6~1.8	-	溝か？	
42	2000	26	電柱及び外灯の埋設工事	CN15・21・27、 CO31・42、 CS45、DV45	1.6	-	7ヶ所、灰白色土層・淡褐色砂質土層・暗褐色 砂質土層、微高地部か	61
43		29	医学部ガス配管切り離し用バルブ取付工事	DI27	0.8~1.15	0.7	GL-0.85mで黄灰色粘質土	
44	2000	47	鹿田団地南側用水路境界擁壁改修	DG~DJ28~67	2.1~2.3	1.3~1.5	幅120mの壁面調査、古代の遺構・河道	61
45	2001	37	総合教育研究棟新営に伴う機械設置工事	BR~CA43、 CA43~55、 CA44~CL45、 BR~CA55	1.65	0.7~0.9	中世層まで、中世土器多数出土地点あり	66
47	2002	10	鹿田団地ガス配管埋設工事	CH11~CN22	1.0~1.3	0.87	中世層まで	71
48		19		BT・BU11	0.5~1.8	-	2ヶ所、GL-1.22mで古代or中世層	
49		22	共同溝排水管	CQ41~42	1.5	-	1ヶ所、包含層まで	
50		25	エネルギーセンター棟新営 外灯	CG41、CO34、 CF43、CO38	1.47~1.66	-	4ヶ所、中世層まで	
51	2002	27	外溝	CV36~45	0.9~1.9	0.9	中世：井戸・柱穴・溝	71
52		36	総合教育研究棟新営その他工事	BI~BS45~53	1.85~2.0	0.8~1.0	5ヶ所、中世層まで	
53	2002	52	本部棟新営その他工事：植栽移植	DC67	1.25	-	中世層	71
54		56	旧混合病棟グリーストラップ改修	BG18	1.68	-	底面で弥生~古墳層、土器	
55	2003	5	屋外排水	BS~BZ45、 CA~CO46、 CO45	1.7	0.7~1.0	弥生中期?包含層まで、近世土坑、中世ピット 多数、低地部確認	74
56		9	総合教育研究棟 外構工事(雨水・污水・実験 排水)	BL~BS45~53	0.8~1.75	0.7~0.9	一部弥生中期包含層まで、古墳時代溝、中 世井戸、近世土坑等	
57		10	給水配管埋設	BR~BS50~54	1.33	0.8	一部で中世層まで	
58		13	外構工事(外灯)	BR53、BL54	1.4	0.8	中世層まで	
60	2004	3	医病構内支障ガス配管替工事	AF16、AF~AJ17、 AJ9~16	1.0~1.9	0.7~0.8	接続部：近世・近代水田層、中世畦畔、弥 生~古墳河道(砂層)	81
61		5	医病構内支障給水管配管替工事	AE4~16、 AF~AI16、 AI9~15、AJ~AO9	0.9~1.9	0.85	辨：中世?~近代畦畔、弥生~古墳河道 (砂層)	
62	2005	3	医学部変電所ピット周辺高圧ケーブル設置工事	DH~DJ18、DJ19	1.1~2.5	0.7~1.1	一部で弥生~近代層	83
63	2006	6	エネルギーセンター棟新営に伴う工事	CT~CU45	2.5	0.9	鹿田第12次調査地点と重複	88

総合 番号	年度	番号	工事名称/細目	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献	
67	2007	4	基幹環境整備(道路等)工事	CC13~20、 CD13~20	1.2~2.2	0.9~1.2	基盤層まで、中世：東西・南北溝	92	
68		5	中診棟屋上防水改修その他工事	AS03~07、 AV~AX07、 AY~BB09	0.6~0.9 1.4、1.8	0.7	古墳時代南北溝、中世東西溝		
69		7	中央診療棟新営：ガス管切断工事	BT11	1.28	0.5	中世溝		
70		10	基幹整備(電気設備)工事	CO42、CV36	1.3~1.65	1.3	中世層まで、遺構		
71		11	環境整備(道路等)工事	ガス配管1	CG08、CF09・10、 CG・CH1、CI11	0.85~1.3	0.9		中世：井戸(or墓)・ピット・溝
72		17		ガス配管2	CL12、CM13、 CN14・15	1.0~1.2	0.4		中世層、中世遺構
73		27	総合研究棟(医学系)新営その他工事	BT・BU65	1.35	1	中世層		
74		28	用水路改修工事	CJ7~CP12	1.7~2.0	0.6~0.8	包含層及び枝川東側に微高地		
75		30	高エネルギー治療室改修工事	BE33	1.4	0.6~0.7	中世~近代：畦畔・溝、弥生後期土器		
77		2008	5	基幹整備(西病棟とりこわし他)工事	現場打ち排水柵	BT24~25	0.98~1.4		0.7
78	6		ライトコート工事	BQ24、BR24	0.75	0.5	湿地性堆積層		
79	7		基礎医学棟一部とりこわしに伴う支障ガス配管移設工事	AO53~54、 AL54~AO54、 AL54~61、 AL62~AP65	0.76~1.0	0.5	近世層まで、土坑2基		
83	2009	3	鹿田遺跡第20次A調査矢板打ち	CB30、CB40	0.8~0.9	0.7	中世層まで	102	
90	2010	6	高精度放射線治療棟屋外排水工工事	BH32~35、 BI~BL35	0.75~0.9	0.6	中~近世の遺構?	105	
91		7	中央診療棟新営：アース極設置工事	BR14~16・19・22	0.9~1.8	1.1	包含層		
92		17	外灯整備工事：研究棟南駐車場	BY46~50	1.2	1.2	遺構埋土?		
93		22	保育所改修工事	CV~CY28・29	1.6	1.15	弥生基盤層まで		
95	2011	4	立体駐車場新営<配管>	CN45~49、 CO~DF49、 CW~DD44、 DD45、DD~DF46、 DF~DG47~49	0.7~2.38	0.55~1.0	弥生時代土坑、古代土坑、中世溝、近世土坑・溝・畦畔	107	
98	2012	8	グラウンド防球ネット設置	CL~DF57	2.0	1.0	オーガ掘削	111	
99		9	医歯薬融合棟支障配管	ポンプ槽(南)	BL~BM58	2.0	1.2		中世溝・土坑?、弥生基盤層まで
100		13	講義実習棟改修	検水槽	BU~BV66	1.6	1.1		中世以前(灰茶褐色砂質土)まで
102	2013	3	医歯薬融合型教育研究拠点施設新営	浄化槽撤去	BM57・58	3.6	1.1	弥生基盤層以下まで	116
103		4		共同溝撤去	BE65	2.3	1.1	弥生基盤層まで	
104		5		ボイラー撤去	BH・BI66~68	3.9	1.1	弥生基盤層以下まで	
105		6		重油タンク撤去	BC67・68	3.5	1.1	弥生基盤層以下まで	
106		7		煙突撤去	BJ・BK69	4.9	1.1	弥生基盤層以下まで	
107		8		工所用電気引き込み	AV68	2.0	1.0	中世層(?)確認	
108		9a		排水配管(A工区)	AD~AH66・67	2.45~2.68	1.2~1.65	古代河道、中世~近代層、近世溝	
109		9b		排水配管(B工区)	AI~AK67	2.2~2.45	1.6~1.65	古代河道、中世~近代層	
110		9c		排水配管(C工区)	AJ66・AK67・68・ AL~AP67・68	1.8~2.66	1.35~1.7	古代河道、中世~近代層	
111		9d		排水配管(D工区)	AO~AT68	1.7~2.05	1.2~1.35	弥生時代後期包含層、弥生~古代砂層、古代河道、中世~近代層	
112		9e		排水配管(E工区)	AS~AW68	1.45~1.9	0.7~0.75	弥生層、弥生ピット、弥生土器片出土、弥生~古代砂層、近代層	
113		9f		排水配管(F工区)	AU・AX~AZ68、 AX・AZ~BB69	1.33~1.84	0.7~0.75	弥生層、弥生~古代砂層、中世~近代層	
114		9g		排水配管(G工区)	BC66~70、 BD61・63・64、 BE60~63	0.88~1.5	0.89~1.15	中世~近代層、近世土坑	
115		11		給水管	AL53	1.5	0.8	中世?~近代層確認	
116		12		Jホール新営	給排水管路	AL53~62、 AK・AI62~67	0.65~1.85	1.3	
117	19	臨床研究棟改修	電気配管(アース)3ヶ所	BJ・BK43	1.64~1.73	0.6~0.71	古墳?・中世・近世層確認		
118	26a	排水配管(A工区)	AD40	2.0	1.3	中世層、近世土坑			
119	26b	排水配管(B工区)	AD・AE39・40	1.75	1.5	中世~近代層、河道?			
120	26c	排水配管(C工区)	AF40~42	1.52~1.63	1.06~1.2	中世~近代層確認			
121	30	給水・消火管	AU~AW40~42	1.4	0.8	中世?~近代層確認			
122	32a	中診Ⅱ期発掘調査に伴う支障物撤去	排水配管(A工区)	BZ~CC42、 BX・BY43	1.1~1.45	0.85~1.0	中世~近代層、近世土坑・畦畔		
123	32c	排水配管(C工区)	BT35	2.3	1.1	中世~近代層、中世溝			
126	2014	6	動物実験施設改修	雨水排水柵	CC58	1.4	0.9	中世溝、近世近代層	121
127		11	機械設備柵	CJ58	1.8	1.1	弥生~古墳層まで掘削、中世土坑		
128		15	排水柵①	BB69	1.6	0.7	中世~近世近代層		
129		19	医歯薬融合型教育研究拠点施設新営	カーブミラー基礎	BL70	1.3		0.8	
130		24	グラウンド復旧工事	防球ネット移設	CP~DF68	2.1	1.1~1.2	オーガ掘削、1ヶ所で貝層確認(GL~約1.6m)	
131	2015	11	旧混合病棟とりこわし他工事	外灯1	BA21	1.3	0.75	中世溝、弥生後期の包含層確認	124
132		13		外灯3	BF11	1.3	0.8~1.05	中世井戸2基・溝1条確認	
133		14		外灯4	AY・AZ08	1.3	0.5~0.6	中世ピット12基・溝2条確認。弥生後期包含層確認。	
134		15		バリカー1	BG10	0.9	0.75	近世溝または河道確認	

総合番号	年度	番号	工事名称/細目	構内座標	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献	
135	2015	16	旧混合病棟とりこわし他工事	バリカー2	BG09	0.9	0.65	近世土坑1基・溝1条確認	124
136		17		バリカー3	BG09	0.9	0.7		
137		20	臨床講義棟改修工事	給排水	BV40~BW41	1.0	0.6	中世層確認	
138	2016	2	中央診療棟新営	管路	CA44	1.15	1.05	中世層確認	128
139		7		管路1	AD63~65	2.3	1.6		
140		8	旧生化学棟改修工事	管路2	AF62~65、AD・AE66	1.7~2.3	1.5~1.7	古代河道堆積砂まで確認	
141		9		管路3	AI61~67	1.95	1.6	中世層まで確認	
143	2017	4	自家発電	ガス配管	CM43~CO46	1.2	1.0~1.1	中世層確認	134
145	2018	2	防球ネット移設		CL~DF57	2.0	0.9	貝類混じる地点1ヶ所あり	138

<東山地区>

総合番号	年度	番号	工事名称/細目	構内座標	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
1	1983	-	附属中学校新営	-	4.0~5.0	-	シルト層中	1
2	1997	29	附属小・中学校他開障改修工事	-	1.2	0.79	GL-1.1mで近世水田層、溝1条	50

<三朝地区：福呂遺跡>

総合番号	年度	番号	工事名称/細目	構内座標	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文献
4	1997	18	実験研究棟新営に伴う電気埋設管路工事	-	1	-	GL-1.0mで中世包含層は東に向かい上昇	50

付表3 埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要 (2019年3月現在)

種類	遺跡名(地区名)	調査名：工事名	箱数(1箱：約30リットル)						特殊遺物ほか	文献	
			総数	土器	石器	木器*	種子*	その他 サンプル*			
発掘	鹿田	第1次調査：外來診療棟	546.5	503	6	20	0.5	1	16	丹塗り土師器・白磁・瓦器・木製短甲・人面線刻土器・ガラス滓・馬骨等	7
		第2次調査：NMR-CT室	106.4	96	0.4	4.5	0.5	1	4	黒色土器・田舟・木簡・墨書土器・転用硯・円面硯等	
		第3次調査：医短校舎	58.6	36	0.3	18	0.3		4	石帯	10
		第4次調査：医短配管	4	2	0.3	0.5	0.2		1	古代土器・鹿角製品	
		第5次調査：管理棟	101.2	88	2.5	6	1.5	0.2	3	木器・炭化種子・牛頭骨・焼き印付き井戸枠	24
		第6次調査：RI総合センター	62	59	0.5	1	1.5			青銅製腕	40
		第7次調査：基礎医学棟	77.5	73	1	1.3	0.2	1	1	猿形木製品	85
		第8次調査：RI治療棟	10	10						備前焼碗・瓦器碗・播磨産碗	
		第9次調査：病棟	120.1	96	0.1	13		9	2	木簡3点	56
		第10次調査：共同溝	2	2						古代土器・杭	108
		第11次調査：病棟	74	66		4		2	2	木簡1点	56
		第12次調査：エネルギーセンター	147	77	1	54				近世漆塗り櫛・籠・須恵器壺	61
		第13次調査：総合教育研究棟	269	229	24	10			6	曲物	98
		第14次調査：病棟	66.2	55	1	2	0.2	1	7	木簡・瓦器碗	112
		第15次調査：総合教育研究棟	4	3					1	-	98
		第16次調査：立体駐車場	1	1						-	81
		第17次調査：総合研究棟	111.2	68	4	8	0.2	1	30	-	87
		第18次調査：中央診療棟(本体)	155.5	116	19	18	0.5		2	-	92
		第18次調査：中央診療棟(その他)	4	2					2	猫形木製品、近世護岸木材	108
		第19次調査：歯学部渡り廊下	185	145	1	4			35	壺棺、蹄脚硯、貝	95
		第20次調査(A・B地点)：中央診療棟	296	148	68	62		6	12	-	102
		第20次調査(C・D地点)：中央診療棟	86.1	55	16	7	1	0.1	7	-	105
		第21次調査：環境整備	10.1	4	1	3		0.1	2	陽物形木製品	105
		第22次調査：地域医療人育成センター	175	146	3	25		1		-	107
		第23次調査：Jホール	33	30		1			2	-	111
		第24次調査：医歯薬融合棟	105	52	4	21			27	絵馬(猿駒曳・牛)	111
		第25次調査：中央診療棟Ⅱ期	85	52	3	4		5	21	烏帽子	121
		第26次調査：動物舎	75	34	4	7		2	28	-	121
第27次調査：自家発電設備	2	2						-	134		
第28次調査：アメニティモール新営	122	81	3	37		1		-	138		
津島岡大	第1次調査：NP-1	5	0.5	0.5	4				-	3	
	第2次調査：農学部合併処理槽他	15.5	12	1.5				2	突帯文土器・弥生前期土器	4	
	第3次調査：男子学生寮	59	48	1.5	2	4.5		3	縄文後期土器・突帯文土器・石製指輪・蛇頭状土器片・鎌状石器・堅果類・種子	19	
	第4次調査：屋内運動場	1	1						-	6	
	第5次調査：大学院自然科学研究科棟	85	71	3	1	8		2	縄文後期：土器・耳栓・櫛・堅果類・種子	27	
	第6次調査：生物応用工学科棟	53	36	1	9	6		1	古代土器・人形木器・編み物、弥生前期人形土製品・堅果類	35	
	第7次調査：情報工学科棟	13.5	10	0.5	1			2	-		
	第8次調査：遺伝子実験施設	11.5	11	0.5					-	32	

種類	遺跡名 (地区名)	調査名：工事名	箱数（1箱：約30リットル）						特殊遺物ほか	文献		
			総数	土器	石器	木器*	種子*	その他			サンプル*	
発掘	津島岡大	第9次調査：生体機能応用工学科	42.5	35	2.5	3	2			堅果類・種子・縄文後期土器	47	
		第10次調査：保健管理センター	86	78	1	7				分銅形土製品、鍛冶関連、器台	64	
		第11次調査：総合情報処理センター	4.5	3	0.5				1	—	36	
		第12次調査：図書館	60.2	38	1	20	0.2		1	弥生木製農耕具・鏝	64	
		第13次調査：福利厚生施設北	12.5	12	0.5					—	41	
		第14次調査：福利厚生施設南	12.2	11	0.2				1	—	46	
		第15次調査：サテライトベンチャービジネスラボトリー	38	15	2	20			1	縄文後期耳栓・編み物、堅果類	72	
		第16次調査：動物実験棟	2.3	0.3					2	—	44	
		第17次調査：環境理工学部校舎	74	63	11					縄文後期土器	77	
		第18次調査：南福利ポンプ槽	0.2	0.2						—	53	
		第19次調査：コラボレーション・センター	28	21	1	4		1	1	炬燵・鞆羽口	65	
		第20次調査：環境理工学部ポンプ槽	0.2	0.2						—	53	
		第21次調査：工学部エレベーター	7	5	2					縄文中期土器・横長削器	65	
		第22次調査：環境理工学部校舎	33.9	26	4	3	0.2	0.2	0.5	古代掘部材	77	
		第23次調査：総合研究棟	81	20	0.5	60	0.5			縄文後期杭・石棒	80	
		第24次調査：総合研究棟渡り廊下	2.1	1	0.1	1				—	80	
		第25次調査：農学部散水施設	0.3	0.1		0.2				—	61	
		第26次調査：事務局本部棟	25	17	2	5			1	—	76	
		第27次調査：創立五十周年記念館	18.2	14	1			0.2	3	縄文後期土器（中津）	68	
		第28次調査：自然科学系総合研究棟	15.2	13	2			0.2		—	87	
		第29次調査：農学部共同溝	1.1	1	0.1					—	71	
		第30次調査：インキュベータ	23.3	5	0.1	18			0.2	—	93	
		第31次調査：大学生協東エリア店舗	5.7	5	0.5			0.2		—	95	
		第32次調査：教育学部剣道場	17	12	3				2	編み物	100	
		第33次調査：薬学部講義棟	12.6	11	1.5			0.1		縄文中期土器（船元）	105	
		第34次調査：国際交流会館	1	1						—	105	
		第35次調査：図書館（増築）	1	1						—	116	
		第36次調査：職員宿舎	2.5	0.5					2	—	129	
		福呂	第1次調査：実験研究棟	7	6	1					縄文早期土器	55
			第2次調査：実験研究棟スロープ	3.1	3				0.1		—	55
		試掘 確認	鹿田	鹿田駐車場（1985）	1	1					—	5
				鹿田アイソトープ総合センター（1990）	1	1					—	18
				地域医療総合支援センター（2010）	1	1					—	105
			津島岡大	男子学生寮（1985）	1	0.7	0.3				—	5
				大学院自然科学研究科棟（1986）	1	1					—	6
				理学部身障者用エレベーター（1987）	0.3	0.3					—	8
教養部身障者用エレベーター（1987）	0.7			0.7					—	8		
工学部校舎（1988）	1			1					—	11		
動物実験飼育棟・遺伝子実験棟（1988）	0.7			0.7					—	11		
国際交流会館（1988）	0.3			0.3					—	11		
大学院自然科学科合併処理槽（1989）	0.2			0.2					—	14		
学生合宿所（1989）	0.4			0.2				0.2	—	14		
教育学部身障者用エレベーター（1989）	0.3			0.3					—	14		
図書館（1989）	1			1					—	14		
学生合宿所ポンプ槽（1990）	0.4			0.4					—	18		
福利厚生施設（1990）	0.5			0.5					—	18		
農・薬学部動物実験施設（1993）	0.1			0.1					—	33		
環境理工学部校舎（1995）	0.1			0.1					—	53		
システム工学科棟（1998）	0.1			0.1					—	53		
正課外活動施設（2012）	2			0					2	—	111	
（土生）	外国人宿舎（1987）		1	1					—	8		
	資源生物科学研究所（1990）		0.1	0.1					—	18		
（倉敷）	附属小学校校舎（2006）		1.1	0.1				1	—	87		
（東山）	附属中学校体育館（2013）	1	0				1	—	116			
立 会	1983年度	2	2					分銅形土製品	1			
	1984年度	1	1					—	2			
	1985年度	1	1					—	3			
	1986年度	0.5	0.5					—	6			
	1987年度	0.5	0.5					—	8			
	1991年度・1992年度	0.3	0.3					—	21.25			
	1993年度～1999年度	0.8	0.8					—	30.33.38. 44.50.53. 56			
	2000年度	3	3					—	61			
	2002年度	8.5	2.5	6				弥生早期土器、中世、礎石	71			
	2003年度	2	2					—	74			
	2004年度	1	1					—	81			
	2005年度	1.1	0.1				1	—	83			
	2006年度	1.1	0.1				1	—	87			
2007年度	0.5	0.5					—	92				

種類	遺跡名 (地区名)	調査名：工事名	箱数（1箱：約30リットル）						特殊遺物ほか	文献
			総数	土器	石器	木器*	種子*	その他 サンプル*		
立 会	2008年度		1	1					—	95
	2009年度		0.2	0.2					—	102
	2010年度		4.2	0.2				4	近現代、陸軍関連金属器、電線	105
	2011年度		3	3					弥生後期土器	107
	2012年度		0.5	0.5						111
	2013年度		1.5	1.5						116
	2014年度		0.6	0.1					0.5 貝サンプル	121
	2015年度		0.5	0.5						124
	2016年度		0.1	0.1						129
2017年度		0.1	0.1						134	
分布調査	1989年度 三朝・本島		0.3	0.3					—	14
	合 計		3973.6	2975.4	218.4	487.5	32.5	35.4	223.4	

*：木器・種子・サンプルは整理の進行状況により容量および保管形態が変化するため、表中の数値は当該年度末の収蔵量を示す。

付表4 埋蔵文化財調査室刊行物

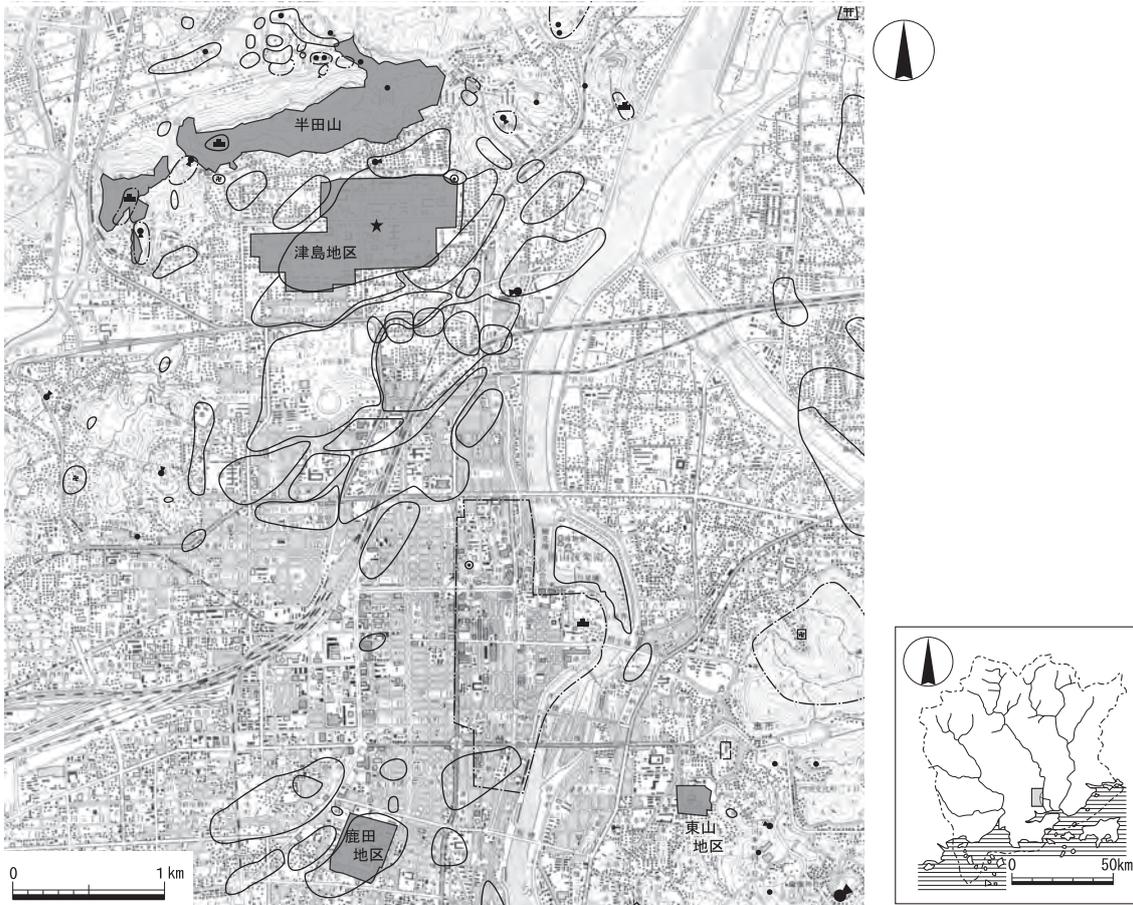
番号	名	称	発行年月日
1	岡山大学構内遺跡調査研究年報1	1983年度	1985年2月
2	岡山大学構内遺跡調査研究年報2	1984年度	1985年3月
3	岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡（AW14区）の発掘調査	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第1集	1985年5月
4	岡山大学津島地区構内遺跡発掘調査報告Ⅱ（農学部構内BH13区他）	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第2冊	1986年3月
5	岡山大学構内遺跡調査研究年報3	1985年度	1987年3月
6	岡山大学構内遺跡調査研究年報4	1986年度	1987年10月

付表5 埋蔵文化財調査研究センター刊行物（2019年3月まで）

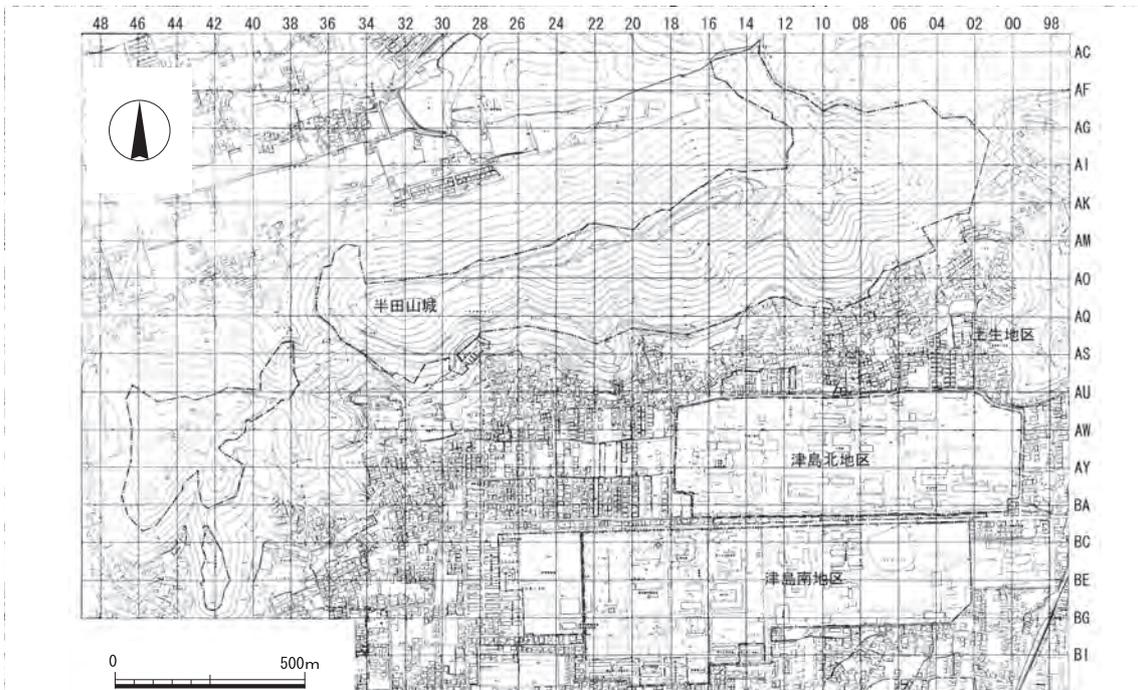
番号	名	称	発行年月日
7	鹿田遺跡Ⅰ	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊（鹿田遺跡第1次・2次調査）	1988年3月
8	岡山大学構内遺跡調査研究年報5	1987年度	1988年10月
9	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第1号	1988年10月
10	鹿田遺跡Ⅱ	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊（鹿田遺跡第3次・4次調査）	1990年3月
11	岡山大学構内遺跡調査研究年報6	1988年度	1989年10月
12	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第2号	1989年8月
13	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第3号	1990年2月
14	岡山大学構内遺跡調査研究年報7	1989年度	1990年11月
15	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第4号	1990年7月
16	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第5号	1991年3月
17	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第6号	1991年8月
18	岡山大学構内遺跡調査研究年報8	1990年度	1991年12月
19	津島岡大遺跡3	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊（津島岡大遺跡第3次調査）	1992年3月
20	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第7号	1992年3月
21	岡山大学構内遺跡調査研究年報9	1991年度	1992年12月
22	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第8号	1992年8月
23	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第9号	1993年3月
24	鹿田遺跡3	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊（鹿田遺跡第5次調査）	1993年3月
25	岡山大学構内遺跡調査研究年報10	1992年度	1993年12月
26	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第10号	1993年11月
27	津島岡大遺跡4	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊（津島岡大遺跡第5次調査）	1994年3月
28	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第11号	1994年3月
29	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第12号	1994年10月
30	岡山大学構内遺跡調査研究年報11	1993年度	1995年2月
31	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第13号	1995年3月
32	津島岡大遺跡5	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第8冊（津島岡大遺跡第8次調査）	1995年3月
33	岡山大学構内遺跡調査研究年報12	1994年度	1995年12月
34	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第14号	1995年10月
35	津島岡大遺跡6	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第9冊（津島岡大遺跡第6次・7次調査）	1995年12月
36	津島岡大遺跡7	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第10冊（津島岡大遺跡第11次調査）	1996年2月
37	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第15号	1996年3月
38	岡山大学構内遺跡調査研究年報13	1995年度	1996年10月

番号	名 称	発行年月日
39	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第16号	1996年10月
40	鹿田遺跡4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊 (鹿田遺跡第6次調査)	1997年3月
41	津島岡大遺跡8 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第12冊 (津島岡大遺跡第13次調査)	1997年3月
42	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第17号	1997年3月
43	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第18号	1997年9月
44	岡山大学構内遺跡調査研究年報14 1996年度	1997年11月
45	今、よみがえる古代 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年	1997年11月
46	津島岡大遺跡9 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第13冊 (津島岡大遺跡第14次調査)	1997年12月
47	津島岡大遺跡10 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第14冊 (津島岡大遺跡第9次調査)	1998年3月
48	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第19号	1998年3月
49	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第20号	1998年10月
50	岡山大学構内遺跡調査研究年報15 1997年度	1999年1月
51	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第21号	1999年3月
52	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第22号	1999年9月
53	岡山大学構内遺跡調査研究年報16 1998年度	2000年1月
54	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第23号	2000年3月
55	福呂遺跡I 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第15冊 (福呂遺跡第1次・2次調査)	2000年3月
56	岡山大学構内遺跡調査研究年報17 1999年度	2000年8月
57	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第24号	2000年9月
58	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価・外部評価報告書	2000年12月
59	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第25号	2001年3月
60	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第26号	2001年8月
61	岡山大学構内遺跡調査研究年報18 2000年度	2001年10月
62	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第27号	2002年3月
63	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第28号	2002年9月
64	津島岡大遺跡11 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊 (津島岡大遺跡第10次・12次調査)	2003年3月
65	津島岡大遺跡12 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊 (津島岡大遺跡第19次・21次調査)	2003年3月
66	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2001	2003年3月
67	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第29号	2003年3月
68	津島岡大遺跡13 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第18冊 (津島岡大遺跡第27次調査)	2003年5月
69	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第30号	2003年8月
70	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第31号	2004年2月
71	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002	2004年3月
72	津島岡大遺跡14 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第19冊 (津島岡大遺跡第15次調査)	2004年3月
73	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第32号	2004年9月
74	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2003	2004年12月
75	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第33号	2005年3月
76	津島岡大遺跡15 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第20冊 (津島岡大遺跡第26次調査)	2005年3月
77	津島岡大遺跡16 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊 (津島岡大遺跡第17次・22次調査)	2005年3月
78	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第34号	2005年10月
79	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第35号	2006年3月
80	津島岡大遺跡17 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第22冊 (津島岡大遺跡第23次・24次調査)	2006年3月
81	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004	2006年3月
82	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第36号	2006年10月
83	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2005	2007年3月
84	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第37号	2007年3月
85	鹿田遺跡5 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊 (鹿田遺跡第7次・8次調査)	2007年3月
86	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第38号	2007年10月
87	津島岡大遺跡18 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第24冊 (津島岡大遺跡第28次調査)	2008年3月
88	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006	2008年3月
89	岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの20年 - 自然と人間、地中に埋もれた命の対話 -	2008年3月
90	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第39号	2008年3月
91	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第40号	2008年9月
92	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007	2008年12月
93	津島岡大遺跡19 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第25冊 (津島岡大遺跡第30次調査)	2009年3月

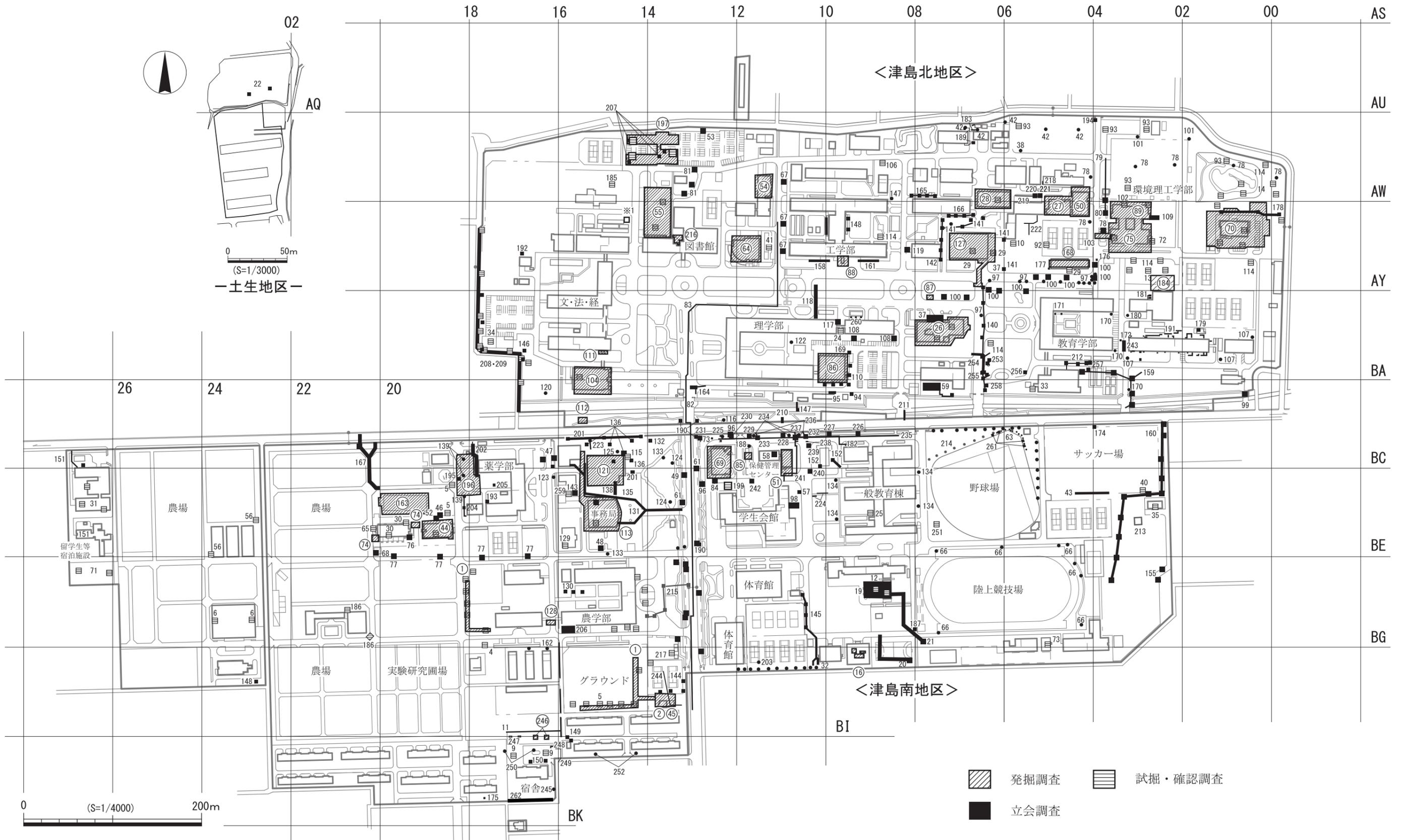
番号	名 称	発行年月日
94	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第41号	2009年3月
95	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2008	2010年2月
96	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第42号	2010年2月
97	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第43号	2010年3月
98	鹿田遺跡6 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第26冊 (鹿田遺跡第13次・15次調査)	2010年8月
99	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第44号	2010年12月
100	津島岡大遺跡20 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第27冊 (津島岡大遺跡第32次調査)	2011年3月
101	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第45号	2011年3月
102	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2009	2011年3月
103	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第46号	2011年11月
104	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第47号	2012年3月
105	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2010	2012年3月
106	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第48号	2012年9月
107	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2011	2013年1月
108	鹿田遺跡7 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第28冊 (鹿田遺跡第10次、18次調査B・C地点)	2013年3月
109	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第49号	2013年3月
110	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第50号	2013年10月
111	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2012	2013年12月
112	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第51号	2013年12月
113	鹿田遺跡8 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第29冊 (鹿田遺跡第14次調査)	2014年3月
114	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第52号	2014年12月
115	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第53号	2015年3月
116	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2013	2015年3月
117	津島岡大遺跡21 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第30冊 (津島岡大遺跡第33次調査)	2015年3月
118	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第54号	2015年10月
119	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第55号	2016年2月
120	鹿田遺跡9 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第31冊 (鹿田遺跡第23次調査)	2016年2月
121	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2014	2016年3月
122	吉備の弥生時代	2016年3月
123	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第56号	2016年12月
124	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2015	2017年3月
125	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第57号	2017年3月
126	鹿田遺跡10 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第32冊 (鹿田遺跡第9・11次調査)	2017年3月
127	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第58号	2017年10月
128	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第59号	2018年1月
129	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2016	2018年2月
130	鹿田遺跡11 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第33冊 (鹿田遺跡第24次調査)	2018年3月
131	鹿田遺跡12 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第34冊 (鹿田遺跡第20A・25次調査)	2018年3月
132	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第60号	2018年8月
133	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第61号	2019年3月
134	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2017	2019年3月
135	鹿田遺跡13 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第35冊 (鹿田遺跡第26次調査)	2019年3月
136	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第62号	2019年12月
137	鹿田遺跡14 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第36冊 (鹿田遺跡第17次調査)	2020年3月
138	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2018	2020年3月
139	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第63号	2020年3月



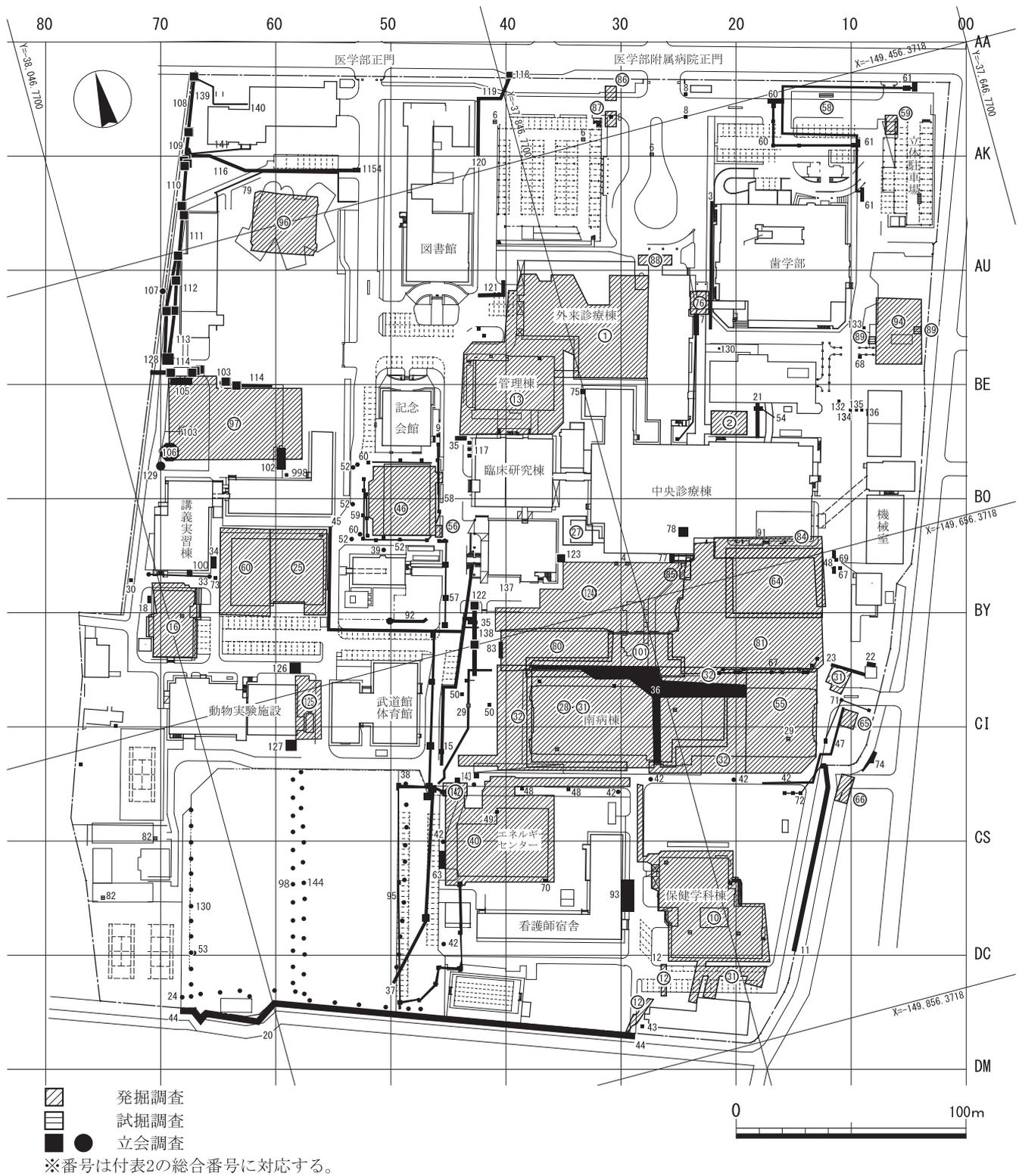
付図1 岡山大学の位置と周辺の遺跡分布 (縮尺1/50,000・1/3,750,000)



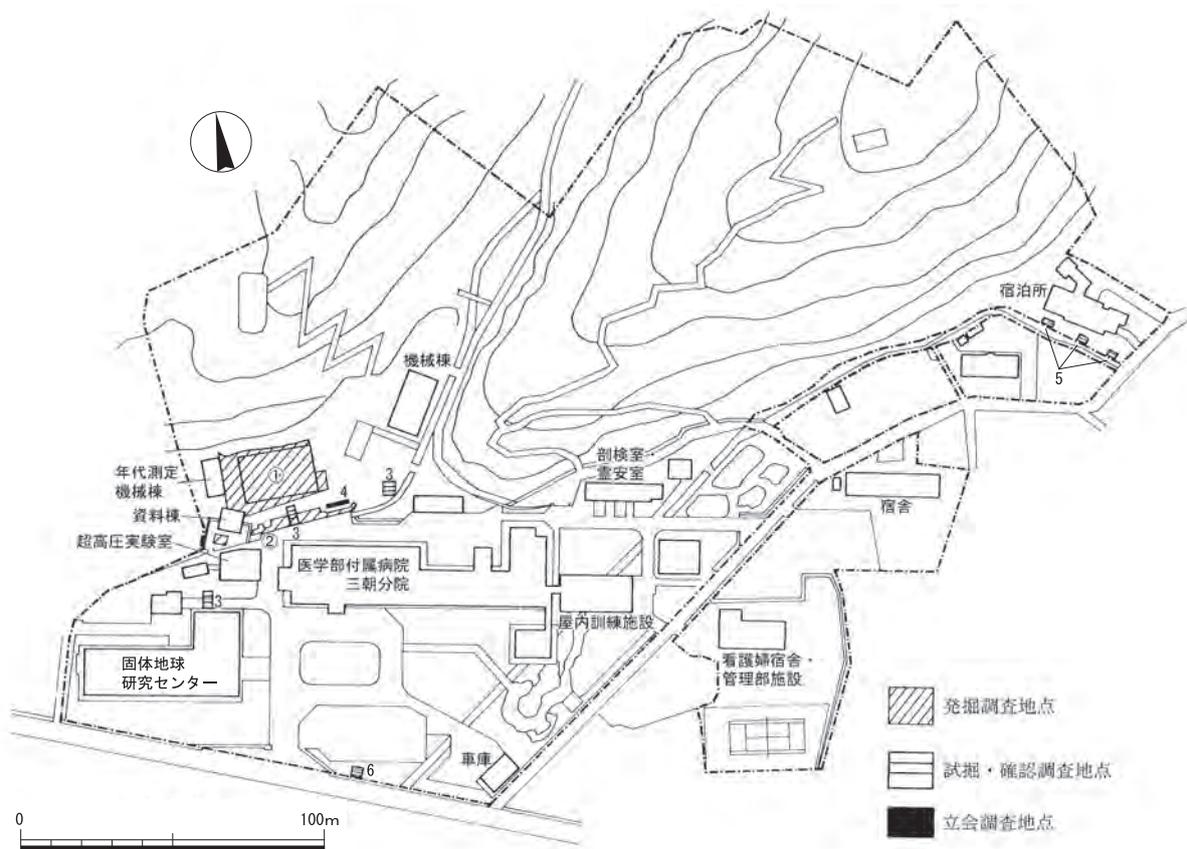
付図2 津島地区全体図 (縮尺1/20,000)



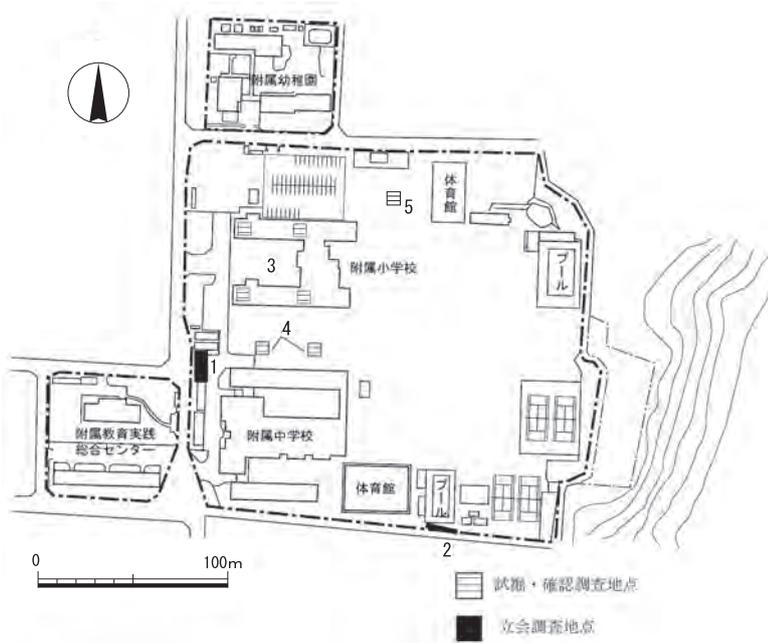
付図3 2018年度以前の調査地点【1】—津島地区— (縮尺 津島地区：1/4,000・土生地区：1/3,000) ※番号は付表2の総合番号に対応する。



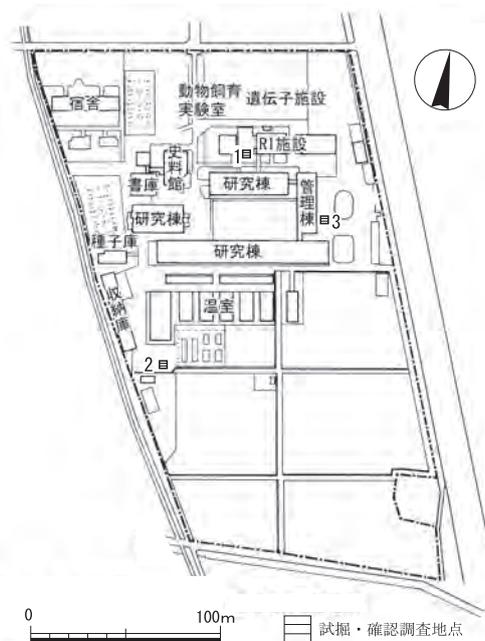
付図4 2018年度以前の調査地点【2】—鹿田地区— (縮尺1/2,500)



付図5 2018年度以前の調査地点【3】
 -三朝地区- (縮尺1/2,500)



付図6 2018年度以前の調査地点【4】
 -東山地区- (縮尺1/4,000)



付図7 2018年度以前の調査地点【5】
 -倉敷地区- (縮尺1/4,000)

第Ⅱ部

津島岡大遺跡第38次発掘調査報告

—津島地区共同溝取設工事に伴う発掘調査—

第1節 調査の経緯と経過

1. 調査の経緯
2. 調査体制
3. 調査の経過

第2節 調査の記録

1. 遺跡の位置と周辺の調査状況
2. 層序と地形
3. 遺構
4. まとめ

例 言

1. 本報告は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、共同溝取設工事に伴って実施した津島岡大遺跡第38次調査の発掘調査報告である。
同調査地点は、岡山県岡山市北区津島中3丁目1番1号並びに同1丁目1番1号に所在する。
津島岡大遺跡第38次調査地点は、津島地区構内座標において北地点はBA13区に、南地点はBB13区に位置する。
発掘調査期間は2020年5月11日～27日、調査面積は17.4m²（北地点：9m²、南地点：8.4m²）を対象とした。
2. 発掘調査並びに報告書作成は、埋蔵文化財調査研究センター運営委員会の指導のもとに行われた。委員諸氏に御礼申し上げる。
3. 調査時の遺構実測・写真撮影は岩崎志保が行った。
4. 報告書の執筆・浄写は岩崎が行った。
5. 編集は、山本悦世（副センター長）・清家章（調査研究室長）の指導のもとに、岩崎が担当した。
6. 本報告をもって正式報告とする。
7. 本報告に掲載した調査の記録・出土遺物はすべて当センターで管理している。

凡 例

1. 本報告で用いる高度値は海拔標高であり、方位は国土座標第V座標系（世界測地系）の座標北である。
2. 土層注記では鉄分をFe、マンガンをMnで表記した。
3. 基本土層の本文表記は〈 〉を使用した。

第1節 調査の経緯と経過

1. 調査の経緯

岡山大学津島地区における基幹環境整備の一環として、高圧ケーブル敷設のための共同溝取設工事が計画された。掘削深度が深い道路・用水路を横断する部分についてはトンネル推進工法にて実施し、遺跡の破壊は小規模にとどまることとなった。しかし発進立坑と到達立坑の2箇所の立坑については、やや規模の大きな工事計画が示された。可能な限り平面積の縮小を求めた結果、両立坑の規模は、それぞれ3.0×3.0m（面積9m²）となり、これを発掘調査の対象とした。以下、北側到達立坑を北地点、南側発進立坑を南地点として記述する。

調査は、調査研究員1名が担当することとなった。

2. 調査体制

調査主体 岡山大学（学長 横野博史）

調査担当 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（センター長 渡邊和良）

調査員 岩崎志保（助教 調査主任）

運営委員会

センター長	渡邊和良	大学院医歯薬学総合研究科	大橋俊孝
副センター長	山本悦世	大学院社会文化科学研究科	清家 章
大学院社会文化科学研究科	今津勝紀		（調査研究室長）
大学院社会文化科学研究科	松本直子	大学院自然科学研究科	野坂俊夫
大学院環境生命科学研究科	加藤謙司	事務局施設企画部長	岩永 仁

3. 調査の経過

発掘調査は北地点、南地点の順に行った。北地点の調査は2020年5月11日に開始した。

造成土及び周辺調査で状況が明らかな近代層については、壁面の崩落を防ぐために5×5mの範囲で除去し、近世層以下について3×3mの範囲の発掘調査に入った。断面観察で分層した層毎に調査を進め、最終的に現地表面から3.1mの深さ（標高1.5m）まで調査を行い、5月19日に終了した。

南地点の調査は5月21日に開始した。計画では北地点と同様に3×3mの範囲が調査対象であったが、実際に現地で見ると南北長3mを取ることは障害物があり難しく、調査対象面積を南北2.8m×東西3.0mの範囲に変更した。造成土及び状況が明らかな近代層については3.0×4.2mの範囲で除去した。その際に、旧日本陸軍が敷設した水路が造成土中に残存していたため、これを記録した後、同水路造成時の攪乱土も併せて除去した。近世層以下について、2.8×3mの範囲を、断面観察で分層した層毎に調査を進めた。現地表面から2.3mまでの深さ（標高2.2m）まで調査を行い、5月27日に終了した。

本調査の調査期間は2020年5月11日～27日の13日間である。調査面積は北地点9m²、南地点8.4m²、合計17.4m²であった。発掘調査は調査員1名が対応した。また両地点において宮崎大学宇田津徹朗氏の協力を得て、各層の土壌サンプルを採取し、プラント・オパール分析を実施した¹⁾。

註

1) 宇田津徹朗2021「津島岡大遺跡第38次調査地点のプラント・オパール分析」『紀要2019』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（本書第1章第3節2）

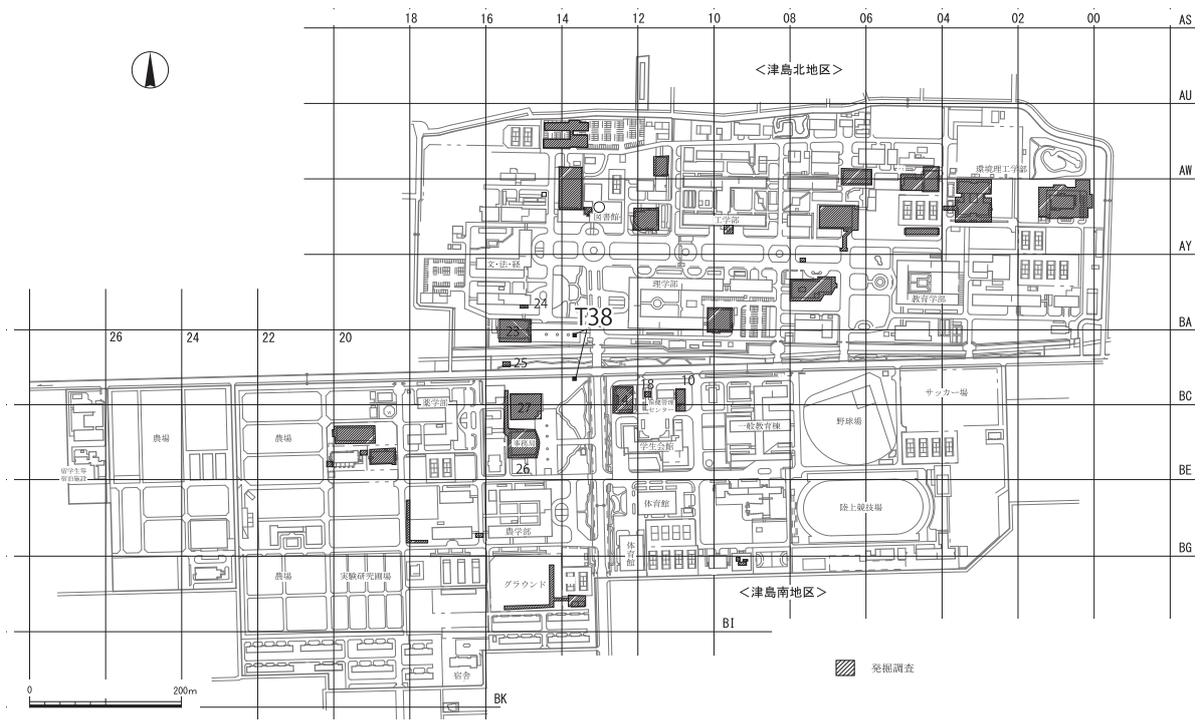


図43 津島岡大遺跡構内座標と各調査地点

第2節 調査の記録

1. 遺跡の位置と周辺の調査状況

津島岡大遺跡は岡山市津島中の岡山大学津島地区構内に所在する遺跡の総称である。その位置は岡山県中央部を走る旭川が形成した岡山平野の北部にあたり、平野部北端を区切る半田山丘陵裾部に立地する。

本発掘調査地点は岡山大学津島キャンパスの中央に位置する(図43)。構内座標では北地点はBA13区に、南地点はBB13区にあたる。北地点・南地点は、津島キャンパス内を東西に走る市道と座主川を挟んで対峙する位置にあり、両地点は60m程離れている(図44)。

周辺の既調査地点では、北地点の西側で第23次発掘調査が実施されている¹⁾。縄文～弥生時代についてみると、微高地上では弥生時代早期～前期の溝、谷地形部では河道とその脇に早期の貯蔵穴が報告されて

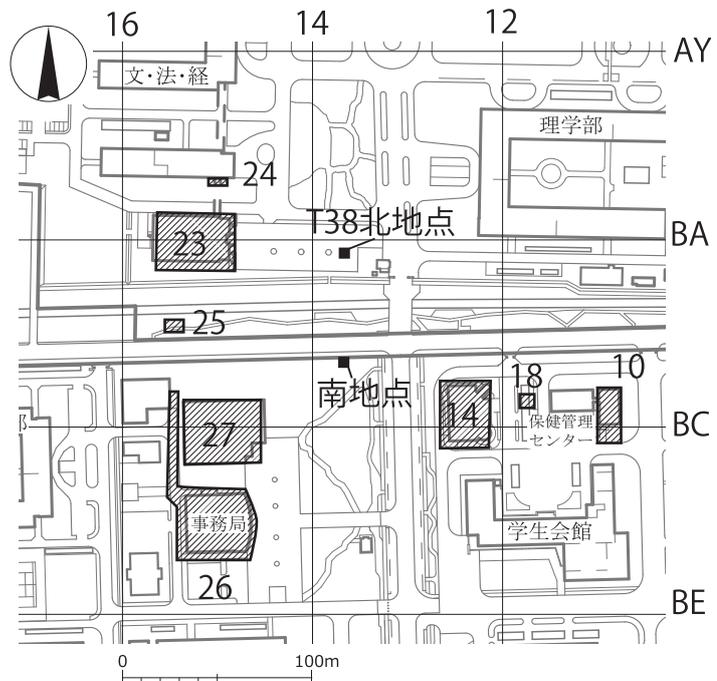


図44 調査地点の位置

いる。南地点の南西では第26次²⁾・第27次³⁾発掘調査が実施されている。両調査地点では微高地上で縄文時代中期～後期の土坑・炉のほか、縄文時代後期～弥生時代早期の谷地形と、早期の貯蔵穴の存在が報告されている。

註

- 1) 野崎貴博2006『津島岡大遺跡』17 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第22冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 2) 光本順2007『津島岡大遺跡』15 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第20冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 3) 高田浩司2003『津島岡大遺跡』13 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第18冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

2. 層序と地形

(1) 層序

土層の堆積は13層に分けることができた(図45・46)。北地点・南地点間は約60mの距離があるものの、基本的な堆積関係は同様であり、合わせて記述する。いずれの層においても出土遺物は極めて希薄であり、各層の時期については周辺の既調査成果を参考にしている。

〈1層〉 1907～1908(明治40～41)年に陸軍駐屯地建設に伴うマサ土および現代までの造成土である。上面の標高は北地点で4.69m、南地点で4.14mを測る。

〈2層〉 青灰色粘質土で、近代の耕作土である。北地点では南北方向の畝を確認した。南地点では旧陸軍水路による攪乱のため堆積を確認できなかった。北地点の同層上面の標高は3.3mである。

〈3層〉 褐灰色砂質土で、近世の耕作土である。鉄分の沈着面が観察され、鉄分・マンガンの含有状況から3層に細分した。南北両地点で上面の標高は3.1mである。

〈4層〉 淡灰褐色砂質土で、中世の耕作土と考えられる。鉄分を多く含む。両地点で上面の標高は2.85m前後を測る。

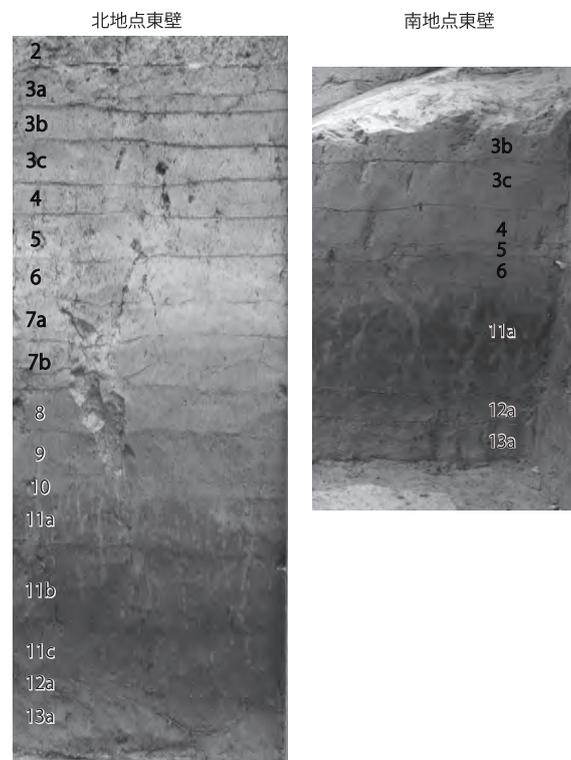


図45 土層断面

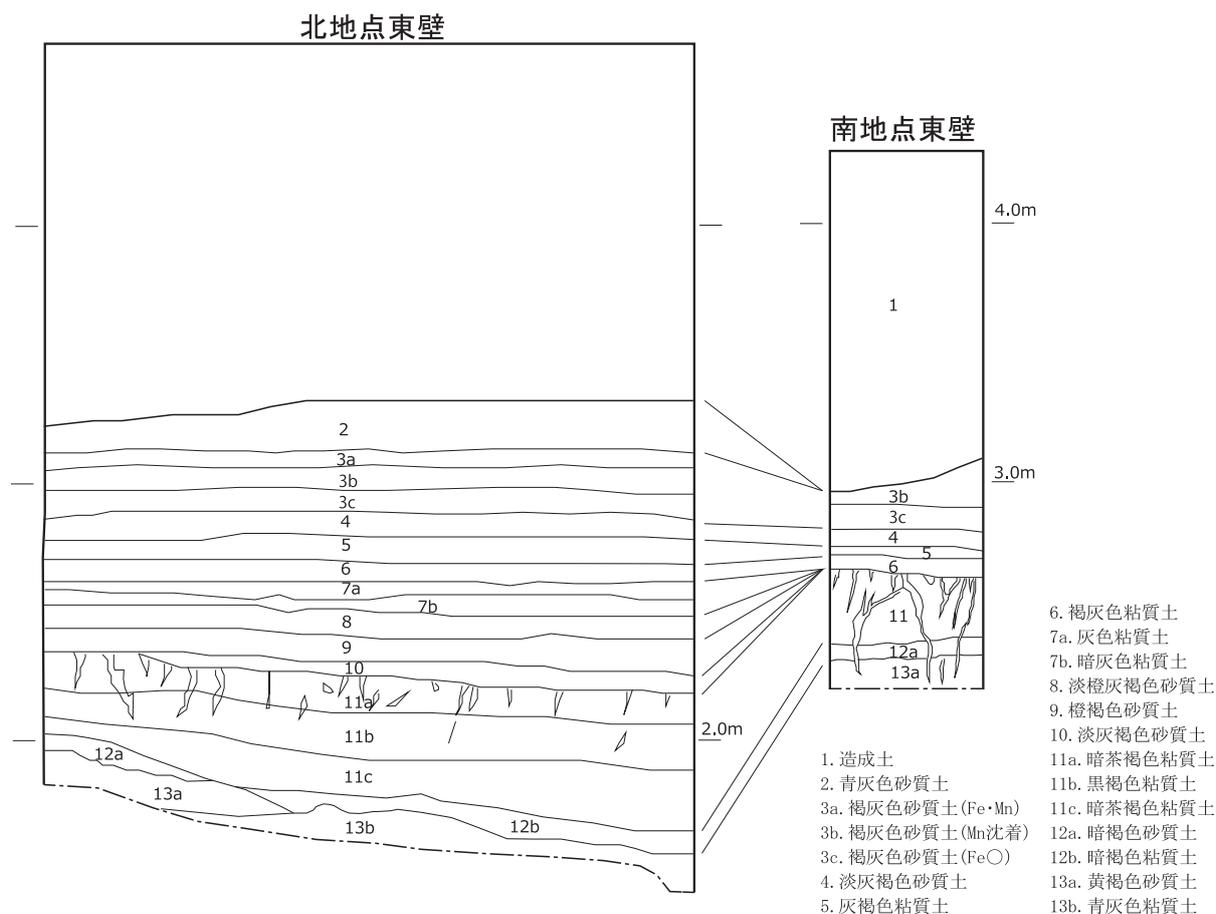


図46 土層柱状図

- 〈5層〉 灰褐色粘質土で細砂を混入する。中世の耕作土と考えられる。両地点で上面の標高は2.78m前後を測る。
- 〈6層〉 褐灰色粘質土で、中世の耕作土と考えられる。両地点で上面の標高は2.7m前後である。
- 〈7層〉 灰色～暗灰色粘質土で、古代の耕作土と判断した。北地点でのみ確認した土層であり、土質により2層に分けた。7a層は灰色粘質土であるのに対して、下半の7b層は暗灰色粘質土を示しており、黒色化の進行が認められる。下面には鉄分が沈着している。こうした状況から7層下半では植物質が未分解状態にある湿地環境が想定される。7a層上面の標高は2.59～2.63mを測る。
- 〈8層〉 淡橙灰褐色砂質土で鉄分をわずかに含む。弥生時代～古墳時代の時期と考えられる。上面の標高は2.52mを測る。北地点のみで確認した。
- 〈9層〉 橙褐色砂質土で鉄分を含み、黄褐色砂ブロックを混入する。弥生時代～古墳時代と考えられる。上面の標高は2.44mを測る。北地点のみで確認した。
- 〈10層〉 淡灰褐色砂質土で白色砂をブロック状に混入する。11層上面が一段下がる緩斜面のみで確認された。上面の標高は2.25～2.35mを測る。北地点で堆積を確認した。
- 〈11層〉 暗茶褐色～黒褐色粘質土で、津島地区において弥生時代早期～前期の鍵層である「黒色土」層にあたる。堆積厚の厚い北地点では土質や混入物から3層に細分した。〈11a層〉は暗茶褐色粘質土で、植物生痕が多く観察され、植物が繁茂していた状況が予想される。〈11b層〉は黒褐色粘質土でマンガンを多く含む。〈11c層〉は暗茶褐色粘質土で、生痕はこの層までは達していない。〈11層〉上面の標高は北地点では2.29～2.35mで、北西か

ら南東方向に傾斜が見られる。一方、南地点では〈11a層〉はほぼ水平堆積であり、標高は2.65mを測る。植物生痕は北地点よりも多く観察され、深いものは〈13層〉にまで達する。

〈12層〉 暗褐色を呈する砂質～粘質土で、後述する〈13層〉への漸移層と判断される。土質から2層に分けた。〈12a層〉は暗褐色砂質土で、北地点では標高1.85～2.05m、南地点では標高2.4mを測る。〈12b層〉は北地点の南半で確認される暗褐色粘質土である。上面は標高1.62～1.8mを測り、南東に向かって下がる。〈12a層〉・〈12b層〉の違いは堆積レベルの違いであり、本来は同一層と考えられる。

〈13層〉 黄褐色～青灰色を呈する砂質～粘質土で、縄文時代の基盤層である。土質から2層に分けた。〈13a層〉は淡黄褐色砂質土で、北地点で上面の標高は1.75～2.1mを測る。北西から南東に向かって傾斜して粘質が増し、南半では標高1.75m以下で青灰色粘質土の〈13b層〉へと変化する。南地点では〈13a層〉のみの堆積が認められ、上面の標高2.33mを測る。

(2) 地形

本調査地点の縄文時代基盤層〈13層〉の地形は、北地点北西部と南地点に標高2.1～2.3mを測る微高地があり、その間となる北地点南東部は、標高1.75mまで落ち込み(図46)、低位部へと向かうことがわかった。

また弥生時代早期～前期にあたる〈11層〉(黒色土)では、観察された多くの植物生痕から水田ではなく荒地の状況が窺われた。この点については、土壌のプラント・オパール分析から同層にはタケ亜科のプラント・オパールが主体であることがわかり、発掘調査と整合する結果が得られている。

古代の耕作土と考えられる〈7層〉は灰色粘質土であるが、下半の〈7b層〉は黒色を帯びた暗灰色であり、〈7b層〉堆積時には湿地状であったものが、その後耕作地として利用されていった状況が窺える。〈7層〉～〈10層〉は北地点でのみ確認され、南地点で〈11層〉上面に中世層である〈6層〉が堆積する。南北両地点で高さが揃うのは、標高2.6mを測る〈6層〉下面の段階である。

3. 遺構

本調査南地点では、造成土中に、旧日本陸軍が敷設した水路の一部を確認した(図47)。南調査地点の北側に東西に走る水路で、両側を3段の石積みによって構成されている。本調査地点では南側の石組みが検出された。上面の標高は3.8m、底面の標高2.95mを測る。旧陸軍の水路は構内の複数箇所を確認されており、本来は水路の北側に土塁が伴う構造であることがわかっている。今回検出した水路の東側は、2013年度立会調査でも確認されている¹⁾。旧日本陸軍の関連施設は1907年頃に敷設されたものであり、津島キャンパス各所で記録を行っている²⁾。

そのほかに北地点では近代〈2層上

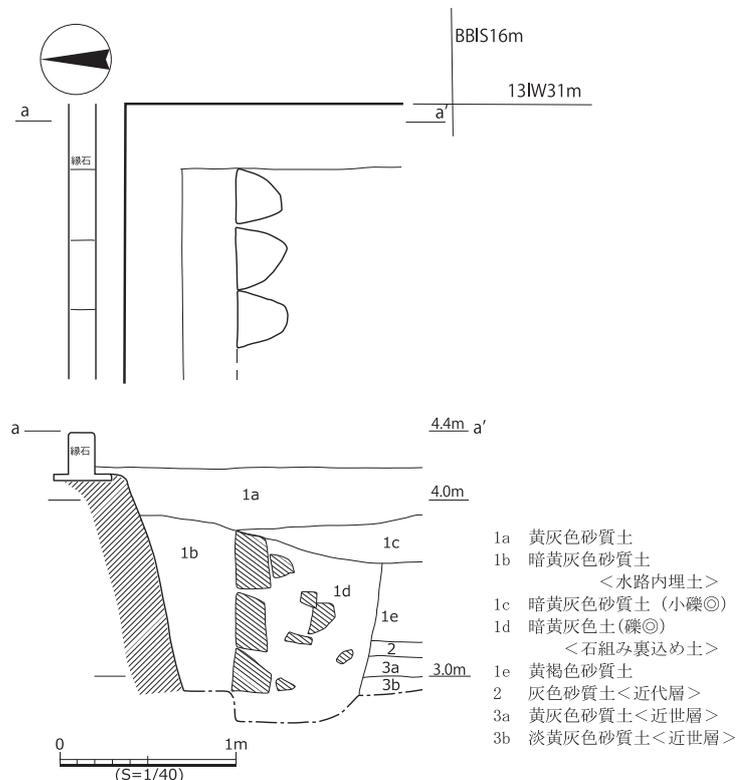


図47 南地点・旧陸軍水路実測図

面)において南北方向の畝を確認した。近世以前の遺構は検出できず、出土遺物も僅少であった。

註

- 1) 南健太郎2015「NTT引き込み配管取設工事」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2013』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 2) 南健太郎2013「文・法・経フェンス改修工事に伴う調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2011』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

4. まとめ

本調査は狭小な範囲であり、遺構・遺物ともに希薄であったものの、これまでの調査成果も併せて、本遺跡の古環境を考える情報を得ることができた。以下に3つの点を挙げ、まとめとする。

まず基盤層〈13層〉の地形は、北地点においては北西側の微高地部(標高2.1m)～低位部(標高1.75m)と南東へ傾斜する地形が確認された一方、南地点では〈11層〉上面の標高2.3mを測る微高地であった。両地点間で起伏ある地形が想定される。周辺調査地点では、北地点西に位置する第23次調査地点で、北東部に微高地(標高2.3m)と調査区北東から南西に流れる河道(底面標高0m)が検出されている。この河道の東側は低位部が続くと予想されたがそうではなく、本調査北地点北西部に微高地が形成され、すぐに南東部に向かい低くなる。このことから、この微高地は狭小なものと考えられる。こうした起伏ある地形は、本地点南西に位置する第26・27次調査地点においても確認されている。

次いで〈11層〉の堆積環境についてである。本遺跡では、弥生時代早期～前期に形成された〈11層〉上面において弥生時代前期の水田畦畔が検出されており、本調査地点周辺でも第27次調査地点で確認されている。しかし本地点では耕作地としては利用されず、土壌分析の結果もあわせ、タケ等の植物が繁茂する荒地地であったことが判明した。〈11層〉が形成される環境にあっても水田としては選択されない地点があることになる。こうした土地利用状況について、遺跡全体を通じた検討が必要である。

最後に古代以降は、土層の状況並びに土壌分析結果により、本地点は耕作地として利用されていることがわかる。その画期は〈7層〉堆積段階にある。〈7層〉の状況は下半において湿地環境が想定されるのに対し、上半は耕作土が堆積しており、荒地地を耕地化した様相がうかがえた。〈6層〉段階では、南地点で〈11層〉上に〈6層〉が堆積する状況に認められるように、大きな断絶がある。長く荒地地で放置されていたところが、〈7層〉段階で耕地化が始まり、耕地開発が広範囲で行われたと考えられる。〈6層〉～〈2層〉の堆積をみると、北・南地点でほぼレベルも揃い、一帯が平坦化して耕作地として利用されたことがわかる。

報告書抄録

ふりがな	おかやまだいがくまいぞうぶんかざいちょうさけんきゅうせんたーきょう2019							
書名	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2019							
掲載箇所	だいふだいしょう つしまおかだいいせきだい38じはつちつちようさほうこく 第Ⅱ部第1章 津島岡大遺跡第38次発掘調査報告							
編著者名	岩崎志保							
編集機関	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒700-8530 岡山県岡山市北区津島中3丁目1番1号							
発行年月日	2021（令和3）年3月19日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	世界測地系	世界測地系			
つしまおかだいいせき 津島岡大遺跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 きたくつしまなか 北区津島中 1-1-1・ 3-1-1	33201		34° 41' 16" 34° 41' 15"	133° 55' 96"	20200511 ~0527	17.4m ²	共同溝 取設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
津島岡大遺跡 第38次 調査	生産遺跡	近代		畝				

Copyright©Archaeological Research Center, Okayama University

Printed in Okayama, Japan

2021年3月19日 印刷

2021年3月19日 発行

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要
2019

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山市北区津島中三丁目1番1号
(086) 251-7290

印刷 友野印刷株式会社



**BULLETIN of
Archaeological Research Center
Okayama University
2019**

Archaeological Research Center, Okayama University
3-1-1 Tsushima-Naka Kita-ku Okayama-city, 700-8530 Japan
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html>